

抑當寺救世觀菩薩埵の御寶前に鎮座まします福祿壽靈神は元來濱村祐專寺に安置し奉りし靈尊神なりしを故有て當寺ニ遷座し奉る所也それ福祿壽靈人と申は南極星の神靈にして北辰妙見尊星と南北に對營し天地運搖の樞機として世界を護持し給ふ殊更南方如意寶珠の本體にして諸有衆生に福祿を與へ壽命長延を守り給ふ靈神也故に御名をも福祿壽と稱じ奉る也情^{ツラクソモ}惟みるに神は人の敬ふによつて靈驗を顯はし人は神の徳を蒙りて運を添ふ然ればかゝる靈神といへ共其所を得給はされは神威嚴ならざるゆへ神徳を明らかならす此故ニ今般別殿を經營して神靈を仰き奉り福祿剛運壽命延長子孫繁昌の大利益を祈り奉らんと欲す

……以下原本空白……

○坂町裏天神

〔編者曰ク原本表題アツテ記事ナシ〕

○法友寺

〔編者曰ク原本表題アツテ記事ナシ〕

○坂町泥龜屋裏

法善寺前東へ入北がは

元伏見坂町に泥龜屋裏といふ名高きあり寛延の頃此うらに川魚商人住けるか日毎に大坂の町々を川魚を賣歩行一日道頓堀側にて泥龜を賣ける内に數一ツ不足せしを彼商人疑念を生じ定めて此中の人盜み隠したるなるべしと思ひ夫ぞとはいはぬ斗りに罵りければ元來聞かぬ氣質の土地なるゆへみなノゝ大きに立腹して其邊を尋れ共更に知れず紛失の泥龜もしも逃行たるならば今爰へ出よたとへいか程高直にても我々が買取て放ち遣るへし疑がはれし一言中々金錢に換がたしと口々にいふ時に不思議や以前の泥龜何方よりは立戻りけん這出て逃る氣色もなく大勢の中に蹲まり首を出して人々の顔を詠め居る蟲魚の類ひすら命を惜むは生あるものゝならひにして無理ならず

直段いか程なるやと尋るに商人心裏に思ふやう此泥龜何程高くいふ共買取ねば成らぬ時宜也と足元を見込み直段は壹貫文なりといふ皆々それは餘り高直也といへ共商人更に一錢も負されども是非なく其直段に買取て直さま道頓堀へ放ち遣らん太義なからと彼商人に放させけるに川端へ持行うちに又々悪心萌し放ス跡に見せて傍に有合ふ石を川へ投込み泥龜はおのが懐へ密に隠し入れて左あらぬ跡にて右の價壹貫文を受取けふは思はぬ徳を得たりと心裏に笑みを含みツ、我家へ立歸り其夜又餘人へ五百文に賣渡して料理に掛りけるに泥龜首を出して持たる出及庖丁に喰付を少しも怖れずこぢ放シ首打落して何の苦もなく料理して心祝ひの寢酒など心よく飲て打臥けるが其夜四更の頃頻りに苦しむ聲聞えけるゆへ隣家の者大きに驚きかけ來り門口の戸を押破り見てあれは彼商人咽のあたり血に染て死シ居たり早速家主へ知らせて其よし御届申上しかば檢使御越有て疵口を吟味あるに泥龜の切首咽ふえを喰破りたる跡不審思召けれ共外に子細も無之ゆへ死骸取片付ケ被仰付相濟ぬ誠に非道の欲に耽り忽泥龜の爲に命を失ひ殺生の報ひ恐るべし夫より此處を泥龜屋裏と綽號して後世に因果の道理をふらしむる一助と成りぬ

……以下原本空白……

○奴塚

先年大坂城中に喧嘩の事ありて奴共五六十人も殺害なし道頓堀の墓に塚一ツ穴へ築込メ奴塚といふ寛文改正の大

坂の圖に見えたれ共今はなし

○七軒茶屋

享保改正の大坂の圖ニ千日竹林寺前東側に七軒茶屋といふあり院本寛延貳年巳三月豊竹座八重霞浪花濱萩道行妹脊鳥ニ

色のかほりや無常のけふり煩惱すなはち菩提ぞと生死の坂町打過て六ツのちまたに急ぐなる七軒茶屋にぞ

休らひぬ

……以下原本空白……

○芝居側

難波鑑卷之壹 春の部に

道頓堀 初芝居

初芝居といふよりも其名めづらしく心もうき立物は道頓堀江の川波うちはやす太鼓の音唐土は知らず日本橋のは

攝陽奇觀 卷之七

しのうへ老若男女きせると火繩に辨當提重箱の上に毛氈繪筵をからみ付させとちや遅しとはせ來る粧ひは雲のこ
とく霞に似たり抑役者の名は知らね其年の内の顔みせの頃よりそんじやうそれと語りつとふるを聞よりもなつか
しく鼠戸のあたりに徘徊して爰に來る人々の形りふり品かたちの異様なる有様を見るに我まれる人多くこなたよ
りはそれと思へど予が姿を見付られじと志のふの山の山守も人目のあみの繁きにもれ更にとがむる人もなしたゞ
芝居の見もの見むよりはまされる物をも思へど物の音に心うつりはやくも内に入らんことを思ふされば樂器をと
れば音をたてんことをといへるも餘所ならず内に入侍りてこゝらの人に案内して居けるにまだ狂言もはじまら
ず其中に人々とありかゝりと四方山の間はずかたりをなしけるが側なる人のいひけるをきけは此所を道頓堀とい
ふは人みな此地に來りて歌舞妓若衆の遊興に入事の頓ひらきがゆへにかく名づけ侍ると也其むかし若衆かぶきのあり
し時は僧俗によらず貴となく賤となく價を以て情をかけしゆへ錢あれば此市に立んこと易しと御寺法師は布施の
包銀をは花代と捧げ町の一番子は親の譲りの巾着のかねごとに添寢の床の袖枕口よりかねを吸とられ或は家財を
失ひ或は所を立去りて身を亡す人多し是みな此道の長じぬる媒なれば天に口なし人を以ていはせよと誰か披露は
なけれ共去し承應元年初秋の頃かぶき若衆の額髪をとらせ悉く野老となし旅芝居をかける子供までさがし出させ
給へば普天の下何國にかかゞまり住べきにあらねはおのが生縁に立歸りえもいはれぬことわざのみにて落穂ひろ
ふありさま見る目もいと堪がたしあかしより此道すこしことさめてけりあかれども芝居の事はとゞめさせ給はね
ば其後能狂言と品をかへ右近左近が海道くだりを舞しより人また二人靜の舞ぶりもかくやとめてはやして群集し
ぬと語るが内に初めよくと言れば追つけはじめぬ扱はしかゝりの方を見やれば年のよはひは二八ばかりの粧ひ

にてなよくと楊柳の春風にまたがふ風情にて出るといなやはおでやつたあつた物ではない妙音菩薩の御來迎
かと譽れはこなたにむかひ袖うちかゝけてめくばせして一たひえめる顔ばせはさながら梨花の一枝春雨にほころ
ぶるかと思はる又二九はかりにもあまりたると見えしが續ひて出ければ洞庭の秋の月これくと譽るもおかしふ
くるもよしといふことにや其外色をあらそひ品を分ちいづれも劣らぬ中に霜葉は二月の花よりもくれなる也とい
はまほしきもあれど其名をいはず凡人間百ににみたず常に千歳の愁ひをいなく世中に何ぞ男色にめで、遊興を催し
侍らんやされども狂言の其品々を見るにざれめきたる事どもにておさなき事共多し古しへは佛神の本縁をもとり
まじへうたひ舞ければ人もおもしろがりあはれがりしにいつしか今様は昔にをとりきのふ大坂の内に有しことを
けふははや取組戀慕密通せしことを狂言にして其人の名をさしてそれといひければ人また是をおもしろがりぬさ
れば大坂のうちはいふに及はず國々遠き縣までも聞傳へ其親に耻をあたへける事いかばかりの歎ならずやかくつ
たなき事をよしと思ひて人の親の娘など引つれ來りて物見し侍ること心得られずけふは人のうへあすのわれら
が身を知らでうかくと役者にはかられける淺猿さよとふと思ひ出るよりいざくと立んとしけるを傍なる人のま
たしめよと膝を押へて尤と感じつ、仰のごとく左にてい惣じて娘など持たる人の心づかひ有べきは此見物也其
人にはよるべけれども戀慕の手だてを見るよりも心なきも心をつけ我もまたしやせまし忍びても見まほし情もか
けてもやと色のなききをのづから色をつくるは此見物ならんと答して立別れぬいとおかしかりけり

……以下原本空白……

蘆分船 大坂鑑 延寶三年出版

○道頓堀

おさへ／＼よろこひあれや天下泰平にして國富民榮へ里の長も萬歳をうたふ歌舞妓若衆の小歌の聲には道頓堀江の魚もとり引三味線のかはの流れさつ／＼たる琴の音には芝居の軒端けた梁の塵もうごき出ればまひりを切らす見物の貴賤目はつかしき四條五條は物の數かは唐土までも聞えわたりし日本橋のはしのうへ老若男女袖をつらねくびすをついて朝にはとうから／＼の太鼓の音を聞たか／＼の狂言盡が初りと申といふやいなやに昔見し人爰にきたりてべたりと逢たり扱も其後久しう見なんだまて上留りには何をかたるそ是に説經そこには舞あり孔雀鷄に種々の唐鳥錢はもどりじや元通くによし虎のいけとり竹田がからくり時計の車の砂道石道めぐりありきてあなたへざらりこなたへざらりと遊び戯れまばしかほと千日寺に立より足を休めてそこの人の爰かしこに集りるのがさま／＼物かたりするを聞侍りしに昔々寛永のはじめつかた此里よりも辰巳に當つて久寶寺の安井の何某平野道頓といひし坊主のおつとり鋏にて土をうごかしそめしゆへをのづから所の名として道頓堀とそいふ也下略

また難波艶江には色江とも呼ぶ棠大門屋敷ニ

津國難波艶江といへるは浪花津の江南東は高津の森にそびへうしろは今宮廣田の杜なんばの森に續きて無縁寺の松まけみて青々たる中に八ツの櫓をあけたり歌舞妓はくれなひあやつりは紺地の幕入違し嵐にそひ

きへんほんと前なる川にうつれはひとへに錦を流すがことし其詠メ異なるとして無縁寺のもりを氣色の杜となん名つくあてやかなる美童を集て男色女色の佛を作りて今様を歌舞す去によつて此堀を難波色江と呼ぶ

……以下原本空白……

○道頓堀花みち

延寶七年上木

大坂の南の岸に大芝居三津の濱は其日土師の連八嶋といふ人和歌朗詠を我朝にてうたひ初し地也其跡自然と難波女の袖笠風流のもとたて也太夫藏人など申せしやさ女男まじりの花車出立堀江の橋かゝりを渡り拍子も絶て中頃はなをおさまつてまかなる國といへる女歌舞妓その年月一はやりなる戀の奴の面影それさへ其時はうき世のころしころせなどのほめ言葉の末々今の繁昌見ぬもろこしのちやるめらの音にとらはなとか七尺の籠ぬけあうといふ聲をかけて木戸番合點か神鳴の八はち大女房のふんとし小人島の梯子なんてもない物ある物爰にあつむる中にも誹諧は近年かはりて面白きもてあそひ一興一座の子供役者までも道頓堀のあさき瀬を渡りては水邊を覺近き高津の杜は神祇野暮の夕は無常を觀し千日寺は釋教の鐘の聲貴賤男女の戀のた、中くらへ衣裳の人の山けしきも一入に春めきて二日よりはしまりの常舞臺も又さら也是に付て初芝居顔見せの發句を集侍るに我すける心を物

のやさしき事とて一句をつかはされしか数々になりてはほとなく一集となしぬ其作意めいく木々の花道御望のかたくは御見物

延寶七年霜月廿五日 酉林軒富永辰壽

私考 富永辰壽は作者富永平兵衛なるへしこの小冊初芝居ノ句 百三十三句 顔見世ノ句 百三十句 卷末に道頓堀座懷紙之内附合あり卷中其頃の名高き俳士または俳優家の句と今は昔の考とも成べき句を拔萃せり

初芝居

いかに禪師子供好きなら初芝居

梅翁

初芝居唐土はちらす日本橋

保友

作りもの一ツの嶋ありはつ芝居

由平

花は戀をまいた種也初芝居

西鶴

鐘太鼓こんとんひらけ初芝居

惟中

常芝居來ル正月二日より

友雪

幣串や神のはつ物初芝居

宗先

(櫓の梵天其頃は幣を用ひし事もありて西鶴の艸帯の圖畫にもまゝ見來れり)

朝寝好もうそに成けり初芝居

武仙

夜更人まつまらぬにそ初芝居

丸鏡

(正月二日の初芝居未明より初めしと見えたり)

月花の二番續かはつ芝居

西長

(其頃ははまだ二番つゞきの狂言のよし)

半疊をかりに居にけり初芝居

宣元

踏もためす半疊計や初芝居

義六

半疊におらはやおらん初芝居

則昔

(見物の半疊を敷たるも今は絶てなし)

初芝居八百萬餘のかみ札あり

意樂

配り札や伽羅は鶯の初芝居

岑野 惟舟

初芝居其外爰にも錢は戻り

西里

(芝居の外に見せものなども川竹に數多有しと見えたり)

朝腹や人に酔けり初芝居

重直

初芝居やまつ錢とつて廿四文

木賢

(木戸錢廿四文にや)

初芝居茜さす日や矢倉幕

重行

(もはや茜そめの櫓幕を用ひしと見ゆ)

初芝居正に見たりし翁たり

赤鳥

(東武のごとく初芝居に式三番をつとめしと見えたり)

太夫本みたりの翁や初芝居

益翁

初芝居みつの笑ひや橋かゝり

均明

此堀によき友三ツあり初芝居

賀子

いさ子共難波の三ツや初芝居

益春

打た、く三ツの木戸口や初芝居

辰名

初芝居富士そ日本の名左衛門

の平

(其頃は川竹のかふき三座連綿とありし事明らか也同書の卷末附合に)

初芝居祝義わたして鈴の音

紫帽子の氏子繁昌生重

顔見世

顔見せや道頓堀の水面鏡

如貞

顔見せは世界の圖也夜寝ぬ人

西鶴

顔見せに長寝は花のあらし哉

由平

貌見せや寝ぬに覺行けさの夢

滿平

(其頃は未明より初りて朝とく見物の行し也)

貌見せや難波わたりの春の景色	惟中	顔見せや又とこ闇に大挑灯	重直
顔見せや名残の太鼓夜は明て	賀子	顔見せや夜闇 <small>カケ</small> にして人いねす	榮輪
つら見せや夜るの内にて有しほとに	意樂	顔見せやまた宵なち人はいり	柴舟
貌見せや夜は何時そはや入と	双三	顔見せや夜るはくれとも晝は出る	生重
貌見せや花に三軒の役者沙汰	益春	顔みせや難波に三ツの大芝居	如扶
貌みせの三ツの芝居や雪月花 宮田	沖之	顔見せや三ツありとてもてうと入	藤枝和行
貌見せの歌にやはらく大和や座	の平	顔見せや南をはるかに名左衛門	安馬
つら見せや顔にくさけ成悪人方	宣元	御顔見せ悪人方はつらとこそ	由巴
顔見せに夜こそ寝られぬ敵役	松風子	顔見せや名のる中にも敵やく	軒水
顔見せやはや木戸まむる敵やく	又醉		
貌見せや善女人方悪人かた	重陳	<small>(今の敵かたもと悪人かたてき役など、呼たり委しくは落穂集の内に書入ある也)</small>	宗先
難波津や貌みせの花冬こもり	建壽	顔みせや安堵の御判くはり札	
貌みせや人あつうしてほめこと葉	益友	<small>(譽詞は天和年中あごたの八兵衛より始れるやうに聞しかど此頃よりはやありと見へたり)</small>	

……以下原本空白……

浪花茶里八景ニ

明七ツから櫓太鼓てトウカラ〜と世界の野等をす、め果太鼓には明日々々とあしたの遊びをおだて夜ル共晝ルとも分たす美しきもの、送り向ひ相圖の投ぶし中居のキヤツキヤ聲なんほ丑滿頃でも木も草も寝入られす繁花第一の場所然し近頃はあまり喰ひ物澤山で他國の人に見せてはちとはづかしけれど兎に角いつも名月米の飯聖人の仰られたは此所

いつも月夜いつも闇路の戀衣

難波西鶴作 世間胸算用 元祿五申年初陽出版 顔見世夜中役者樂屋入之圖

攝陽奇觀 卷之七



○大坂三郷芝居櫓開發

道頓堀定櫓株合

九ツ

但シ内壹ツ上り櫓也

安治川助成櫓

二ツ

堀江橘通

三ツ

曾根崎新地

二ツ

都合拾五株

道頓堀定芝居株

一 立慶町

伊藤出羽掾

右開發安井道頓より取次元和年中より開基にて道頓堀芝居の始也(録)元録年中より柳澤出羽守様受領差かまひニ付信濃掾と改ル手妻受領山本河内掾同飛彈掾伊藤之掾在之當時櫓名代は石井宇兵衛

一 立慶町

大坂太左衛門櫓名代

角の芝居也

但シ座本 荒木與次兵衛

道頓堀歌舞妓の始り慶安年中東福門院様御取立御赦免也

一 吉左衛門町

竹本筑後掾芝居

右開發は貞享二乙丑年二月より竹本義太夫興行にて(録)元録十四年筑後掾藤原博教矢倉名代は天王寺屋五郎兵衛尤最初之開基は井上大和掾藤原安泰古播磨掾事也座本竹田出雲掾實永貳年より太夫本當時家主竹田新四郎鶴殿出雲守様受領差構ひいゆへ寶曆十二壬午年六月ニ和泉掾と改ム

一 吉左衛門町

松本名左衛門矢倉

大西芝居と云

右芝居主久寶寺屋新左衛門中古は高津屋理右衛門寶曆九己卯年五月四日の出火より中絶當時櫓は竹田近江預り

一 九郎右衛門町

臺頭亦太夫矢倉

右矢倉は先年上り矢倉と成ル

一 吉左衛門町

鹽屋九郎右衛門矢倉

中の芝居也

右矢倉は泉州筑野六右衛門持にて出火已後は竹田近江差配也

一 立慶町

濱側 竹田近江掾芝居

右芝居矢倉は大和屋甚兵衛地主は佃野也此芝居濱側ニ有之い得共寶曆中竹田居宅へ引明和五子三月竹田近江芝居中歌舞妓ニ相成ル

一 同町

濱側 龜谷肥後大掾芝居

右芝居櫓名代は虎屋源太夫芝居主は扇屋立慶開基は二井彦太夫其後中絶延享年中に小倉數馬稻田默讀子興行當時龜屋平介豐後掾と假り受領にて興行 直持

一 同町

豊竹越前少掾芝居

攝陽奇觀 卷之七

右芝居櫓は鹽屋九左衛門名代にて永々歌舞妓興行座本嵐三右衛門相續(元祿)十五壬申年より豊竹若太夫を上野少掾と改メ相續 直持

一 助成櫓御免株

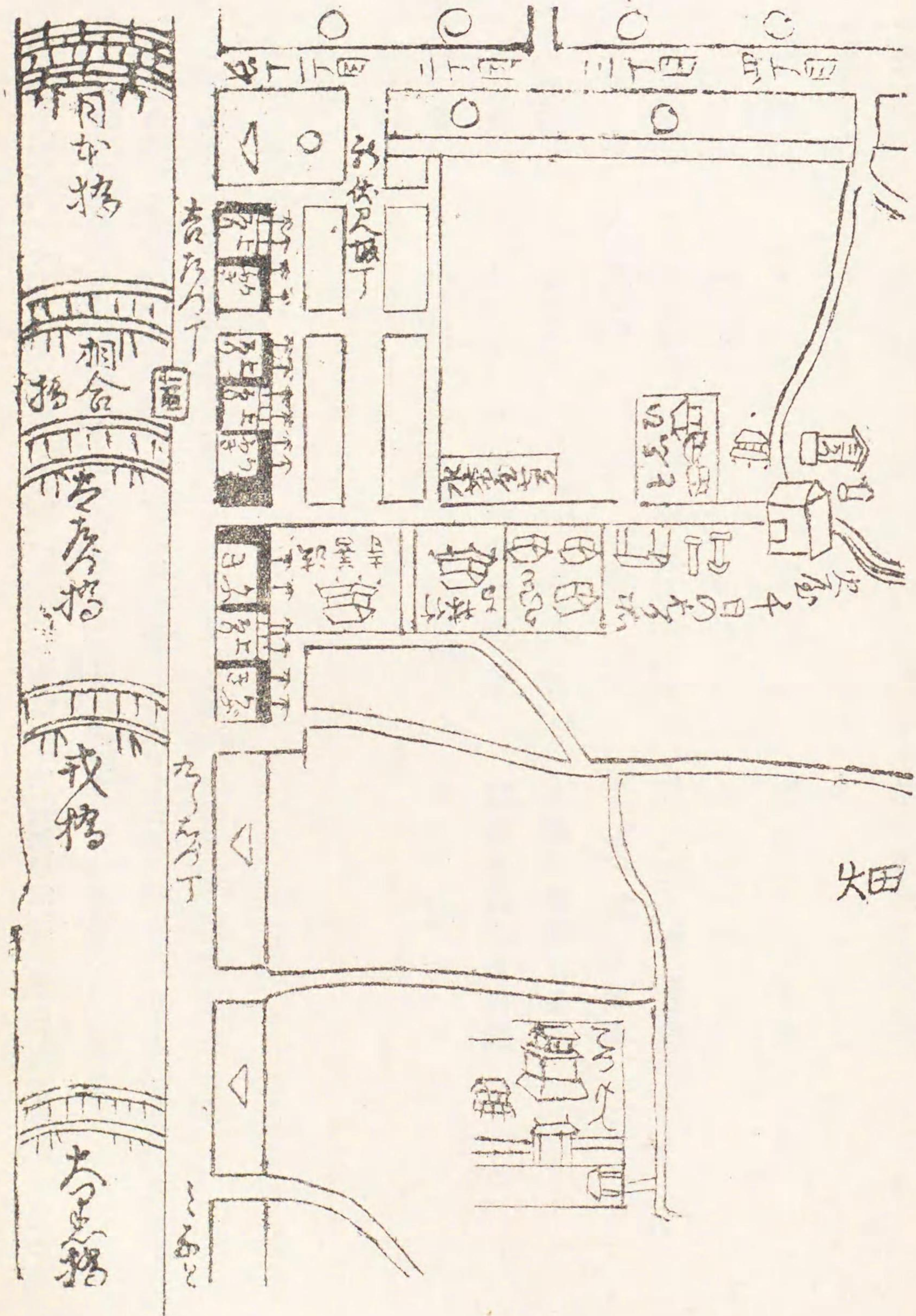
安治川上壹町目矢倉株は河村瑞見新堀開基之節茶屋株五ツ共に御赦免□□町致拜領興行仕ひ其後四拾年餘致中絶寶曆二申年生玉境内蓮池にて晴天六十日之間名代山本彌三郎にて小倉數馬興行之時 御城代酒井讚岐守様御町奉行中山遠江守様小濱周防守様御赦免地方御役人金井塚與市右衛門様 其後中絶當時座摩社内にて興行名代は和泉屋五兵衛寶曆十辰年十月ニ御赦免御城代松平周防守様御町奉行岡部對馬守様興津能登守様地方御役人田坂直右衛門様開發人家名不知

右之書この末闕たり

……以下原本空白……

○享保年間大坂之圖

千日の墓所に三かつはか聖六坊をひしとト記ス
自安寺いまだ見えす 竹林寺の前に水茶屋七間(軒)あり世俗七軒茶やと呼ぶ



道頓堀櫓敷當時は六ツを定芝居とす然れ共此圖を見れば淨瑠璃四芝居歌舞妓四芝居濱に竹田からくり芝居ありて
以上九ツありまた元祿年中には櫓敷七ツありしと見えて戯文重井筒道行血汐の朧染に 近松氏作

へなごり盡せぬ濱がはのこゝは竹田か夜は何時ぞ五ツ六ツ四ツ千日寺の鐘も八ツか七ツの芝居ふたりがうは

さ世話狂言のまぐみのたねと成ならば我をこん屋の片岡に 下略

延享年間改正難波丸綱目ニ

道頓堀芝居之分

歌舞妓芝居名代

鹽屋九郎右衛門	此名代主	道頓堀九郎右衛門町	杉村屋 藤八
鹽屋 九左衛門	此名代主	高津新地川原	和泉屋治郎右衛門
松本 名左衛門	此名代主	吉左衛門町	久寶寺屋新左衛門
大和屋甚兵衛	此名代主	炭屋町	伏見屋武兵衛
大坂 太左衛門	此名代主	長町三丁目	福永宇左衛門
小芝居株 壹	ゞ五株	立慶町	竹田近江
淨留理太夫名代			
竹本義太夫	此名代主	長町二丁目	天王寺屋五郎兵衛

伊藤 出羽	此名代主	元相生町	石河屋嘉兵衛借家直持
豊竹 越前	此名代主	立慶町	直持
虎屋源太夫	此名代主	同町	錢屋市左衛門
大坂次郎兵衛	此名代主	吉左衛門町	久寶寺屋新左衛門
宇兵衛	此名代主	高津五右衛門町	紀伊國屋安右衛門

ゞ六株

説經名代

與七郎	此名代主	周防町	人形屋三郎兵衛
七太夫	此名代主無之		

ゞ二株

舞太夫名代

又太夫	此名代主無之		
兵太夫	此名代主	周防町	三原屋市左衛門
市太夫	此名代主無之		
金太夫	此名代主無之		

ゞ四株

芝居名代合拾八軒

芝居主

立慶町	紙屋市左衛門	淡路町一丁目	小西角兵衛
長町三丁目	福永宇左衛門	九郎右衛門町	杉村屋藤八
吉左衛門丁	久寶寺屋新左衛門	立慶町	竹田近江
吉左衛門丁	竹田くら	立慶町	豊竹越前

當時名代之事

角の芝居 大坂 太左衛門

竹田 大和屋小三郎

中の芝居 鹽屋九郎右衛門

角丸 大和屋甚兵衛

大西芝居 松本名左衛門

若太夫 鹽屋九左衛門

宮地芝居からくり細工人

稻荷 竹田外記

座摩 竹田伊織

御靈 竹田左内

天満社 龜谷登左

北堀江市の側

同荒木芝居

曾根崎新地

……以下原本空白……

○中の芝居持主北村の話

道頓堀吉左衛門町鹽屋九郎右衛門名代矢倉中の芝居持主は昔より泉州筑野北村屋六右衛門といふ富家也こゝに一條の雑話あり

日本新永代藏ニ云

聾井戸に立聞の相場狀

花も實も有明の燈心 二筋の大やしき
泉州突野にかくれなき 福の北村屋

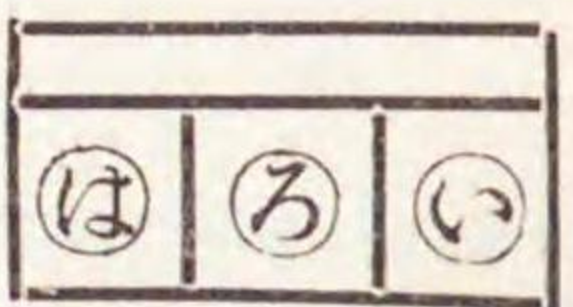
淡しく散るとはいへど芥子のひとへをそだて、實をとる事を思ひ櫻より李花の詠め唐土には此木をさして花と稱せり殊に秋にむすびて熟する實は外の物よりも勝れて人の賞翫すればとて大庭に植て世間に知らぬ銀もうけせし隠居の昔は泉州築濃といふ所に隠れもなき分限者代々六右衛門といふ名を譲りて三代の長者味噌造り酒造り質取て金銀をわしり其家の風義看略を忘れず修を知らず身分を持さけ他人に横平をせさのみ頓欲にあらず慈悲をもととしてよく手代をつかい舊功ある者共へは毎年店風の後相應に金銀を取らせ自分の家を持せけるゆへ攝泉兩國におゐて北村といふ暖簾近年見るに多し是皆六右衛門より出たる者共也今の隠居榮齋は殊に世に並びなき利發者志かもすぐどく見えうわべ温和にして内心ははや鐘をつく如く萬事に油断なく相場を聞合せて何によらず買込商の思ひ入をはずさずは何故なれば朝夕商ひに心たまをて人のせぬ所を考へいさゝか油断なきゆへに飼鳥をさす如くに金銀をもうくる也爰に堺に聾井戸といへる名水ありて朝毎に此水を汲みに諸方の下男共集り下々のくせ

として先ツさしあたりたる用事は勤めずして己己が主人をそしり傍輩を妬む其雑談の中に親方の藏に買込みたる薬種の品々を我ちらず語り又金銀取組の手だてを聞はつり見及びし事共を何の用捨もなくの、しりちらすを榮齋毎朝立聞して世間の物をと人の身上の内證を知るゆへ少も預ケ銀に損をせず代物の有無をも考へ合せて利徳を取ルこそ道理なれいかにも商人の身上はみなからくりにて内證へはいりてみれば思ひの外なる事多し此六右衛門は世上の見立よりは手厚く身上に物の入ぬ仕似せ是大将の軍の備へをよく立て小勢にて大勢と戦ふに同じ今の六右衛門萬貫目の身上として無妻の時分は銀貳匁りんと掛させて高須の局女郎を樂しまれし事かくれなし夫共に月に六度の外はかつもつて身をかためて血氣盛りを慎み商事に情(情)を出せしゆへ其身四十に及んで随分息災にて金銀に事か、されば末ながき老の樂しみ也

○色葉茶屋

往古は道頓堀芝居側建家まばら成しゆへ炎天のころまたは俄雨の節見物の諸人難義に及びしなり夫ゆへ元祿五年申の冬奉願上立慶町役高廿七役吉左衛門町役高廿七役都合四十七役右兩町一役に水茶屋一軒ツ、御免有之濱側に板圍ひをまつらひ床几をならへて茶店を出す事とは成たり然れ共其頃は萬事手輕き事共也右の家數四十七軒なるゆへ世俗いろは茶屋と名付く寛保初めの頃東都市川海老藏大坂へ上りし時高津の社より眺望の句に
たかきやにのほりてみればいろはに帆

……以下原本空白……



戲場篇ニ 茶屋

紅粉當茶釜ニ 丈長縮ニ二枚ニ 現銀一見客
 棧敷半分開 茶次湯桶出 飯盛割籠來
 狂言己果後 正味拂錢回

其後寶曆八年寅の冬角の芝居の前より二階作り仕初めて町並の家建と成りて軒毎にいろはと染込みし暖簾を掛しかど夫も今は稀なれどもいろは茶屋の名は隠れず芝居茶屋前茶屋共いふ往古は此茶店にても木戸札を賣たり後世通り札といふ紙札を賣しが今はかんばんの形斗り残りたり

茶は湯桶ニ次て出とあれは安永天明の頃までも湯桶にて運びけるにや

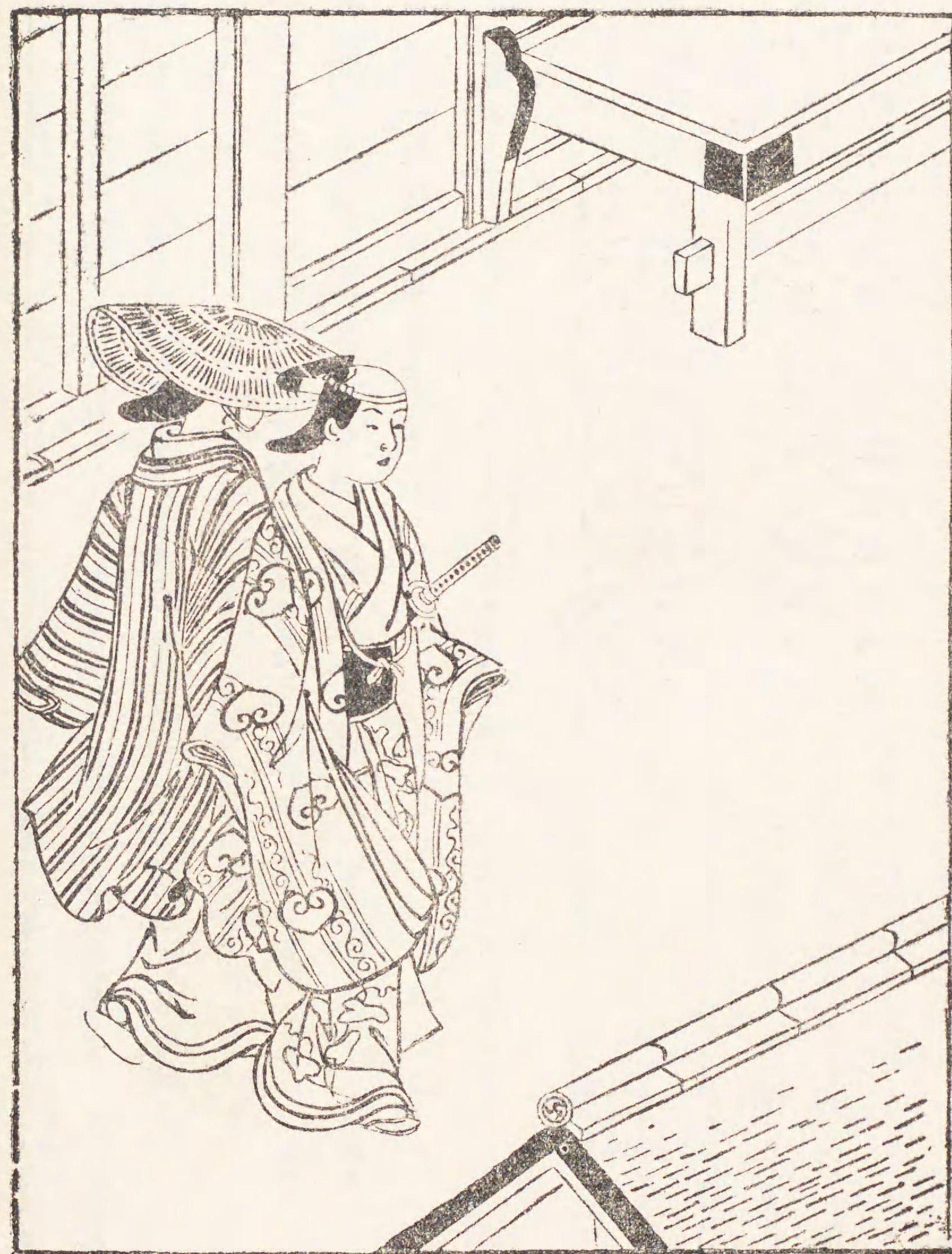
……原本コノ所ニ以上ノ書入アリ……

水辛賣

藝際潛居花路濱 引幕簇出號水辛
 徘徊欲賣多前髪 未見二十以上人

内茶屋

青漆割籠白杉箸 飯不足食菜殊微
 唯是小芋燒豆腐 椎簞苞麩古來稀



花洛文華堂

大和繪師 西川祐信



享保廿一年辰正月吉日

繪本花競圖中茶店の女今はヲチャコといふ

丸盆に茶のみ茶碗湯桶を乗せて通ふ此圖享保中なるゆへいろは茶屋出来て四十餘年に及へ共今の風俗に競れば細キ帯を前にて結ふも古雅に見ゆ 人倫訓蒙圖彙にも此ことき人物あり

〔編者曰クコノ頁活字ニ組ミシ文字ハ原本ニテハ前頁挿圖ノ上ニ書キ入レアリ〕

○役 木 戸

道頓堀芝居木戸番の中に 盜賊方御與力衆の捕者御用相勤い者を濱方役木戸といひて六軒の芝居ニ二人ツ、以上十二 人あり濱側ニ於て間口貳間奥行町并に住宅して芝居木戸札錢のはねを配分して公用を勤め挑灯の合印は かくのごとし往古は白股引をはきたりしが四ヶ所垣外番に混ざる事を年來迷惑に存ぜし處寶曆四年の頃 訴人の久五郎といふ役木戸讃岐ノ五兵衛といへる放火人を召捕たる功に依て其節より濱方一統紺色の股引に改めたり此者共良もすれば四ヶ所の垣外番と權を争ふ事あれ共毎年二月初午の日 兩御番所の藩中へ諸人を免して鎮守の稻荷明神へ參詣せしむ此日濱方木戸番四ヶ所長吏方警固の爲相詰い節濱方は御長家の内にて休息所を下され 上より強飯を頂戴の節も濱方の者共へは銘々盆に強飯にしめ杉楊枝を添らる、長吏方は筵の上に座して銘々半紙を出シ受け得は銘々盆より打あけらる、よし是にて勝劣相分りいとぞ

……以下原本空白……

○法 善 寺

當寺は寛永中和州より移ス本尊あみだ如來弘法作 子安地藏は小野篁の作 緣記あり金毘羅大權現は近世の勸請なれ共諸人信心して詣人平日に絶す

往古は當寺を無緣寺と呼び此邊木立茂りたる森ありしにや棠大門屋敷ニ

今宮廣田の杜なんばの森に續きて無緣寺の松志けみて青々たる中に八ツの櫓をあけたり中略其詠め異なる
とて無緣寺のもりを氣色の杜となん名付く

○法善寺地藏之由來

浪花六地藏巡り第六番大坂道頓堀千日法善寺境内子安地藏大菩薩は金毘羅堂のか
たはらニアリ參議小野篁一刀三禮彫刻の尊像
にて靈驗あまねし利益を蒙るもの枚擧にいとまあらず就中子安地藏尊と稱し奉る其濫觴を尋るに往昔大和國宇治
郡北山里に岸田氏某か家に代々安置し奉る然るに慶長年中其近郷に夫婦の者あり其妻懷妊の度毎に難産にて苦し
む事かぎりなし志かのみならず一子も育つ事なし夫婦の者歎けどもかひなし諺に去ものは日々に疎しと其期を過
れば常の事に思ひなして居たりしが又もや妻の懷胎と聞て夫は今更のやうに思ひ過つる難産を思ひ出し俄に佛神
の加護を祈る然るに此里に此地藏尊まし／＼て靈驗あらたなる事を知りて夫婦のもの詣で、朝暮香花燈明を捧げ
強盛の信心を發し安産して母子ともに息災延命ならん事を祈りける既に日積り臨月に至り産の氣附けるがいか
る因縁にや此度も又難産にして三日三夜惱み苦しむ事前々に聊もかはる事なし爰におるて彼夫おもへらくかくま
で地藏菩薩の加護力を祈といへども一向其驗のなきこそ佛の誓ひといへることも偽りなる歟又は我信心の至らざ
る歟と勿體なくも佛を恨み奉る凡夫の心ぞかなしけれ此時地藏尊告て曰汝よくきけ罪業ふかし今懷胎所の男子は
前生の怨敵なり汝等夫婦か命を斷家を滅さんとして胎内にやどり來る事今に三度も善哉此度信を起して我をいの

る事功(切)なるにより我代りて其苦痛を受怨念をなだめ汝等が罪障消滅せしめは永く子孫繁榮ならんと御身に汗を流
し苦の想を現じ給ふを見てうち驚き抱き留まいらせんとして目覺てみれば産婦の傍に伏し居たる扱妻の様體を窺
ふに安然として夢の覺たるがごとし忽苦惱やみて常よりも猶心穩にして安々と男子を誕生せり誠に若有重苦我代
受苦の御誓あやまたまはずかくのごとく靈驗不思議の尊像なれば皆人南無子安地藏大菩薩と尊敬し奉る其後寛
永の初め法善寺を此地へ移してより開山専念法師古郷なれば開山に有縁の尊像なりとて岸田氏當寺へ遷座なし奉
るまかしてより以來靈驗いよくあらたにして諸病平愈息災延命福智增益其丹誠をこらすものは願として成就せ
ずといふ事なし委しくは寺史廣縁起に記すがごとし爰には畧して子安の一縁をあかして末世の信心を勸むる者な
り當寺より安産瘡瘡等の守を出ス

○法善寺墓參

難波鑑云 七月朔日

千日寺のたゝきかね諸行無常の響きあり歌舞妓若衆の花のかほばせもつるに必衰をあらはせりさればあしたには
紅顔ありて世路におこる人も夕べには此墓所に來りて白骨となりて朽るまことにけふは人のうへあすの我身を知
らず思へばくはかなきあたしのゝ露よりもろき世の中に誰ありて残るへき鳥部山の煙たちさらてのみ住はつる
ならひならばいかに物のあはれもなからんといへるまことなと思ひやられて心細く侍る抑此法善寺と申せしは
寛永年中の頃ほひより千日の念佛をとりたてしより人こぞりて千日寺といへり夫より續て今は不斷念佛の道場と



なれりいつの頃よりか此寺の墓参りとて七月一日より其月の暮る、まで毎夕大坂の男女老若貴賤に寄らず此寺に詣て來たるありさまいふも中々たくし予も一夕残暑の堪がたかりし折から納涼の陰を求めんと爰に來りて堂の椽に端居して人々の心をうかゞひ見るに予がごときの人おほくて實に參人稀にして若き人々は色にそみ或は酒宴などを催しされめき遊ふ人がちにして或は勢ひ猛にの、しりはては喧嘩して法場を穢す人ありかゝることを見につけてもいよく我身を顧み受かたき人界に生を得て有がたき御法を受るよろこびを忘れ後の世のくるしみをまふけむ事思へばくあさましく侍るかゝる事をしても物語といふべきや恐るべし慎むべし

奇縁氷人石 文政四年ニ建 攝陽年鑑に委シ

三勝半七追善石塔 攝陽年鑑元祿八年條ニ著ス

義童勘太郎碑 延寶五年殉死ス明和六年當寺に石碑立 文政二年新調 事實は攝陽年鑑延寶五年條ニ著ス

南無三寶正三墓 攝陽年鑑安永二年條ニ著ス

大村屋いと墓 安永三年六月相對死翌年石碑立 攝陽年鑑ニくはし

雷死三女墓 攝陽年鑑天明五年條ニくはし

吉田文三郎墓

男德齋墓

……以下原本空白……

〔編者曰クコノ項中ノ插圖ハ著者ノ自筆ナリ前頁參照〕

○竹林寺

號ス 松園山

徳本上人墳 文政の初めに建ツ

積観音 せんきの観音共いふ 願掛重寶記二篇に著ス

朝比奈宗兵衛墓 實曆十年ニ建 事實は攝陽年鑑延享三年條ニ著ス

おりく十兵衛墓 攝陽年鑑實曆元年條ニ委シ

裏見ノ銀杏 寺中ニ大樹アリ

……以下原本空白……

○自安寺

千日自安寺は攝陽群談及び元祿出版の難波丸綱目に見えず享保中の大坂の圖に漸ありて延享再板の難波丸ニ法華

宗自安寺新寺と有 坂町うら法友 蓮登山自安寺といふ 寺大建寺同斷

當寺の北辰尊星妙見大菩薩は大坂妙見宮十六ヶ所巡拜の第一番にして繁昌も又他に勝たり寺説追考

……以下原本空白……

おすが六三郎墓 攝陽年鑑寛延二年條ニ著ス

近江屋次郎右衛門墓 同安永元年條ニ著ス

京扇屋小傳墓 同寛政九年條ニ著ス

……以下原本空白……

○法場

〔編者曰ク原本表題アツテ記事ナシ〕

○千日墓所

千日の墓は大坂七墓の第一とす聖六坊あり

有かたや千日寺の邊りには白の佛や野郎來迎

七墓とは

梅田 濱寺 吉原 野田 小橋 蔦田 千日

攝陽奇觀 卷之七

大坂の愚俗初秋より盆の頃七墓巡りとしておのが一群れ鉦打た、きて七墓巡りといふことをなし無縁の卒都婆を回向して行さま信心堅固の佛者とも見えぬに夜露も厭はずかけ巡れるを何の故と問へはかくすること懈怠なく三年の間勤れば其身の死後葬禮の節雨降らざるよし實ならば一奇とせん

……以下原本空白……

因ニ云

日本火葬のはじめは人皇四十二代 文武天皇四年僧道昭病死すこれを火葬とす

天竺佛の御國には喪禮に四のわかちあり空しきからだを火葬にするより林喪とて林にすて鳥獸にあたへ土喪ニするより水喪とて水に流し魚に放すが功德ふかしとぞ

町人葬式の事

……以下原本空白……

石碑に夫婦の法號を彫て亡夫に残りたる婦女などのいまだ現在に存命なるは法號に朱を入れて逆朱といふ唐山は

また異也紅紙牌兒アノキカモツダに生ル人青紙牌兒アヲキカモツダに死たる人の思人の名を書つけて朝夕に拜する也

沐浴モクヨクとはかみあらひゆあみする事にて俗に屍を洗ふをいふは心得す又常に湯あびるギヤクイを行水といふ行水は死者を洗ふ事なれ共古くよりいひあやまりて 行水の捨處なき蟲の聲なと、歴々も思ひたかへるは行燈挑灯の類ひにて今

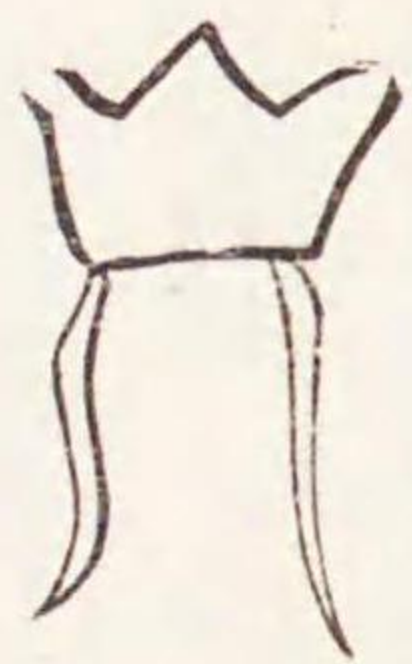
更せんすべなし 今の俗言ニモクヨクを誤つてムク湯ト云 私考 屍を洗ひて無垢湯といふ心にや ……原本コノ所ニ以上

ノ書入アリ……亡者の額におくすみほうし 胡麻鹽トモ云は額烏帽子の遺風なり

夫木抄 雑の十四 弓の部ニ

篠ためて雀弓はるをのわらはひたいえほしのほしけなる哉 西行上人

年中行事繪卷物に男童の額に黒く三角なる小サキ物をあてたる體所々に見えたりこれ額えほし也 幼帝御元服以前空頂黒幘といひて黒き羅にて作り
ほしもこの類ひの物也
如此の形なる物を御額にあて給ふ也これ御冠の代也額え



……以下原本空白……

○俗人夜念佛

大坂御仕置留帳ニ

指上申手形之事

今度町中若者共大せい申合夜念佛に罷出施物を取道頓堀に石塔を建出家を頼み供養など致い義被聞召付爲御穿鑿右之者共其町へ御預ケ俗人新法に夜念佛を工みい義徒者に被思召い間曲事に可被仰付い得とも此度之義被爲成御赦免い旨難有奉存い自今以後町々にて致吟味面々子供手下々借屋之者迄壹人も夜念佛出し申間敷い若承引不仕差出い者御座いは、早速可申上い自然隱置脇より被 聞召いは、本人は不及申五人組年寄勿論召仕いものは其主人親掛りの者は其親まで曲事に被仰付い少も御恨に奉存間敷い爲後日之一札差上申い以上

明曆二年十一月廿七日

……以下原本空白……

○才太郎畑

千日火屋の東の畑をいふにや松の落葉三かつ心中の文中に 葛山四郎兵衛作

いざや最期を急がふといふて火屋の東のさいたら畑露か時雨か身をふる雨か笠屋三勝ふくさを出してつまとくをまつかとかく、る男なみだをはらりと流し

元禄八年十二月三勝半七此邊にて心中せしよし今は東手の墓地と成たり

愚俗の云才たら畑は極樂のまだ先をいふ風俗文選 聖靈ノ祭文ニ 聖靈達く今年は殊に穂づるもよし地獄極樂の亡者達才太郎畑のいき過までさそひ合せて御出あるべし六日飛脚の頓死をき、たて一紙の祭文は御免を蒙らんと仍テ謹み如斯

聖靈よ蓮にあまらは芋はたけ

世俗死んで花實が咲ならば千日寺は花盛りといふは此邊のことなるべし

……以下原本空白……

○齒神

千日の墓所上人堂にあり世俗齒神さまと唱へて齒の痛むもの無言にて參詣すれば忽いたみを忘る、也

○雷神木

同所焼香場の東にある榎の古木を雷神木と唱へ 千日の榎さ どの頃よりか靈ありとて詣人平日に絶えず渾身に痛

攝陽奇觀 卷之七

四三

みあるもの其ところを畫きて椽に張置て平愈をいのるに忽靈驗ありまた神木のかたはらに飴を賣るこれを買て供物とし立願のもの飴を三年ケ間食する事を斷と云御縁日十四日

○法花堂

千日の墓所法場の傍に法花堂といふ小堂あり堂内ニ妙見宮清正公を勸請すこゝに江戸より幽靈が持來りしといふ佛像あり

……以下原本空白……

爲疫死大石塔 本道西手ニあり 明和八年建

三勝半七石塔 火屋の東ニ在 攝陽年鑑元祿八年條ニ著ス

小三郎田村石塔 同所 同元祿十五年條ニ著ス

五人男石塔 東手墓地の中ニ在 攝陽年鑑 元祿十五年條ニ著ス

近世五人惡混石塔^(棍) 火屋の西 同 明和四年條ニ著ス

桂井蒼八墓 同所 同 明和二年條ニ著ス

浪花の希有に千日墓所釣鐘堂の下の石塔は不残うしろむきに居たりまた法花堂のむかひ南寄りの西がはに入ほくろしてある石塔あり此邊の乞食にて生涯大酒を好みし六が墓など尋んもうるさしすべてこの墓地を始め法善竹林自安の寺々に名高き力士あるひは淨留理太夫俳優家伯人哥妓などの石碑多しといへども枚舉するに違あらず

……以下原本空白……

○堀内

堀の内とは垣外番の小家也 舊き大坂の圖ニハ 大坂四ヶ所の垣外番を長吏と唱ふ 四ヶとも又四 天満山。鳶田。天王寺 非人小屋と記ス 千日也 道頓堀木戸番は紺の股引を用ひ長吏方は白股引の定め也しが京都悲田寺は頭たちたる者こけ茶色の股引

を用ひいゆへ大坂長吏方小頭斗りこけ茶の股引に改メ申度由 御願奉申上寶曆の末明和の頃よりこけ茶色を用ひて濱方役木戸の紺股引に紛ふ

覺	
一	節季 鳥をひ 大黒まひ
右之通御祝儀儘に受納仕候	天満
○月 日	千日
四ヶ所○	

近世荒尾但馬守様大坂御町奉行之節被仰出い四ヶ所垣外番之者共を長吏と唱へ來れども長吏の文字相違也彼者共は町家を離れ住居するゆへ町離也以後右の文字をば用ひ可申と有しゆへ四ヶ所の小頭長吏と記せし挑灯を持しがさながら町離と印さんもいかゞと思ひけん

内か

天王寺

くのごとく内といふ字を記し其餘は



此印を用ゆ

毎年垣外番大黒舞鳥追ひ節季い町家のふせを四ヶ所の受取書の張札あり右の板木は四ヶ所へ分て所持なし毎年冬高原にて立會の上合板して何百枚と紙數を改メ摺上て四ヶ所へ配分し亦々板木を分ちて持歸るよし

……以下原本空白……

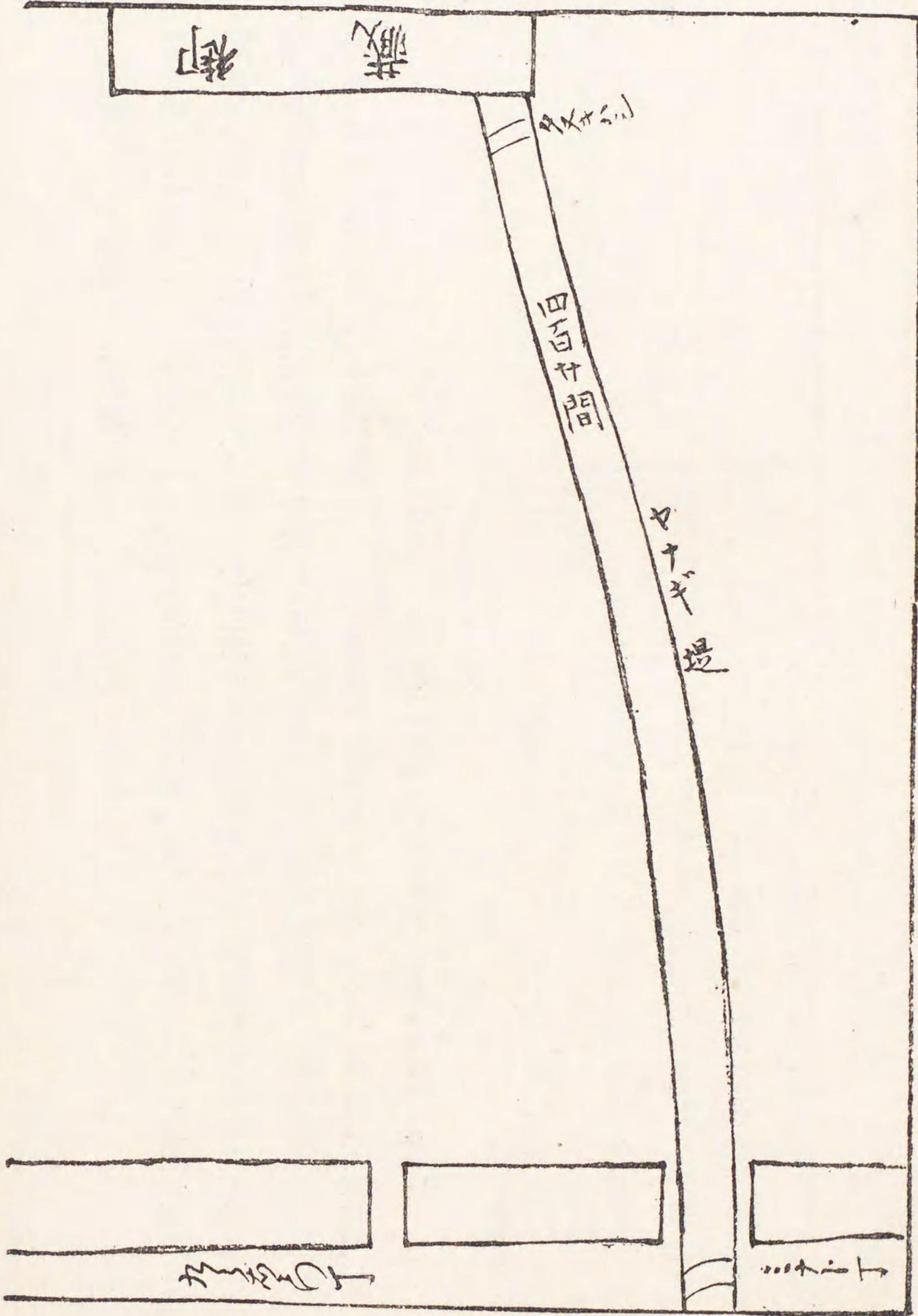
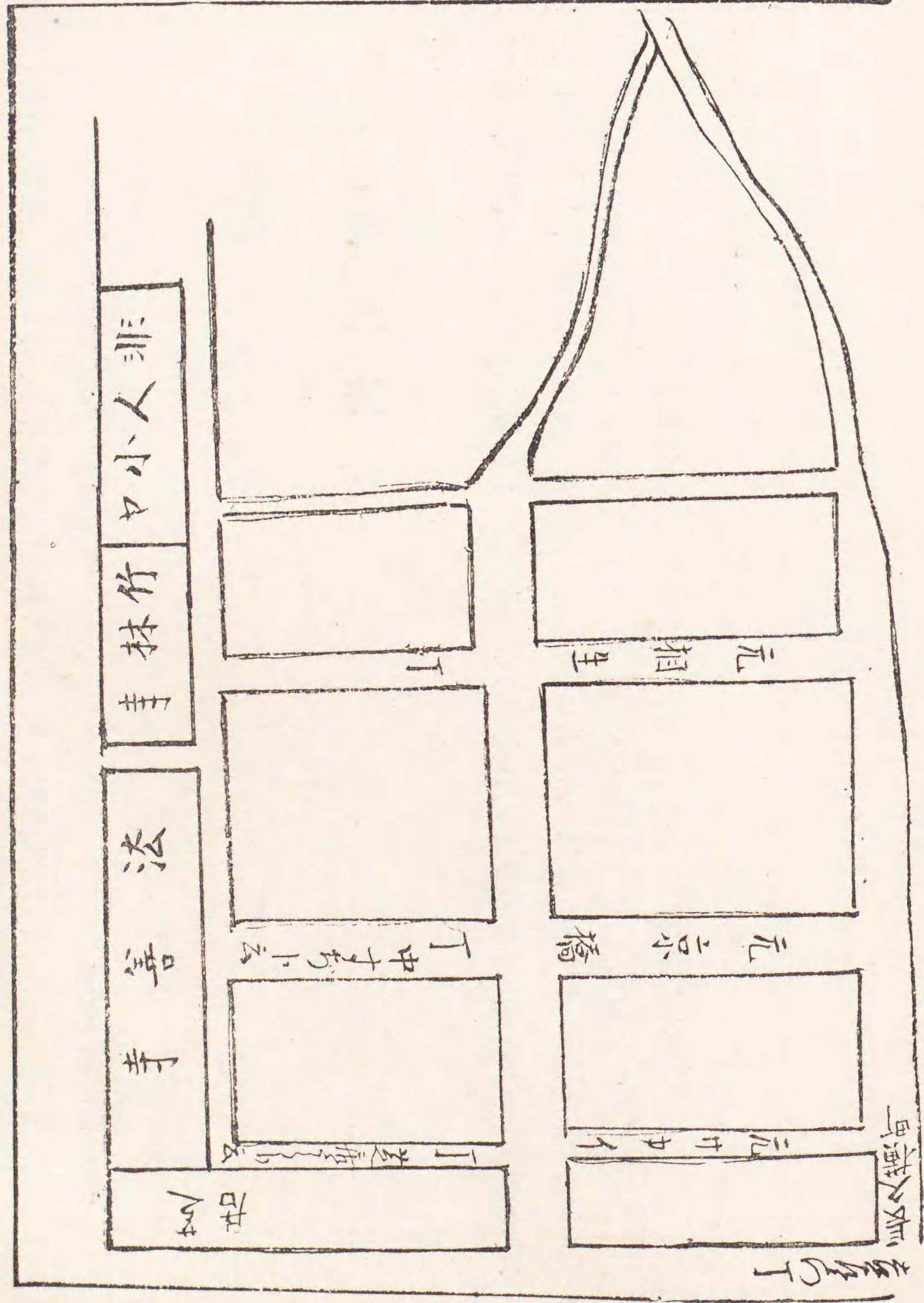
○難波新地

難波丸ニ云 元相生町 元京橋町 元堺町

享保八年より新地ニ成御替地としてうつされたる所也南北は法善寺の南のはづれより北は芝居の裏限り東西は法善寺の後より西は戎橋筋より一丁西の筋まで東西の通り三筋あり北は元堺町中は元京橋町南は元相生町南北は法善寺の裏門通り中筋は戎橋筋西は吉左衛門町まで夫より末は西南共に難波村領野畑也

其後明和二年難波新地三丁に人家新建繁昌の爲勸進相撲など興行ありて其頃より追々毎に人家建續く

〔編者曰ク次ノ二頁ニ挿ミシ地圖ハ著者ノ自筆ヲ凸版ニセシモノナリ〕



此里の異名 南地ナチまたは在所共いひしが今は昌んに相成り中々在所とは呼びがたし

……以下原本空白……

○南地野面

浪花茶里八景ニ

一夜にうみ出せる富士山も驚くに足らず麥畑より瓜茄子綿畑の面影もなく即時に納涼の地と成も浪花繁榮の志るし西ははるかに海原の沖津風東の峯へ行當て吹戻す涼しさ又類ひなし京の四條と違ひ流るゝ水を見ぬかはりには夜明がたに川端のきたなきさまを見る事なしわろ口いひが此處を見渡して地藏祭りの會かといふ夫ほどのわる口はいひうちの事近來の趣向也夜弓場又廿四文の出し茶京の姿ありチリン／＼の鐵棒は聞えずバリ／＼の割竹の音おかし暮かたよりの人群れかへつて涼風をうしなふ

我先に扱も涼みの暑さ哉

……以下原本空白……

因云 京都四條の納涼の權輿は

男色今鑑云 浦は波山は嵐の音すごし都の中の栖こそ春は東山御室の花秋は伏見廣澤の月其外遊山見物ども多き中にも六月上の七日より中の八日に至る迄毎夜に四條を真中とし上は三條下は松原の川原まで水中に床をひたし川原に店タテをいとなむ中に五軒茶屋とて名も高きは五十年來の事かよ堺町二條のあたりに正木屋といふものあり夏の暑氣をくるしみ友人とつれだち提重瓶子やうの物を携へて川原に出てかの五軒茶屋なる者の先祖の所にて床机をかりて遊ひしよりいつとなく繁昌して今にては神代のむかし古の京長岡の里よりも遙に久しき事のやうなり云々

按ルに此書寶永八年正徳ト 改元 出版これより五十年はかり已前とあれば寛文の始の頃にや始りたりと覺ゆ本

文のごとく近き事の舊くより傳れるやうに思はる

……以下原本空白……

○常舞臺

〔編者曰ク原本表題アツテ記事ナシ〕

○大相撲場

〔編者曰ク原本表題アツテ記事ナシ〕

○吉田屋ノ庭

富貴自在ニ

難波新地の吉田屋は庭に春秋をたくみ在の溜池堤も氣はかはりてよけれ

此趣向は歌舞妓狂言作者奈河龜介の指圖にて遊人群をなして安永の頃は繁昌せしかど天明の初衰ふたり其後天明五年の春此處にて唐の開帳といふものを興行す委しくは攝陽年鑑に著ス

異國産物啓發趣意

抑唐の開帳と名づけ御覽に入奉るは當吉善亭の主吉田屋卯兵衛奈河龜介の兩人厚キ懇意なるが近來拂底不仕合の由來を尋るに先年中の芝居興行の續き此所に店を開き春の花盛り夏は螢の光りつよく秋も燈籠赫々として日毎夜ごとに繁昌成りしか冬枯の時なるかな重き病に臥長々心神惱亂して渡世難出來奈河共ニ内談の狂言底を擲いて相談の折しも去々年の火災に奈河が家屋敷焼失によつて互に印形押かはせし中々に段々の難澁かさなり兩人此所に逼蹙(塞)の同行と成て今更損ふいはん方なくゑんぶてんぶに祈誓をかけしに御最員の老翁借金横寢の枕神に立せ給ひ庭木の櫻の厚皮を削り利銀口錢を空しくする事なかれ時に繁昌なきにしもあらずと墨ぐろに書付給ふと見て夢覺ぬ不思議なるかな其日に當つて諸方の名高き雅先生より當時難澁をあはれみ給ひ異國外國の産物數品あつてのたまはく汝等やせ顔はる事なかれ身上からの開長(帳)を顯はし御見物の他力を受なば家業繁昌御ひいきの種ならんと憐愍の御告ニ依て諸方の御所持御祕藏の品々或は借り受或は貰ひ預りものは半分の主と御大

切の物ながらまばらく我か物にして富貴ひつてんに任せ扱こそ唐の開長(帳)と名付て披露の趣あらく如斯御座い恐々

追 段

奈河の住所永長堂建立吉田聚螢庵大破ニ及び新宅座敷も金の敵に質どうたらん身上破損修復の爲の開長(帳)でムり升ス兩方御執立と思召此上ながら四方の雅君御所持御祕藏の雅物珍物暫らく御貸し被下升ふならば追々番付に書記シ御ひいき御惠みにて唐物段々ふえまするやうひとへに奉希い

吉田聚螢庵

奈河永長堂

雅物一百餘種あり目録年鑑に載たればこゝに略す其後秋は松茸狩などを催せしかどいつしか退轉に及び寛政の初め野はづれに四季の茶屋を建夫よりさつき茶屋といふも出來れば近くは日暮し茶屋なども皆々吉田屋の遺風也此地近來大繁昌にて山吹飯まりこのとろゝ汁もよく仕にせたり遙に雜品なれ共叶橋の雪花汁なども粹客が宿酒には一目に野面を見渡してむかひ酒の一興とす

……以下原本空白……

○借馬

彌味草昏ニ云

からふること葉役者を友とするは樂家詞又應好キの鷹詞けしからぬは此頃ものゝふの家にもあらで平人の馬にのることこのめるくらあぢ手綱さはきうるくしきは人にはぢてひそかなる野路の月影に馬をひかせあまた度をちころひていたきめにあひ夫よりして花やかなる野袴くれないのふさかけし鞭を腰にはせ住吉の邊りさまよひ濱邊の船には此おのこのなれなじみぬるうかれ女仲居たいこやうのものひつそひ並居るにおのこはこれらの人に見せん斗りののぞみなれは我をちにきと人にかたられましとりきみ返りて乗廻るうかれ女はすこしも面白からずあくび出ること數を知らず聲をひそめこれをそしれ共知らす一入あどなきいやみに見へ侍る

……以下原本空白……

○猿茶店

〔編者曰ク原本表題アツテ記事ナシ〕

○蛙ヶ池

文化中ゑひす橋大興故あつて商内を休み居たる節此所にて料理店を開き蛙ヶ池と呼ぶは庭中の溜池ニ蛙多くはなちしゆへに家號とし今も此邊を蛙ヶ池といふ

京師東山に同名あり 太平樂府ニ

入口有_リ行_ハ燈_ニ 路次長_シ無_ク極_リ 古跡尙_ハ可_ク尋_ル 料理_ハ不_レ可_ク食_ル

……以下原本空白……

○瀧湯

蛙池の西をいふ文化の初め此處に瀧湯とて浴室の水船へ篋を以て藥湯を落す趣向ありしがいつしか絶たり島の内のから風呂も暫らくにて止ム當時の繁昌は難波むらの大津湯和泉湯にして苧屋の湯古風を失はず九郎右衛門町の温石湯もよし

……以下原本空白……

○呑龍莽

難波新地の野側に文政六年呑龍庵建ほとりの小溝に架たる板橋を呑龍ばしといふ此庵室は天王寺村曉月院西方寺

當時無住に付預り

難波村法照寺

の勸進所なれども呑龍庵の名高し

呑龍の傳は攝陽年鑑文化八年條ニあり

……以下原本空白……

○選樹院

南地新川ニあり里俗法華寺の隠居といふ

勅願所帝都北野法華寺閑居利衆生爲結縁之旅宿辨用所なり

院内ニ北辰妙見宮鎮座

……以下原本空白……

○將門茶屋

浪華今八卦ニ云 難波お藏堤近頃新たち家ありてこそこの跡の者やりかけたれどはかゝしからず南地の野側七け

んの將門茶屋といへる店付のるい出来れ共格別の事もなし 是安永の頃也

○幽靈新地

入堀川に添たる新建の茶屋を幽靈新地といふは妓家の内より申々と呼かけて門通りを招く故也申々茶屋共いふ

……以下原本空白……

○南地切店

〔編者曰ク原本表題アツテ記事ナシ〕

○入堀川

享保十八年入堀川世俗新川と通いふ四百廿間同時に波吉橋架ル難波村北の口よりの通路とすなんば東の口よりの通路の土はしは後年に架ル今は欄干附の板橋にて叶橋と名付く然れ共難波の土ばしと名高し次に狸はし近世架ル此川の蜷大きにして風味よし道頓堀がはも近世蜷多く成たり

……以下原本空白……

○楊柳堤

入堀川は新川と名高けれど此堤を楊柳堤といふ事知れる人希也楊柳堤とは難波村の東の口に柳の清水といふ名水あるゆへかく名付けん 院本夏楓連理枕 寛延三年午六月豊竹座の新淨り道行楊柳堤と題して百間堀より難波の鐵眼門前までの文段に

炭屋町濱を南へ見渡せば破軍の星か劔先船もかゝる二人が難波ばし堤傳ひに行のべに四ひらの花や夏菊に露か螢かちらくく我なきたまの數そへて無常のけふり立迷ひ心細けな犬の聲身にも清水か柳さへ爰で死とや松の露木影にまばしたどり行

○柳ノ清水

攝陽群談ニ 難波井 西成郡難波村にあり民家悉雖求之水渴することなき灑水也 一名芦柳清水共難波の清水共いふ

狂歌難波梅に 木津難波の境川の東野中に柳の清水といふありはなはた冷水にてまことに大暑も忘るゝ水勢也今は柳は名のみ也

道野邊の清水の井戸と聞からに柳なけれと立とまりつれ
後家の名も石と呼ばれて柳陰 貞風

……以下原本空白……

○松の堤

幸町三丁目より南へ住吉海道の堤を松の堤といふ

東を柳の堤といふは柳の清水ある邊なるゆへかゝる此名は知る人なし西を松の堤といふは海邊の松數株續く住吉の海道ゆへにや

此堤に稻荷明神の祠あり玉重大明神竹島大明神長五郎大明神といふ中にも赤手拭の長五郎名高し 諸願成就して御禮の詣人紅木綿の手水手拭を奉納するゆへ赤手拭の名高し……原本コノ所ニ以上ノ書入アリ……

角額嫉蛇柳 豊竹和哥三座 明和八年五月御影参り同年
第三 難波堤のたんニ

難波津に隣つて文字も同じ成る難波村松の堤に小女郎稻荷といひふらし歩みを運ぶ願かける中略
此女郎稻荷様はずつと前方此堤にござつた赤手拭の長五郎稻荷様の孫御じやけなそれで今度官上りなされ其悦ひに諸人の願成就するとして此参詣

……以下原本空白……

○難波

浪花茶里八景ニ云

攝陽奇觀 卷之七

土肥へ地榮へにんじん大根のよきはいふに不及日本無雙の骨つぎ又奇妙の藥湯ありて諸病に功あり馴染の男倡女ワカシユ良の養生してゐるを聞て俄に作びやうへと出かけて湯治するも長生の藥又つゞいて名高き豆茶屋うまく共味なく共粹と名の付たけだもの此所へ一度にても來らぬはなし名物名産數を知らず又八景の一ツは綿くりぢんき卷の娘女房打連ての歸るさ空にふられぬ雪こんく

友呼ふや綿屋戻りの暮の雪

土俗いふ小兒疱瘡をかくせんと思は、難波の地へ豆を蒔べしとぞこれも一奇とす

……以下原本空白……

○牛頭天皇社

大門坊ト云

難波鑑ニ云 牛頭天皇祭 六月十四日

難波の宮に詣で、御湯まいらするはかり神輿は祭らず昔は平の明神を上の宮といひ當社をは下の宮といひてさかえ給ひし時は神輿を出しまつりけるよし今は神さびて其沙汰もなし

ばくろろ町 仁徳天皇社 平の社といふ 難

波丸にくはし

……原本コノ所ニ以上ノ書入アリ……

大坂廿二社巡り第十四番正月十六日當村の人民等繩引といふ事をなす浪花の奇觀也九月十六日にも祭あり

……以下原本空白……

○大門坊

本尊(沙)に深砂大王を祭る是多門天の化現也いにしへは佛院にして七堂伽藍の地也今の大門坊深砂寺(沙)は古の十二坊の一院也伽藍は兵火に厄せられて荒廢に及ぶ

……以下原本空白……

○瑞龍寺

此寺を鐵眼といふは開基の名也延寶四年建立鐵眼禪師は天和二年三月廿二日寂寺内に茶毘所あり攝陽年鑑延寶四年條ニ著ス

攝陽奇觀 卷之七

帆をさそひ木魚も遊ぶ雪野哉

魚 錢

當寺の莊嚴は黃蘗におなじ黃蘗宗は一通りの禪とかはりたるやうに思ふ人あり通用の臨濟宗にて五山などと何も
 かわりなし隱元禪師も大明福州福清の人也明の亂を避て日本ニ渡 何ぞ珍らしき事にて宗旨
 を弘んと思はれしか本邦諸宗に不足なく却て一向宗など唐山になき宗旨まで有ゆへ珍らしき事なく色々工夫して
 長崎にて相ばかり一趣向おもひ付誦經を華音にて勤め鳴物に大鼓を入板を打寺の建やうも珍らしくせしなり寛文十三
 年山州大和田莊ニ 中華の寺も叡山三井寺或は興福寺などのこときもの也いづれも祖師達入唐して見倣て建たるも
 黄蘗山萬福寺創建の也五山の祖師も入宋の人ありみな中華の寺の模様也然れ共有ふれては珍らしからぬゆへ唐繪などにて人の見覺
 たる唐めきたるやうに作られたり多くは聖堂のもやう也それに賣藥鋪綵緞鋪などの跡を加へられたりと見えたり
 扁額を多くかけ聯を澤山にかけられたりかの國の高家の招牌也それに禪錄の文又は詩などを紺青にて打見コンヤウに唐ら
 しく書キ饅頭まで胡麻肉桂など入し也發明也如此才人にて尤大徳也しか時に合て官よりも御歸依にて大望成就し
 於今繁昌す大器量也鐵眼も又なんぞ隱元に劣らんや

……以下原本空白……

○新興文治翁石碑

同寺ニあり 肥ノ蓮池鍋島攝津守殿扶持人大坂船町ニ住す新興文治光鐘といふ碑名は自筆なり筆道に譽あつて今
 に此流義を學ぶ人多しまた石面を摺りて世にもて重寶とす

命毛のありし昔を石摺となしても今におふ文

跡

當世痴人傳ニ 端山圖南

圖南は新興氏の弟子也小篆をよくせられし或と
 き藥師風呂の行燈を篆字にてまた、められしを
 騷客が見てけいたいな事を書おつたと破りけるを
 其あくる夜すぐにまた小篆にて書れしをかたの
 ごとく破りけり破ると張替々々する程に圖南い
 らつて篆書にて美濃番百枚ばかりまた、めてや
 られし也とぞこれも一奇話也

○半時庵淡々墓

同寺ニあり 裏ニ

半岩菴淡々 得齡八十八

傳説は攝陽年鑑寶曆十一年條ニ著ス

攝陽奇觀 卷之七



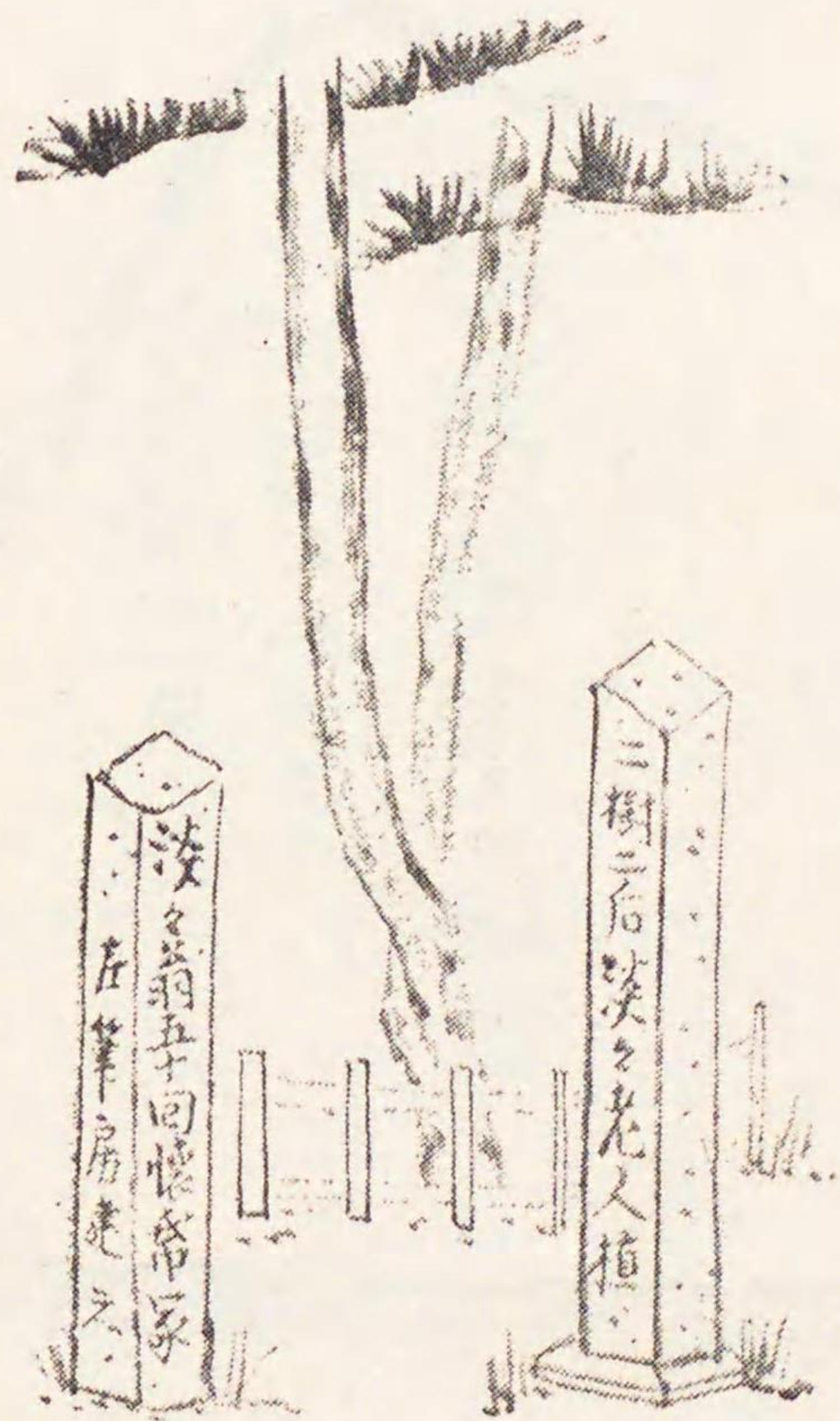
○二樹二后之松

同寺ニあり 半時庵淡々夢想の俳諧開きをして當寺に植たる松樹也

○三好氏正慶尼遺跡

尼正慶は世俗奴の小萬と綽號する婦女也傳説は攝陽年鑑文化元年條ニ著ス

……以下原本空白……



○難波水藍

染物に用ゆる藍は阿州より出るを最上とするといへども當國難波村又は山州より出る水藍に一妙あり阿波の産は濃き色に用ひてよろしく此地の水藍は水淺黄中淺黄空色の類ひの薄色に用ひて宜とぞ

○難波胡蘿蔔

○難波瓠瓜

當地の名産とす別して難波のにんじんは燈臺下閣しと浪花にては野菜にのみ用ゆれ共遠國にては其味其色を大きに賞翫ス

○難波骨接

里俗云 難波村に石谷源左衛門といふ南蠻流の骨つぎあり往古村民川童を捕へて既に殺害せんとせしに石谷氏の先祖源左衛門これを制し止れ共更に承引なきゆへ纒に所持せし田畑に代て命を乞得て放ち歸しける其夜源左衛門が枕上に立て命の恩を報する爲にとて骨つぎの祕法を傳授せしより今に當村の奇妙とし其類族多く此療治を施す事諸人よく知る所也石谷氏には川童の眞像を今に祭りて尊敬するよし

秋雨や爰にも芦の片たかひ

雁 臺

○難波村杜鵑花

同村農家ニありて諸人花盛りの頃は群をなす高サ一丈餘三間四方

彼岸の入より七十五
六日頃を満開とす

なんばんのほねをつき木かさつき花扱も見事な手際見せけり
骨折の手入をしたる難波村怪我にも外にないさつき花

……以下原本空白……

○豆 茶 屋

〔編者曰ク原本表題アツテ記事ナシ〕

○藥 湯

大津湯 和泉湯 苧谷湯

〔編者曰ク原本ニハコ、ニ左ノ通りノ苧谷湯ノ功能書ヲ板行ノママニ貼付ケアリ〕

にんじん ぎょくろつ きせいこう 但し腹茶
人参獨活寧生湯 五枚ニ用
至二三枚ニ用

- 五 ぢ 一 切 ○志 つ 一 切 ○りん病 志やうかつ
- 足こしかい ないたみ ○がんかさ 志ゆもつ ○か い が り
- たん症 腕いたみ ○中症 手足 志びれ ○打身 切 き ず
- いんきん 田むし ○せんき ずんばく ○産 前 産 後

其外ひへのほせ萬病ニよし一廻のめは大小便ニくだす也

- 一 賣藥調合一廻拾二匁 一 御通湯料一廻五匁二分
 - 一 御かよひ一日入七分五厘 一 同一度入二十もん
 - 一 湯料飯料諸入用とも一廻拾六匁五分別座敷一廻分五匁
- 右之通湯料之義はむかしより相きはめ置申い

一 私家藥湯之儀は其昔 太閤秀吉公 朝鮮御征罰之節依土地變諸軍勢冷疾入テ煩伏請難病軍まどむ 公

此亥被爲聞召 天照太神宮 八幡大明神 春日大明神 御祈請有所或日不知誰人共白髮老人顯來軍兵難病給者
 此藥湯ニせんじて人々令入湯行與教無行方 公大悦ましく軍勢被爲入湯給ふニ忽平愈勢ニばいます合戰
 勝利者人知處也然ニ予先祖御供醫師森雲仙え 公より此藥法之一書被置傳給其而世替時移土佐國爲浪人攝
 州難波村登來右藥法之湯弘從天和元歲爲渡世處ニ近年紛敷藥湯をこしらへ於當村湯數多有之能々御聞合か
 るや幸助と御たつね可被下此度相改功能略書いたし配上仕御心味之上 各々様被爲仰合御入湯可被下
 い様偏に奉願上候已上、

年中何時ニても湯御座い

なんば村藥湯むかしより始之家

荻 谷 幸 助

……以下原本空白……

○難波ノぼうた

里俗云 難波木津の二村に往古よりのならはせとして男女婚禮を取むすぶに表向にて結納の祝義を送りて縁談を
 調れば一村中への弘め萬端費多く身軀不如意にて其日を暮し兼たる農家に娘を持ては跡々の難澁に相成事ゆへ貧
 しき者の娘持たるに似合しき聲ありて此娘を嫁に所望する仲人相談に及ぶ時左あらばほうたに致して貰ひましょ
 と契約する事ありそは如何なす事にやといふにまづ吉日を撰んで婚禮の日に成れば嫁はところ斑に白粉を粧ひ唇
 いつばいに紅粉塗りまはしつゝ衣服もおのれくが身に應ぜざるを一世の曠着として我家に待受居れば親々は是
 を知らず顔して餘所へかわす其跡へ聲の方にて日頃親しき朋友を五七人かたらひ駕籠を持たせて出來り何の會釋
 もなく彼新婦を駕籠にうつして聲々にほうたくと呼はりツ、聲の方へ連歸りて祝言を取むすべは重の内などを
 配る費用なしとぞ按ルにほうたくといへるは奪ふたといふ略語なるべし

……以下原本空白……

○木 津

攝陽群談云

攝陽奇觀 卷之七

木津越瓜 シロウリ 木津蕪菜菔 カワラダイコン 木津瓠瓜 フネアケ

當所ニ於て青皮を去り實の白きを革纒のごとく切廻して長續ケ高垣ニ懸て炎天ニ乾しむ風に瓢を遠く見る人灌の白絲ニ寄て秀句ス其能く乾きたるを世に干瓢といふ

淡路島詠めえならぬ夕なきに歸帆かと見る木津の干瓢

○ 馳 川

攝陽群談ニ云 木津村ニあり

俗傳ニ云 昔聖德太子荒陵の東に於て四天王寺を壞移し給ふ時所用之良材土佐國の南海より勝間の浦に引て荒陵の西の岸に至らしむ或日潮水濁して筏此河に不入于時ニ多の馳群り集つて水中ニ入綱を引て岸に着り因テ馳川と稱すといへり

○ 上 人 川

同書ニ云 同村ニあり所傳不詳

耕作の村民船を通を以て俗 小便水尾と稱す

○ 十 三 間 川

一名新堀といふ木津村の西に流れて住吉に通じ末は大和川に入元祿年中に堀所也むかし此邊に河内川といふあり

荒陵の南より木津難波を歴て木津川に至る延暦七年攝津大夫和氣朝臣清麻呂に勅ありて田園の爲に堀しむ單功ニ十三萬餘人を用ひて糧を給ひ其事に従はしむ 續日本紀

……以下原本空白……

○ 今 宮 村

往古 御厨子所へ日々供御の料の魚を調達なせし由緒ある所にして現在も諸役御免也然る例に依て今に絶す正月十三日には 上御所 院御所執柄家へ大鯛を獻上ス村長差添兩人大紋を着し參内す事濟みて京兆尹兩御奉行所へ御禮を遂て歸村す此一件古式ありとかや尤祇園大宮之神輿を祇園會の節は當村より駕輿丁を勤むこれ供御調進の頃京四條河之店に今宮村の役所を構へて月替りに地下人交代して調進の役を勤む

後冷泉院の御宇祇園會初れる時四條河之店へ 四條通油小路 祇園大宮之轅を宛らるゝに今に斯のごとし其時今宮村 西へ入町也 地下神人河之店より神輿を昇奉る例によつて今に今宮村より (從) 加輿丁を勤む故に今猶河之店より地の口を今宮村へ 加納す此地の口といふは課役山鉾及び渡御の儀に預る町々差別あり 事長けれ は畧ス 此地之口の割方みな持屋敷地へ坪割也とぞ

牛頭天皇の神輿昇キ人数百十六人上京の時四條油小路の蛭子社の前なる小井を没て垢離し祇園に至る四條油小路より神役の輩へ地の口米二斗を贈る今宮よりは福德の神札を贈りて謝ス

○今宮神社

四天王寺細見記ニ云

今宮これは西の宮今宮と目前引寄給ふ惠美須は是はめぐみうつくしくすといふ文字にて惠美須は七九の竹に南無阿彌陀佛惠を付て衆生の迷の六根の鯛を釣給ふ則此眞の南無阿彌陀佛にくひつくと悦び勇みて釣あけて佛の左りの脇へかゝえ給ふ是衆生佛一鉢也との事正月十日御縁日かなつんほうは何の故のつんほう也是惠美須の本願あらはしたる也吉凶とは吉はよし凶は悪しとの事十日ニ蓮を賣は人中のふんたりけといふ事心を付て參詣すべし此十日の賣の市は眞の寶商ひ給へ眞の寶買人は千中無一との事中天照太神宮左り玉右はさかほこ始り納る也あうんと左右へあらはれ給ふ也西は大黒也則出雲神也十月に出雲の大社へ神御寄なされいてあれ是と寄迷ふゆへ出雲とは出雲雲出し照か降りかと迷ひ也此世は迷ひの所也去に依て大黒文字大きにくろしとの事則福德ねがふはそこではないとの笑の顔也 下畧

四天王寺伽藍四十八棟縁記ニ云

今宮のえひす中には天照太神宮左はえひす右は出雲の大社大明神也是まいるおさめ也春は因なるゆへちやうまんより参り今宮のえひすにてまいるおさめ申なり秋は果なるゆへ今宮より参り初るがまきしやうの参やう也右是はるんとくわをまらせんが爲也

或書ニ 人皇三十四代推古天皇九年三月聖德太子市の賣買の術を初め給ひ蛭兒に誓ひて商賣鎮護の神となし後世惠美須を以て福神と崇むる事是より初るとかや例年正月九日十日世人幸福を得んとて今宮に參詣すれども天王寺の太子殿へ詣てるは稀也願くは太子をも俱に禮拜なさばいよ、福德を得て家業繁昌なすべし云々

九月十八日今宮の神輿一基天王寺へ渡御あるに西門間近く成れば門の扉を閉て境内へ神輿を不入を舊例とす土俗云伽藍の地は今宮の神地にて聖德太子へ貸置たるゆへ毎年此日戻し吳よと今宮の神催促のため渡御し給ふ夫ゆへ太子西大門を閉て留主のよし答ふといひ傳えて浪華の一奇とす還御には供奉の人々手毎に大松明を振て道を照らしけるが近來過ちあらんかと公命ありて其事止む

今宮の御こしを鳥井の内の石の上へかきすへ置捨て歸れば還御には天王寺より昇参り今宮ニ輿をかきすへていなりに食を喰ふて歸る夫より社人のいなりぐひと申事始りけると也 御こし天王寺

まで御出の心は衆生を今迄預りゆへ共佛法繁昌の地に成ゆへは渡し申との事也歌に よしあしもむさききれひも何事も隔ない

のて佛なりけり ……原本コノ所ニ以上ノ書入アリ……

四天王寺秘密記ニ云 四天王寺の伽藍を勝曼院より参り初めて西門へ出る迄を人間妊身の十月ニ表ス

今宮の惠美須といふは母の鳥居より生れ出しを今宮の惠ひすがほとこの心にて鯛をはさみしは我が胎をはさみし心也則四天王寺は四大の心にて母の胎内より生れ出し心也

十日 戎

商人の欲に心や狂らんえひす参りの笹かたけ行
笹かたけ通る人こそ一日はあくまで酒に戎三郎
雲に聲かつらぎ晴て一つの 虎 十

……以下原本空白……

○廣田 森

四天王寺細見記ニ云

廣田明神は六道の上にて廣く書の内にて ⊕ 圓滿するとの文字則た、ら神にて吹屋信心する也 哥ニ

た、らふむいもじのいかた土なれば中に黄金の佛こそあれ

四天王寺秘密記ニ云

廣田の明神は胎内より産落したをひろひあけてそたてたるといふ心也則これひろたといふ心也

……以下原本空白……

○浮名どころ

今宮廣田の森を浮名所といふは此邊閑情にして良もすれば浮氣もの、心中ある所ゆへかくは呼ぶ

絃曲時雨松の唱歌ニ

あれくむかふに今宮の廣田の森と詠めやる身にまみくくと小夜あらし浮名所と名も高く世にもうたひし
もしほ草

因ニ云 男女の中に誓ひに立る入墨を昔は浮名ほくろと呼たるよし 松の落葉 傾城請狀に

第一には間夫狂ひ浮名ほくろに入性根

とあり五ツ雁金の唱歌にかあいかひなの入ほくろと書しよりは浮名ほくろ艶たちて聞ゆ

○名産闇の夜

元祿寶永の頃までは當村より闇の夜といへる壺蘆ヒョウケンを出せり藏頭藏尾にして幕臆マクホク分らざるゆへ闇の夜と號く人に益
あるものとして帶佩オビヅとして珍翫なし珊瑚珠の緒々に對して貴寵せらるゝとかや今は絶て彼村にひやうたんを作らず闇
の夜の名だに知る人希なり

○干 蕪

天王寺の土地は蕪の名産にして農家に多く蕪を作りて市に出す生なるも賣買すといへども専ら干蕪として諸人賞
翫せり極月より正月迄の間は竹垣を高く拵へて干蕪とす又近在今宮木津の邊にも數多干蕪を出すといへ共天王寺
には味はひ不及これを目利なすに少シ細長きを天王寺とし木津今宮は眞丸キと知るべし

……以下原本空白……

○今宮村庄官

當村の庄屋村生利兵衛宅は元和年中大坂合戦之時奥州之大守伊達政宗殿此家を御本陣とし給ひ後世の語り艸にせよとて 屏風一雙甲冑其外鎧長刀の類を被置下今に持傳えて御代官衆交代有て新代官檢見之節は取出して見ると也

……以下原本空白……

○十萬堂

來山の躰今宮村にあり其裔孫存す來山は原堺津の産にして壯年に居を大坂船場に移し其後此里に閑居す其艸庵を十萬堂といふ額は悅山の筆也誹諧を以て世に鳴る浪花の逸人也 攝陽年鑑ニ傳記委シ

……以下原本空白……

○河伯閑居

河内屋太郎右衛門は船場北久太郎町の兩替屋也生涯風骨妙才崎慮世舉て一休禪師の再來といふ眞に宗純大徳の變

化かは頗る君子の質ありて蓮のにこりにそまざるかことし英々たる仙髻牡丹の姿ありて富貴なるもの也終に浪華の南に隱逸し陶か菊を愛せしに傲ふはた諸道にわたりて堪能のきこえあれとも常に老聃莊周か道をたつね能をくらまして馬鹿を活る其戲言戲動にしては希有希列なり行住座臥に曲を含みて絶妙ならずといふことなし時に天明八年戊申七月十七日今宮の閑居に没ス

辭世

終にゆく道とはかねてきゝしかときのふけふとは思はさりしを

と在五中將の歌をいまはの時三たび吟し給ひしはいと優にあはれ也生涯の滑稽は川童一代嘸。膽太郎。大丈夫なとに著して世人よく知りたる事ゆへ其一二章を抜萃す

蜘蛛輿に乗て年禮に行話

なに事をまつとはなしに明暮てことしもけふ一日につゞまれは大坂と少し隔たれども市中に近き今宮邊堺へ通ふ掛乞の往さ來さに行ちがふ世話しさは何地も同じ年仕舞豊島先生も足らぬこと知る大三十日百目の所へ壹貫の内渡しは上品の株なるべし夫が中にも其日暮しの長町泊り誰壹文かけて呉ねは掛を乞るゝ覺もなし御藏の壁にひつ付て西風を凌キ往來を當てに破駕籠すへ玉雲流の狂哥と違ひつゞれ緋伴(濡伴)に繩帶引まめ巢を張て居る蜘蛛河童は瑞龍寺からの戻りがけコリヤ〜雲介明日未明から遠方へいかねばならぬ其駕籠持ておれが宅へ来て呉い古布子のかし人があるとやつはり其儘がよい元日じやとて髪月代はせいでもよいかならず其儘が望み駕籠賃はよい程やらふと約束して歸られぬ近邊誰ちらぬ人なき河童なればほり出しの

錢もうけ岡見はせねど何でも來年はまん直しと咄しの半へ堺の大小路まで貳百文の乗人安けれども早速相談して新家から船場の鍛冶屋町へ替かごけふはことしの昇納めかき始は今宮の旦那殿とあくるをまつや注連繩にはや初東風の音信で賣にはこねど居ながらの若戎河童は疾く起て雜煮いはひ屠蘇酌て年禮のこしらへ花色のし目に折目正しき衣袴入口から宵の雲介サア旦那参りましたと門の戸の破るほど打敲くも今宮は所がらなるらめ駕籠昇込んで是从何地へ御越しなされますといふた所は團もたぬ貧乏神マア寒ひから酒でも一ぱい引かけいけふは一家共へ年頭を勤る僕は連ぬから手前共をたのむ横堀のたつみ屋を先へ仕廻夫から今橋邊三四軒サテかよふといひ含め駕籠かき出させ新川を北へ道頓ほり大坂は又格別脊戸門の松みどりを争ひ左なからきふと引かへて往來の人もどやかに河童は破れ駕籠のたれ憚からずたつみ屋の門口から蜘蛛が物申に長髯の手代がどふれ河童御禮申ますとつかつかと玄關より座敷へ通り根が一家筋の事なれば蓬萊の盃は嘉例まばらくひまの入あいだ玄關に腰かけた蜘蛛此うへもないうるさい姿で棒組と世間はなし近年駕籠斗り働が市の側の小揚は粕じやまかし仕事がいから寒ひ時はぬくもるイヤ〜こちとらは極寒の冬でも裸惣身うちが顔じやと思ふゆへ寒ひ事ほとんとちらぬ夫は格別おれもまんが直つたらこんな家の軒下で垣外番がして見たいと高なしの我々咄し玄關へは追々の御禮者附合やら懇意やら曆々の御留主居やら何が來ても憚らず吸口のない烟管くわへ油屋の替言いふたりわいら仲間の割符いふたり問つ語りつ因果はなし手代や小者は手に汗握り早ふいながいはいで箒木まろくに立るかうろたへて番頭殿の草履の表へ灸すへるか勝手も店もさはつくてモウ大かたよい時分とあくまで家内を嘲弄して

永日といふて歸られぬ夫からは今橋邊鴻の池一黨かたのごとくの趣向にて腹ふくる、までおだてさがしたも根は今宮へ引越たゆへ一家中から疎遠にしたをむかついての肝癢々々

落書を以て遊興を妨る話

老眼は迷ひ易し残雨の裏春情は繋きがたし夕陽の前絶景を見はらして美女にもたれて酒のんで此上もなきたのしみもきわむる時は哀情多しかの孟徳がよい年して銅雀臺を立られたも大喬とやら小喬とやら取寄せたい一はいのはかりこと孫子も死地にして幾世といひ身を捨てこそ富家店とて西に臨める樓あり爰に井筒屋淵左衛門とて世々に重ねし大福者御機に入り(氣)の末社あまた引集ひ降日も照日も御幸道の下寺町にしへ景清が熟田(熱)からの日参は何か目當であつたやらけふも清水翌日も清水とあゆみをはこばる、も眞は樓の櫃入りむすめ七合五勺で行水しても名はすめといふ觀世音へ誓を立てることなるべし其頃日野屋喜右衛門といへる人遠鏡を所持しけるが號て遠流見といふ行程百里を祥(詳)にして双なき名器なれば淵左衛門ひたる望むといへども喜右衛門趙氏が璧に准へ祕藏して容易に價をゆるすことなしこ、において淵左衛門秦の十五城を思ひ出判金三百兩に買求め此遠鏡を携て常にかの高樓に飲宴ちかれのま聲色貴妃玄宗が并笛に比し彼すめに遠鏡もたせ後から把へながら朝夕にみればこそあれ淡路しま和哥も及はぬ眞の絶景心して吹け武庫山から浦づたひする須磨の關ほのくみゆる明石がた一の谷の敦盛そは舞子の濱も此間と風景の眺望自慢それに引かへ河童が異物盡しの變住居いつもく淵左衛門が斷なしに家内の隅々まで遠鏡で見さがすゆへこいつ止さす一トもんざくと急に明り障子十枚計り張かへさせ大文字で墨黒に馬鹿よ阿房よと書付て東の堀から差出


せは淵左衛門早速見て取アレ、今宮に馬鹿よ阿房よと大文字で障子に書たは誰が事ぞと末社共へ尋ぬれば傍なる醫者坊これは私推量じやが阿房宮は咸陽宮おすめ様を手に入れたあなた様を羨んで何やらに晝が付といふ河童が悪口と聞て旦那は氣色を損じ腹立まぎれに遠鏡おつ取目當ては眼下の増井の水さんぶと抛こんだ其風情信長記から出た思ひつき尙氣のすまぬ淵左衛門何卒河童が悪口を取おかす手段があらは聞たといへば出入の小道具屋私木の下藤吉が才智御覽に入れませふと羽折ぬき捨坂を下り井戸なる目鏡取あけて元の座敷に手をつかへ忽障子は引込たりイザ御覽あれと遠鏡を引くり返し差出せは遠目鏡は近目鏡ためつすがめつ眺ても彼の處まで目がとどかすこれは出来たりと座中残らず大わらひ即座の頓智おかしひと三百兩の遠目鏡すぐさま彼に遣はしける此こと河童は聞あつてやつぱり馬鹿は淵左殿趙高才は小道具屋といはれた

歌舞妓衣裳にて茶席に列る話

彌陀佛といふより外は津の國の難波わたりに名も高き坂松山一心寺は元祖圓光大師の由ある靈地にておのづから境内も廣く堂宇物ふり精舎こと佗てさながらむかし床かしくおもほへぬいつ頃の方丈にや茶道を嗜て常に四方の數寄人を友とし明暮釜によりかゝりおはしけるが其頃河童も此道に數寄の名ありて宗陳(陳)宗悟がむかしをまたひ花に月に心を盡し春は雁の歸るを見ては風爐の茶の湯を出し又南歸聲を聞ては圍爐裡の炭火に心をへ永き夜を明し閑居のつれづれを慰るさまいと殊勝也一心寺とは合邦が辻を中垣にて軒を隣し程なればわきてむつびも深く互に招き招かれもあるべきに此日まで其事もなく過けるがある時一心寺に

集ひし茶友川崎屋某鴻池誰々辰巳屋など物語の序に近き頃より此隣村へ引移りし河童といへるもの我が宅へも折々來りけるが茶の湯見ぐるしからず雜談もまた詞やさしく聞え侍ると辰巳屋何某の咄しに方丈申さるゝは其事むかしも侍りき利休與四郎とて弱冠のとき道陳もとへ通はれけるが今貴君の詞のごとく道陳紹鷗に申されければ茶を呑せいはんものをと紹鷗の宣ひしもおかしく侍るとみづから一閑居士に比し給ひぬる方丈は聊此道の印肉にやされど一心寺の數寄屋は故遠州候御好み給へるにて今も古しへの儘存し侍れは常に方丈の慢し給ひしも又さることぞかし倍こゝにつどひし人々相談していふ近きころ會を催し彼河童も招すべしと約諾して其日はみなく退出しけり河童は方丈の數寄に慢じぬるうへ此程我を招んため彼數寄屋ニ應ぜし雀舌器の價貴き唐倭の名物珍器を諸方より借り求め給へる噂を聞知り道は衰へぬ心の數寄を數寄なるらめなど斯名聞ぐるしく僻ことはなしぬるぞや歌にも

花をのみ待らん人に山里の雪間の草の春を見せはや

と家隆卿の詠じ給ひしを數寄の置處になし侍る抛笠齋が心持こそあらまほしと獨りごととしておはしける時に一心寺より使僧到來し案内章ひらきみるに我を上客の廻章也ければ最早珍物名器は借り調ひし事にこそいで僕も目驚く程の物借りとゝのへ衆座を亂し呉んとて早くも便りし取寄たる出立栗皮茶縹子の大わた入に黒柿の麻上下三寸餘りの大の紋は  いわねど淺尾爲十郎彼寺までの路すがらみるもの驚嘆せざるはなし待合の其間相伴の賓客も膽を潰してあきれける賓主の禮儀すみ茶室にいたり座定り一禮一答事終り彼の借りよせたる茶器どもを悉く賞譽終り扱拙者がけふの装束我ながらも異様にソレはおかしい姿ゆへ嘸歌

舞妓役者から貸て來つらんと定て何れもおほしめさふが中々左様では御座りませぬ始ての御招きゆへ小袖一重成とも改め出會仕ふと存たが當時貧窮の私名聞ぐるしくも借り調るも道に背き心の花香が淡く存する幸壯年の砌拵へ置たる伊達衣裳何と歟目立ていかゞなれと有合ふを以て數寄をあらわす茶道の風雅そこを存じて有合ものを着服いたした必スかりものと思召な借りものでは風雅がない毛頭借つてはまいらぬと繰返しく河童が深濃シッコイもけふの茶の湯の結構に取集た名器ども皆かりもので有ふがといはんばかりの其仕打強太シッコイておかしうて奥山（節）が筋間宅兵衛なまじや此人元來茶は好で御座る

琵琶を弾て賊を退る話

諸葛武公（侯）が八ッ橋流の一曲に逃て戻つて司馬懿もさる者は妙手妙音の徳のみにあらず人の智勇によつて也一日河童むつび深き朋友のもとに遊び夜半の頃我閑居に歸り門の戸ぼとくと音信る、に下童起出でいらへして頓に明ぬ其儘内にいり門よく塞てよなどいひ聞せ閨房に入らんとせられけるが聊酒氣の醒ざるにや只獨り燈にむかひたばこのけふりくゆらせは更行鐘も聲すみて人待宵もむかしにて耳順の年も今ははや越方行末思ひ出られ戀に憂かりぬ鶏鐘もみな物かはの老の身と思はずも無常を觀しいはでそたどにやみぬへき我とひとしき人のなきことを恨み夜すがの友としては破屏の山水みぬ唐土の故人など思ひ出て丑滿頃までいねがてなるに表のかた凄しき物音しければ何ことにやと手燭照して窺ひ見るにままりの際より鑿鐵木挺さし入てごぢ放さんとする勢ひまさしく夜盜なるへしと尙鎮りて聞居れば外には賊徒あまたと見へて下知していふやうヤチレ火影がさすぞ家内は起たりたとへ起るとも何程の事やある今は忍ふに及ばし速かにこ

ぢ放し抜つれて躍り込めさへは構はず切て奪へと罵りひしめくにぞ河童心に思ふには狂賊の三人四人左のみ大事とも思はねど年老齡かたむきてなすべき術にもあらずねほれたる下部目あきなば我をたのみて結局過し出さん此うへは事靜に賊に物とらせんと心を定め今や我が前に込みきたるやと目を賊（眠）りて待居たりけるが日頃手馴し琵琶の有ければ是ぞ今宵の賊を諫る器なれ目さへ心澄ていと寝ぐるしきにはからざりき此夜かゝるたのしみあらんとはたとへ熊坂袴垂なりとも此一面の琵琶こそ綱牛若にまさるべしと膝にとりよせ四ッ緒彈し須磨の内裡おちよりうたひ出す其聲一たひは高く一たひは低く呂律絲に和して物佗しく夜陰にすみわたりさながら流泉啄木の祕曲もかくやとあやしまる燈はほのかにきらやかならぬに他事なく琵琶によりかゝる其容貌眼中するどに額ひらき雙鬢雪を交へ尋常ならぬ風骨門の戸ごぢ放したる賊徒等此様をうかゞいみておもわずも尻込し闕をもまたけ得ず耳傾けて進ざるもあり機（氣）をのまれて退くもあり此一曲に目を覺したる下男かく表に強盜の多くうかゞひ居るともあらず主人に湯まいらせんと火などたき付いと物靜に態とならぬさまいよゝ奇異の思ひをなし我ごとき數人の強盜を眼前知りながらかく迄優なる舉動をなせるもし鬼にやあらん神にやあらん踏込んで過すよ逃よ退よと我一に身を震はし舌を巻おもひゝに逃散る様子みるより河童走り出で賊首とおほしきを引捕へ先我宅へきたれよや汝らに物あたへんといひがひなくも其まゝ逃歸らは始より我心にてあたへんとゆるせし品此方に納る時は盜せしものをすりする同理我心にこゝろよからずといひつゝ金子一兩取出してあたへければ賊は半句のこと葉もなく早速金を懐中し跡をも見ずして逃歸りぬ此噂誰となく流布しければ人みな其大量即智を感じまかも義氣ありて又仁

なる事を賞嘆しけりされは聖は益聖にして愚は益愚なりと此金子をあたへしこと程近き長町住の非人共傳へき、て突に負たる其時は折々河童が軒下をメツキ、とこぢけるも彼盜賊にあやかりて御惠に預ると盜の眞似する乞食どもこれも其夜の一趣向河童はよく知つて今度は琵琶でいきにくひと破た三味線取出して猿が三匹三下りトテチンを彈其拍子うかれて這入る乞食どもこれが誠の踊り込み下男にいひ付て握りめしの施行は度々の事

……以下原本空白……

○並木千柳閑居

歌舞妓狂言作者並木翁輔は江戸大坂に徘徊して俳諧大安賣といふ聯を出して點者をせし風流人也後年師匠正三の先祖なれば千柳と改名して今宮に閑居す

……以下原本空白……

○並木亭酒店

寛政の頃今宮村住吉街道筋に並木といふ酒店あり歌舞妓狂言作者並木五瓶の出店にてごまめの金平やうの肴を手

汐皿に盛て出し小賣の酒を商ふたり當世流行する五文屋といへるもの、權輿ならん歟志かし並木の酒店は少時にて止みたり其跡堀江の蓬亭より茶店を出せしかど是また少時にて止ぬ今は廣田の森の萩の茶屋繁昌して殊に花盛りの頃は所からとて秋の夜の蟲の音に閑情深し

……以下原本空白……

○藥湯

今宮村藥湯は

呂洞賓傳 不老長壽 今宮潮御藥湯

藥湯を呂洞賓より傳授して毎日せん人ほとも入らん

菊の露か湯の名潮のひるこの地

梁之

……以下原本空白……

○一里塚

當村ニあり 大坂東横堀高麗橋より行程一里

攝陽奇觀 卷之七

慶長九年 公命を請はじめて一里塚を築き同年五月に成就す是は唐土に十里二塚五里一塚とて道法の限りを立しそれに依たる事と見えたり

……以下原本空白……

○關 家 口

古老云 長町の南のはづれを關屋口といふは逢坂の清水の邊を逢坂の關屋と名づく故也

後の世の契りの爲にのこしける結ぶ關井の水莖の跡

今宮村の入口より此邊合法ヶ辻まで道筋に貝がら多くあり地中を穿ば猶出るよし上古名古の海といへる海邊なる事是にても思ひやるべし

道頓堀中はし筋南の端野道より長町五丁目への出口今世馬除ケのある所を關屋口といふ共

…原本コノ所ニ以上ノ書入アリ…

攝陽奇觀 卷之八

○男 色 ノ 論

和漢太平廣記云

書曰比頑童時謂亂風。此乃男色の權輿歟。古來之戒ノ深コト以テ見ベシ。然ニ大家ノ男色アル。其男若資質好トキハ。還テ國ニ補アリ。何者其ノ於君言ハ則用レ。諫バ聽。面折廷爭ト雖亦敢不恐。是故ニ君ノ非心ヲ格コト。老臣ヨリ過リ。惟交色ノミナラズ。余其人ヲ親見ス。但彼前關白家平公ノ男色有ハ。益ナシ尤宜禁之

○江南氣色ノ森

津國難波江といへるは。浪花の津の江南。東は高津の森にそびへ。うしろは今宮譽田の杜。

譽田の杜 廣田

の誤字か ……原本コノ所ニ以上ノ書入アリ……なんばの森に續テ。無緣寺の松をけみて。青々たる中に。八つの櫓をあけたり。哥舞妓は紅あやつりは。紺地の幕

此頃は八芝居ありやぐら幕の辨別卷にゑるす

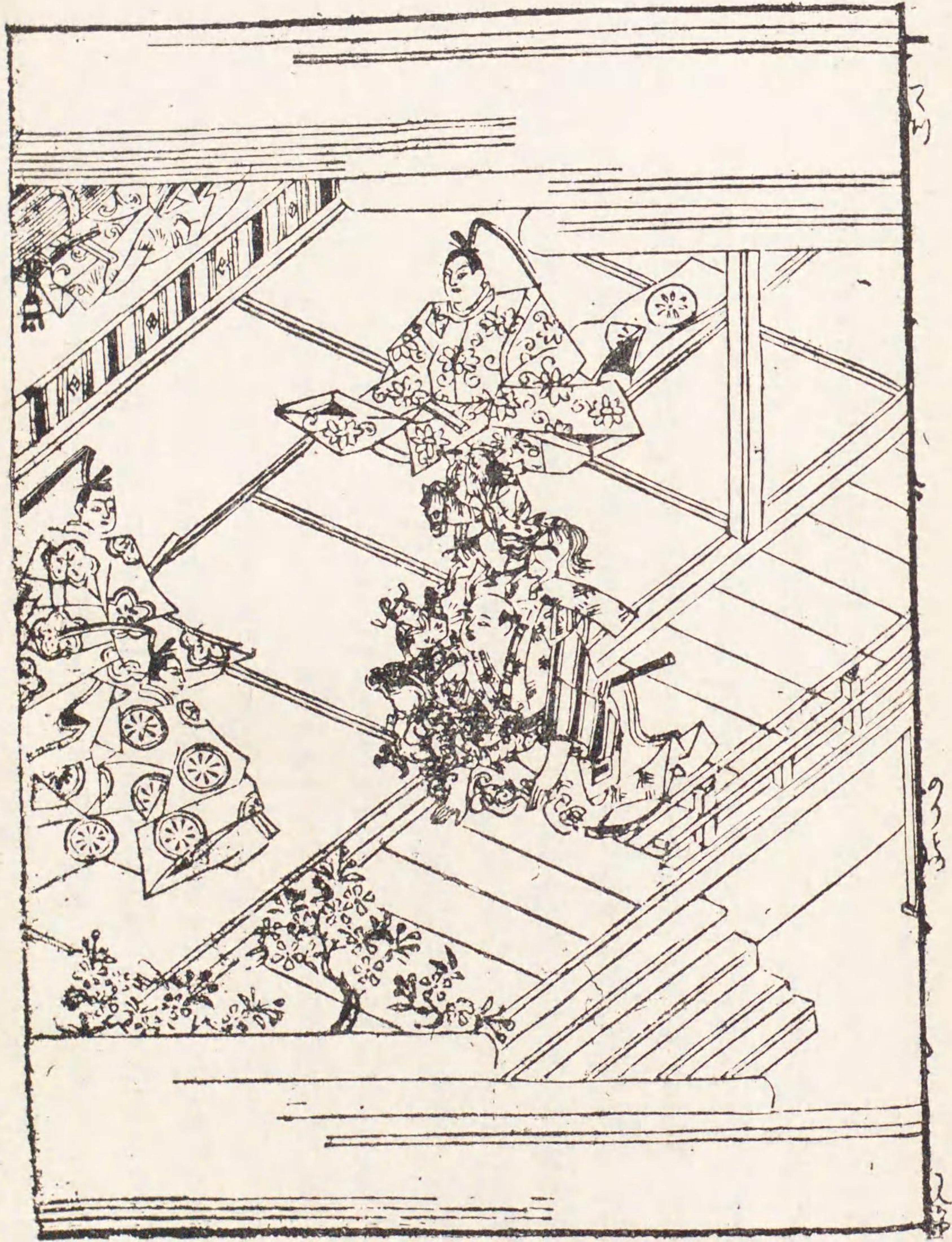
上ノ書入アリ…入違し嵐にそひきへんほんとななる川にうつれば。ひとへに錦を流すがごとし。其なかめ異なること

て。無縁寺のもりを氣色の杜となん名付。あてやか成美童を集て。男色女色の佛を作りて。今様を哥舞す去によつて。此堀を難波色江と呼。嵐がやつせば半四郎

此頃の岩井半四郎は大坂の座本立役也

…原本コノ所ニ以上

ノ書入アリ…が實をこなす。荒木が所作をつくせば。村山が頂羽勢をなす。音羽が時代事をしてなすれば。片岡が世話事をして見物の心をとる。藤十郎が傾城買はそなはつての男。朝夕の飯米をえらすも。もし飯に石やありなんとの用心。尤身うこきもせずに六百兩の給銀。齒一枚が何程にあたらふもふれず。山下が奥家老。茶瓶の様なあたまなれど。せいたいにこふんをませて。毎日彩色鬢かづらかけて。出れば四十にたらぬ男素襖事させて一疋古今の上手すきつる物語に見物をなかつ事妙なり。小佐川はさなからの武士彦右衛門もさらなり。又四郎が手代事。悉書つ、れは役者評判に似てうたて。いつれ此地の舞臺をふんて。一枚看板にのるに壹人もあたるはなし。あやめはさかり少過たれと。愛らしい藝の仕様。さりとは上手也。辰之助は無禮過ると云て志かる人あれど。舞臺の手に入た故なり吉三郎は末たのもし千彌が功者さ。野鹽はさながらのいたづら女よき人のおしへたゆへか。一さし舞ふ所によいところ有。瀧三は人のほれる藝の仕様。千代之助は京の山本掃部によく似たり。藝に心を付たらばきつものになるべし。淨瑠璃は筑後。播磨大夫死後上るりもあるまいとおもへば。またきつものが出たり。殊更ふし付が上手なり。虎が石の上るりに。辰子手摺といふ事を仕出し。人形つかひやうを見せ素語といふ事をはしめたり。あやつり芝居に舞臺を付る事此ときをはしめとす。からくり細工はおやま五郎兵衛其子山本彌三五郎。是を傳て無雙の名人となる。一筋の糸をもつて大山をうこかせ。小刀一本を以て形ある物を作りて。是をはたらかしむ。別而水學の術を得。水中に入て水中より出るに。衣服をぬらさず。纒なるはさみ箱に

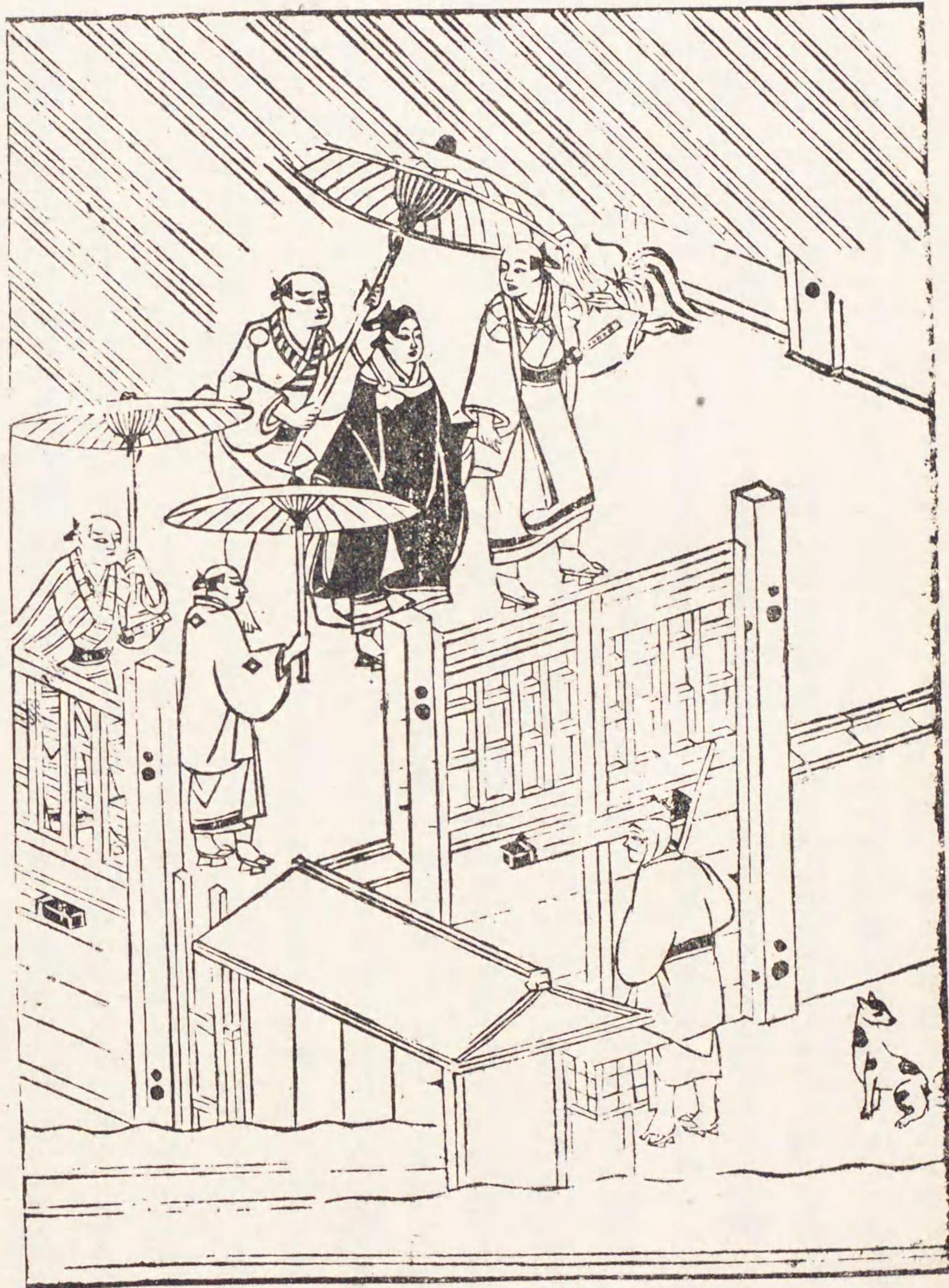


ふねを仕込。川水に浮て用を達す。此儀をいふんに達し禁庭におゐて。細工の術をいらん備。則細工人に仰付られ。山本飛彈掾源清賢と。受領し。翌年雨龍の細工をさしあげ。河内掾に重官任せらるせんまいとけいからくりは竹田近江掾鳥を作て空中をとほす。はさみ箱より乗物を出し人をのせて人形にかゝす事をなす。よろづ今比にくらべて。昔をおもへはあま茶な事なり。多門庄左衛門作彌九兵衛か六法はすあたまにかま髷。白き衣襲に七羽鳥。黒き衣襲にされかうへなんとを付て。大嶋の下袴にはつばの大小をくはんぬきさしにさし。うめく様な哥を謡ひ長々としたるつらねをやつたるを。今の六法にくらへておもへば。あたこびやくらいハツハイやなこんでは有ぞな寛文年中の

寛文中より寶永の頃までは四十餘年を経たり …… 原本コノ所ニ以上ノ書入アリ…

姿は。最早各別にかはれり。荒木與次兵衛か有馬の口論。藤田小平次か。神崎茂右衛門物語。此時分は大小も大刀作り。衣襲ものしめ花色。縮緬。羽織も。羅紗小倉嶋に天鵝絨の半襟かける様になり。かつらも立髪無付かつらになりぬ。袴も金入に衣襲も切付といふ事を仕出し。六法も羽織にいろ有袴を着しも、立はき高く取なし袴の腰は羽織の馬乗を括り袴の腰紋は金のやき付大小も生の金拵本身のいらぬ計。六法の内皆所作事に仕立。出端も次第が神樂つしま三味線も手替りを引かけ。鳴物に乗て出れば見物の心もうきたち。切の六法斗て札錢はおしからしと。三番續の不出來なるも是て見直し大分の入を引事親風か。永々江戸の舞臺を勤。丹前といふ事をよくのみこんだるゆへなり。去によつて六法は風實事は藤田小平次と。此二役はいづれのやくしやが勤るも。是をぢはんにすといへり。譽なる哉小平次。一生顔を紅粉にぬらす。裸にならず。不斷無付かづらに上下か羽織をはづさす。年中姿をかへす實事をして見物にいやといはれず。おもへはく上手也。佛は音羽次郎三郎に残りて。

むかし志のばし。小平次いまた諸藝時にあはずつめかしらなんとを勤る時節。藤田朝負といへる抱子有。俗性賤からす。親は中國方に武門を勤。出頭甚御機嫌に。預りし身なれども。高き木は風にやふられ。忠ある武士は必朋友のねたみ有ならひ。同役のさへによつて。住馴し國を立退。いにしへ召つかひぬる下部をふるへに大坂に影をかくし。年月をおくる。されどもいとなみて世渡るべき道をたず。武具馬具を代なし時を待間の月影を。不幸の窓に見残しふうふとも前に浮世を捨て。淨き國にいそぎぬ。下部の男かひく敷。其跡を取かくし。稚けれとも主人の子なれば捨へきにもあらず我方に引とり十一歳までは育ぬれと。家貧しければ人となすへき便もなく小平次に預けぬ。一子なければ小平次が妻室不便かりて實子のこことくそたて。色江の水に洗粉をそゝきて是をみかくに。金玉をつから光出て。みつからきよしといへるかことく京にも江戸にも又たくひなき佛。十六の正月二日より初而の舞臺勤。女はにきひの種をまきて。戀草に露をうるをす。男は念力の及に指切腕引も、をついておもひの血しほをなす與茂九此美君に泥て若契のちなみふかし。夜毎の通路に金をつむ事あたら塵砂のことし。高麗橋にも伊丹屋太平次とて。女色をにくみて男色の道にふかく。靱負に馴染て全盛の色諍與茂九は太平次が上にたゝん事をおもふ。太平次は與茂九が下にたゝしと。内心に遺恨をふくむ。つゝまる所は小平次一家の繁昌となす。頃は極月中の五日すさましき物とかや。師走の月夜ことには八つ過よりの雪暮に。晴わたりていと白くと庭木の梢に花をさかせ。吉野をこゝへ取寄たるおもひ色江の雪はいかにや床しとおもふ折ふし爐路の扉を音づる、人聲いふかしの林齋とはせぬれば。雪打はらひて君が与與茂九走出てこはおもひよらすの御出。今もいと其元の雪を戀て頼而とおもふ折ふし珍しやと問よれば。されは夜毎の御通路。つもりくして情の



恩かへしにもなるへきかと。駕籠をやめて是まあ此つめたさを見てくだんせ。日比我ゆへの御通路といかふ恩に
 きせ給ひしか。今夜一よさて御恩をすつきりかへしますると。つめたい手を。懐へ。さしもの與茂九もきゆる
 ほど嬉しかりて。先は火燵へゆきけしの酒かんをはつたりと。挽ための茶は拙者か手前はたけが今宵の御馳走。
 御かへりには自身おくりて。雪の曙はとうなりと御望次第とすゑは火燵のさしむかひ。まめやかなる物かたり詞
 もつきぬ物かは。其夜太平次雪見を催し友とする人四五人さそひ。駕籠を續て橋屋市右衛門方へ入ぬ。外の手あ
 いは誰々誰々と。鞆負方へ人をはしらす。御留守のよしにてつかひはかへりぬ。太平次興覺て其行方をとほすれ
 ば。北へとばかり聞にも及ばぬ。扱は與茂九が取寄ての雪見。にくさもにくしと取てかへして。高麗橋筋東横堀
 より西横堀迄の。夜番に一角つ、の夜食代をはづんで。今宵夜更て若衆をつれ。五六人南へ通らん必々いか程い
 ふともとをしてくれなと。丁おくりには是を頼は。半月斗油錢をは寝ながら取事。殊に夜更て門をあけぬは。かれら
 がすぎなり。畏て。門をび錠まつと、おろし。壹歩を握て高野。かく共志らす與茂九郎。鞆負が手を引たいこま
 じくから主従六人。ひよりよき時だにあゆまぬ道を。戀ゆへ雪の高あしだ。あゆみくるしと道筋をかそへ。高麗橋
 へ出ぬ。淀屋橋筋の門を閉たり爰ははやた、くにも及はす。壹丁さかれは爰も通さす。とてもまはらば心齋橋よ
 と。かしこへ行とも、もとをさす。た、けとあけず何事なんめりとおもひながら段々にさかりて。西横堀へまは
 りぬ。此事翌日かくと聞ゆ。與茂九も立腹のあまり。明れは極月十七日より。來正月の禮駕籠。大坂中の出駕籠
 迄を三ヶ日三歩つ、にて借切。金子を渡して手形をとれば。外へ借べき様なし。太平次此事夢にも志らす。いつ
 ものごとく。浮世小路玉子の長兵衛方へ。あたらし駕籠の三枚肩例年のごとく。明七ツにといふてやれとも。小

路かご壹丁もなし。やれといふて道頓堀へ人をはしらせぬれども。三ケ日の内は壹丁もこれなきよし。是はといふて町駕籠をさがせど。右之通太平次大きに肝をつふし。醫者かたをさがせどいしや方の男はいづれも三ケ日が養父入。これも叶はず。是非なく歩行にて禮を勤ぬ。此事終にかくれもあらず。兩方いよくはりあひとなつて。金銀の志のぎをげづる。與茂九郎内々靱負が先祖まであるほとの中。つるには千兩の金を積つて。さかりの藤田を根引に仕たり。後にはこの家の忠臣となつて。主人をいさめ内をおさむる事をむねとす

……以下原本空白……

○近世江都著聞集云 瀬川路考傳

元文の歳日帳に超波か句あり

近つきの女形ありとしの暮

是歳末の發句にして行年の惜くもある哉十寸鏡といふ哥の心に叶ひかの孟子梁の惠王の事を以牛にかへよといふ仁者の言葉は近つきの女形ならば今年は幾ツに成事そ今年た、は何程と指折かそへて情なくかたらひ誠に女形

ほと年を惜むものは不可有といへは我ひいきの役者の年寄るは我身の上より哀れに思ふ成へし是仁者の心也超波か句の情意味深しきのふこそ禿千鳥の軒を子かけふつき出しの少將箱王さまと見初しは過し箱根の兒の舞の折からと顔を赤めて恥しのもりてや餘所に浮名たつ油屋お染八百屋お七の功を積んで大磯のとらの役年を経て戀を積りて女の白波女非人の百とせに一とせたらぬ九十九髪と夫々の役に似合のうつるは功を積しといふか則としをつみし也年を積まで女の情を能々うつして終るを名人そと承實相躰なるはよくくの迎人大底(抵)に平常をたしなまずんは成へからすととりわけ女形程氣取の大事なる物有へからすと古澤村小傳次の大和巡りに法隆寺にて駕籠より出る時けふ一日かごにゆられて血の道か起りしといひしを人々きやうこつと笑ひしか西鶴は是を稱し誠に女形の情深しといひけるは役者大全に見へたり誠に女形は左も有たき事也女形の雛祭は荻野古藤巴か始しより今三月には惣しての女形雛を翫ふ事となれば平常若女形は至て事利らかに諸事陰氣に内場に心持する事そかし根元男なれば自然に陽氣にさかななる心出そふな物そかし爰ニ瀬川路考か發句集に

女かた女の氣てもあすか川 秋の夜中は男氣もいて

飛鳥川はかわりやすき事也女の氣に成て慎んでも秋の夜長くして寢覺かちにてつれくゝになる時は男氣も出へし殊ニ秋の夜と男の心替り安きに叶はんか平常路考か咄に凡て女形は濡れ事と色とを第一にせねば上手とはいはれかたし其ぬれ事に今様は女の方より男を戀慕ひ色々あつかましきせりふを女形のいふ事多くはやり女の本情を破る事あり夫レ女の情は中々男にいか様に惚れても口へ出して女の方より口説事はなき事也文なとにて心を通する事はありといへ共夫も等閑にてはなるへし然れば近松の作の名ある淨瑠璃に皆女の方より男をかきくどき戀の情

至ていやらしき文章を書たり或人は門左衛門へ難しければ近松答ていかにも女の方より簡様にあつかましき事は有べからずいへ共惣して文章上るり(綺)奇語は表を仕組裏を工夫しうはべを作り底意を作るといふ事を能らざれば凡ての狂言淨るりの作はならず中々一通りの見職書物一遍の義理にか、はる學者の思ひもよらぬ事にておしえより開ケぬ心の片意地もの志りの艸紙よみの何ぞ辨へあるべきや女のせりふにはあるましき事男に向ひ色々恥かしきこと葉は是底意を作るといふ狂言の法にて女の心の底意を上へ顯はし見する作者のはたらき也と近松は申されしと也爰を以ていふ時は底意を見するといふ心にて其氣に成り存分にせず内ばにして心に力を入れてもうはべに力を薄くするが女形也と菊之丞申し也。中略扱瀬川路考は京都にて元濱村屋吉次といひしもの也不圖夷屋か座へ出し時瀬川菊之丞と付しとて面白き譯ありと云老人有其根元を聞しに京都三條の邊ニ古仙鶴と云俳師ありて路考と相談して此名を付たり其譯は往古大閣秀吉公朝鮮征伐の時肥前國名古屋の城に在陣まし〜ける時日本の諸侯方御供に候す其うちに龍造寺隆景といふ大名あり 今の鍋島家松平丹波守家也 右隆景の陣屋の前の御堀の内に油紙包の狀箱一ツ落て堀水に浮流る、番人はを見て取上ケ目付へ出しけり萬一敵の内通の書簡にもやと陣中なれば明白にせんと其封の儘にて御大將の御前へ持出けり秀吉公披かせ見給へは女の文也其文章は女の夫ト今度陣中へ御供してはる〜都へ上りたり若も討死もし給んや又合戦に出て手など負ふか疵付なと必しも死し給はんと案し煩ひ葎の宿に寝もやらす獨り案じてそなたの事のみなつかしくかの佐世(用)姫が松浦瀧西の國の末に居給ふと思ふのみにて山川隔て遙なれば戀しきと斗夕月の入ル方こそ我夫のまします方と涙なからに泣あかす人松蟲の聲とてまかれ〜の御縁も盡せぬま、に文してと書くどく女の文なれば秀吉公御覽して糺明し給ふ所是攝津山城國濱

攝津

村の住人瀬川采女といふ侍にて龍造寺の家臣也今度出陣前此采女と婚姻調ひて三日目に出陣したり其妻を菊と云けるが夫の出陣の砌り其名残を惜しみ鎧の袖にすかり押と、めいかなれはとてけふのえにしにやあらん夫婦と成いつしかかはす新枕比翼連理の枝かれて西の遠つ國へ合戦に趣給ふ事もしも是か長き別れとは成ましきかと黒髪を切て彼采女に渡したとひ御最期は國を隔ても同じ臺の蓮葉のにこりにまなぬ貞女のみさほ嬉しくも瀬川采女名残おしみて出陣し今此陣中に居たりける

みさほ文には 三とせがほど添ひて出陣の跡て姫出生せしよし、奥ニくはし

……原本コノ所ニ以上ノ書入アリ……秀吉公聞届給ひあはれに思はれ我陣中に數萬の英士あり采女一人居たればとて敵を亡すの便りを失ふにも有べからず是は戀路の深き情也陣中をゆるし歸して渠等夫婦を永く契らせんははるかかの情の恵みならんとかの瀬川采女に御暇遣され濱村へ歸し給ふ采女歸りて女房菊に對面しければ菊は飛立こくと嬉しく夫婦夫より睦ましく濱村にて目出度戀路の情ある中と其儘語り合けるとかや

或人云 みさほ文 實事

とは見えず事を好む輩の妄作なるべし太閤記にも此文あり後人の附會たるべく ……原本コノ所ニ以上ノ書入アリ……此舊記を京都の仙鶴は知つて瀬川采女と菊か夫婦の中ほど男女の情は深き事はなく女形は此やさかたなるいきを能辨へすんは成ましきとて所詮吉次は濱村の生れなれば幸なりとて濱村屋瀬川と名字して女房の菊といふを名にして菊之丞と名のりけると也誠に近代名人の女形也一生の藝評は世上板本に著せは省きてたゞ圓學院菊之丞事傳記をまゐるして好人の思ひを求るそかし

みさほふみ

こかるまの胸の煙はる、間もなき涙の雨一方ならぬ思ひの闇に伏沈みいつをかきりに露の身の消果ぬ間に夢斗りかくぞとふらせまいらせ度うつ、と更に辨へす硯にむかひとる筆の墨も涙に流るれば

行水にかすかくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり

とよみ置和歌のふることも我身のうへと哀にて中々添まいらせぬ昔の戀しさ只御推量らせ玉りゆへ神の御引合にてかゝる淺はかなる契りとはなりまいらせゆそや會者定離のならひ今更驚くへき事女の身なから口おしく御入ゆへは中々浮世になき身と成りまいらせゆは、又生れ逢ん後の世をたのしみまいらせゆはんなれとこれはこまもろこしとやらんに御渡りゆへは限りなき海山をへたて風の便りの音信をさへ聞まいらせすさふらへは今一しほの思ひの身に絶かねて誰假初に引合せたまひしなかたちをさへ恨み入斗にてい過にし頃夜もすから語りつくしの手枕のきぬくとなる明かたに

身もかくとさすらへぬ共君かあたりさらぬ鏡のかけははかなし

と讀おく古歌のことくこれをかたみと御疊紙ながら残し置給ひし筐まことに袖より外にもらすかたなくうらみては身をかこち朝な夕なにうちもおかれぬ物から面影を夢にさへ見まいらせぬことのかなしさに

思ひつ、ぬればや人のみへつらん夢とふりせは覺めさらましを

小町かよみしことの葉もいつはりの浮世そかし

限りとて別る、道のかなしきにかまほしきは命也けり

まことやみつからもかひなき命存生て今一たび逢まいらせんと思ふにつけて仇なる玉の緒もなかれとのみ祈る斗りにてこそいへ往昔もろこしへ行船をたひふし沈みし松浦佐代姫か思ひも今の我身にはいかてまさりさふらはんや何事もくあはれに思召出されゆは、御嬉しくおほしましゆへと申度事は四方にも餘るはかりにて御入ゆ得共あはたしき出船のよし申ゆへはいと、御残り多く書留めまいらせゆめてたくし

くり返し、其後の御床しさいか成折ふしにか申承りゆはんや餘りに人目も恥しく露はかりもつ、む涙のこほる、をおそふる袖も朽はて、やつる、まの戀衣君故かくと思ひまいらせゆへはわかものなからなつかしく猶いてやらぬ闇のうち深き思ひの淵となるはかりにてこそいへ

かくあらん行衛もあらて頼みつる我心をは誰にかたらむ

書送る我手なからも浦山し戀しき人の見ると思へは

此歌自らか思ひこかれし心のうち筆にまかせり、そもし様の御植置たまひし花今ほとは彌生中頃にてさふらへはうつくしく咲みたれり、そもし様の御かたみと明暮詠入まいらせゆ散りゆは、何を便りに心をなくさみゆ半と打なけきやうくと明れば花を散らす嵐をうらみ暮れは闇のうちへ入枕としてふしまつみ更に目もあひ參らせず人目をあひ花園に立出て暮れは猶も夜もすから月を友とし心を獨りすましものかなしき御事は御推もし玉りゆへ出船にて急きゆへ文の次第も違ひり、ふるとしきさらきも打過やよひ十八日に美しき姫をもうけり、晝はひさのうへ夜はよもすからはたを離れ不申そもし様と添まいらせゆ心地いたし育り、扱も

／＼同じ世にすみながら箇様に遠き海山を隔て明暮心細くいま、我身のうき命は露共消まいらせい半やかてめてたく御歸陣の折ふしは姫をみつからかわすれかたみと御覽し下されいへあはれ／＼互に玉の緒も永くおはしましいて今一たび御めにかゝり積る御事共語り盡し度こそいへ十四歳よりふと假初に枕ならへり／＼また三とせにも成りいはてかやうに別れり／＼事はいかなるつみのむくひそと科なき神や佛をかこち申斗りにていこま／＼と申度御事は浮世の紙筆にも盡しかたく御入いま、まつ／＼めてたく筆を留り／＼と

狂歌活玉集二

申のとしの役者評判の本に菊之丞を二番に評せしと立腹せし人へ

可 由

評判長とう有とても所作事は菊之丞ほとよきものはなし

冷泉爲村卿江戸御滞留のつれ／＼に瀬川路考か無間の鐘の長歌 大坂にてはかきのたんと御覽してよませ給へる御う
たありまた浪速の桂井蒼八も此句々に因て戯れの詩あり古文鐵砲ニ著ス
おもひにはとうした花のさく事と
いかなれはみなあた花と散失てみのらぬ枝に秋風のふく

飛花更片々 片々任春風 想像君所在 時々仰彼空
身こそあらる、うやつらや

なかれゆく身は浮舟の瀬をはやみつれなくかはるおのか面影
一葉風波上 思君夜々情 徒然年月盡 水鏡二毛生
やほならかうした憂目はせまい

戀ちらぬ人は恨もあまならて情のうみに見るめかるてふ
嫣然枝上花 帶雨忽傾斜 誰豈無艶道 深山木石家
いとし男はア、ま、ならぬ

身にかへて思ふ君には幾たひかあはぬつらさもまさる戀哉
難哉池上月 水盡有蒼天 不識來風雨 忽破桂子妍
首尾の相圖や手くたの枕

夜半さひしをしかの笛の忍び音にことのは残る夢の手枕
春闈只私語 深夜荷君恩 何處鹿聲急 哀情滿畫樓
無理なことともとうやらいとし

吳竹のそのふしたらぬむつことにいつはりならにくからぬかは
語々可成非 言々又不非 語言二非是 蒼曉鳥參差

なしみかさなりたのしむ中に

をし鳥のうきせをわけて契る身はなかれの末もたのもしき哉

香閨玉露秋 今夜笑牽牛

臥見鴛鴦被

水頭非白鷗

あはぬつらさはこかれしよりも

あはぬ間はこかれしよりも待わひぬ別れし夜半のつれなかりけり

幽閨明月前 隔夜似經年

眞僞可疑否

唯怖促玉蕊

あふてわかるゝかねのこゑ

あふことの嬉しき事の間もなくて別れかなしき鐘の聲々

涙雨滿双袖 一葦凌遠江

逢君言未解

殘月入斜窗

いつかくるわをはなれてほんに

はてしなくかはる枕のくるしきにぬるゝ袂をほすよしもかな

枕上幾蒼曉 憂心豈不少

何時待孫明

出廓白鷗鳥

ほんの夫婦といはるゝならば

誓ひてしことは艸もかひありてふたつの星のちきりとめなん

一言更不非 豁乎鐵心圍

比翼連理契

死生同一歸

今はむかしのかたり草

とふ人も思ひし人もあたしのゝ露とや消んむかしかたりて

双魚游水戯

寄語浮萍不

今日成思古

千秋萬歲龜

無間の鐘は瀬川路考か一世の名譽なれば其頃大ひにこのうた流行せしゆへ さんことなき御方までも聞へ侍りてかゝる風流もありけり

一大雅堂の藏に あんし作 けいし筆にて三味せん組哥新しやういふたぶしといふものあり其唱哥は

～みるめばかりの。こひぢをすれば。ちかのまほがま。やれなつかしや。

～志のひおとこに。あふ夜はいとど。鳥のこゑん。けにうらめしき。

～ゆみや八まん。まくらはせねど。ねたと思はど。わしやなにとしよにや。

～なるとならすと。ふみをはつくせ。かとにたてたる。ちつかのちきり。

～ゆめとおもへば。うきよの中は。うきもつらさも。けになきものを。

～とてもゑんなき。わか中なるか。けさははけしく。ふく山おろし。

～われかとのこは。とうころしゆしやか。こゑをきくさへ。わしやみかなゆる。

～こゑをきくさへ。わしやみかなゆる。ましてそふたら。わしやまのづよの。

～まつにござりた。いとしのきみよ。こよひござらは。わしやこがれ志の。

〱さてもやさしや。いとくすのはや。なにをたよりに。まいはいかゝる。
 〱きみをまつしま。おしまのあまの。たもとひかたき。わかなみたかな。
 〱みやまおみづは。そこからすむか。きみかこゝろも。そこからすむか。
 〱こんとごさらは。もてきてたもや。きぶのおやまの。ひの木のをだを。
 〱ひらや小まつの。わかあさかよひ。つまかぬれい。いそうつなみに。
 〱あほづかい津に。身のあるときば。のほりたいよの。さかもとまちへ。
 〱かとにたちたは。八もしさまか。よかせ身のどく。やれうちごされ。
 〱ふけよまつかせ。あがれよすたわ。いまのこなたの。ぬし様みたや。
 〱ひとよきりこそ。きくねもよけわ。きみと一夜は。いよねもたらぬ。

……以下原本空白……

若衆形は古代は狂言の一端持し肝要の役にて是非なくて叶はぬ如く成しゆへ上手の若衆形もおほく出て初代市川門之助などは別して名高く其後初代佐野川市松などは若衆形にて黒の大上吉に迄至りし程ゆへ見物も別して賞翫せし也其時代は若衆形多くきつとじたる藝を専ら勤しゆへ後に立役へ拔しもの多し近頃は若衆形衰へて多く女

形よりの兼役と成しゆへ偶若衆形勤る者有ても後には女形へ拔る事也全體狂言に限らず中古迄は衆道専ら行はれしゆへにや明和安永の頃までは三の朝菊の園などいふ衆道細見の書も出版せし也

男色細見菊の園 明和元の印板

餅好酒中の趣をまらず上戸は又羊羹の甘きを憎む寒暑晝夜かはるゝ時をなし春の花秋の紅葉いつれをか捨何れをかとらん男色女色の異なるも亦まからん歎吉原に細見あれば堺町木挽町には四季折々の番附有て世の人普くありがたかれ共恨らくは此道の盛なる事をまらざる愚痴無智の凡夫もあらんかと最眞の腕をさすりつゝ、みづから有頂天に登り夢中に筆を採てところ斑の謔言をそこはかとなく書付れば馴染の名に至てその顔ちらくゝとて目のあたりに出たるはア、ラ不思議や生靈にあらずんば是親玉のかたまりならんヤイ餅好の衆生どもみだりに是を笑ふことなかれナント一番誤てその粕を食ふに至らば漸にして酒中の趣をまらんきのえ申葉月の頃水虎散人悪寒發熱中に書す

此書中ニ其比は在戸中に男色の在場所十ヶ所にして若衆の人数惣計二百三十一人成るよし見えたり是以男色の盛ん成しをおもひやるへし……原本コノ所ニ以上ノ書入アリ……

男色細見三の朝 明和五の印板

海參蟹ナゲッコに向て問て日行が歸歎歸が行歎蟹答て云尻が頭歎頭が尻歎女郎すき若衆をいやがり若衆好女郎をそしるその論むかしより今に至て勝もなく負もなく兩道ならひ行はれて吉原にべら坊あれば堺町にたはけを盡す遊の品は

かはれどもつまる所は粹も野夫も智者も愚者も彼有頂天上の佛果を得てはにうがにうむちやらくちやら心こゝにあらざれば行か歸歟歸か行歟尻が頭か頭が尻歟たはひのなきこそ遊はよけれされども未此道の味ひを知らざる愚痴の衆生を導んと江戸男色細見に京と浪花をくわえ三の朝と題して年立歸る春の日と共に鼻毛のながき世上的たはけどもを歡しむるといふもまたたはけ也明和五の年子の元日水虎山人謹て恵方にむかひ智恵をふるふて書す右三の朝に出す所の京宮川町の子供人數八拾五人大坂道頓堀の子供人數四拾九人其餘諸國男色在所尾張名古屋駿河府中。伊勢古市。相州伊勢原。下總銚子。奥州仙臺。同會津。紀州三門市。同禿宿。同紙屋宿。備前にはせ。安藝宮嶋。備中玉嶋。同宮内。讃岐金毘羅。右の所々旅芝居の子供あり多くは大坂より出る阿州徳嶋さこ 八丁目伊勢嶋新太夫座其 豊後濱市に二 外二三座あり此二ヶ國は其國に歌舞妓座ありて子供を仕立近國へ旅芝居に出る也此外唐土天竺阿蘭陀瓜哇四夷八蠻男色あり所等追て考へし

舞臺子といふは藝に出る若衆也 蔭子とは藝に出ずして客に斗出る若衆也

……原本コノ所ニ以上ノ書入アリ……

○佐海町 吹矢町 子供直段晝六切夜六切 但し舞臺子蔭子同様なり

○仕舞 三兩 片仕舞 晝壹兩貳歩夜壹兩貳歩外に小花一歩ツ、

○他所行は 晝貳兩 夜貳兩 但し九一日にても一時半時にても同斷

……以下原本空白……

西鶴大鑑云

往古男色の昌なる頃は若衆の色情も深く今の野郎若衆かた制外子を寵愛するとは大ひに異也正保慶安のころ世上鶏合はやり時峯の小さらしとて其頃時めきし若衆小判に飽せてよき鶏を三十七羽求め庭籠に入てたのしみけるに憎からぬ人の尋ね給ひ添臥しける其頃は我内へ客も來りし事にてもはや八ツならば歸らんとあるに小さらし別れを惜み八ツにはまた間ありといふうち三十七羽の鶏はたゝきを揃へ聲々にひゞき渡れば客は取急き歸りぬ小さらしそのあけの日戀の妨けなりとて金に飽せし鶏をみなはなち捨させしと也これにても色情ふかき若衆のかたへつほ入の風情思ひやるべし

○優家自筆書畫之話

近世三都はいふに及はず津々浦々までも俳優家の自筆の發句夷曲などを乞得て賞翫なす事流行す其はじめは寶曆五年の冬中村桑太郎俳名 鯉長江戸ふき屋町市村座より京登りの名殘狂言は阿波の鳴戸夕霧の役詰に丹前若衆鏝おどり傾城花笠をどり狸々亂れ右五通りの所作九月十八日より十月十日まで勤む置みやけの巾紗に

立かへりやかて木曾路や冬の梅

といふ發句を自筆に記し毎日見物へ出せしより起り其後は嶺琴舍慶子四澤堂春水など書畫ともに能し乞得て秘藏する人も多かりしがこゝに一奇とするは嵐小六始雛介改叶 雛介正云藝道に妙あること世人よく知りてその名をばいわずして唯玉と稱すまた風流の道にも疎からねどはいかの發句は生涯のうちに一句吟ぜしのみ也

山里や茶漬の菜に蜀公

其頃の摺物などに眠獅の表徳をあらはせし發句は何れも二斗庵下物の代句ならん

○近松半二名言

或人北條時頼記の戲文道行くまがへ笠に老母と兄弟の娘三人つれの道行に虚無僧に打扮しを難じていふ虚無僧は二人の外同行に相成らざる法令なるに此作者はこれを知らざるにやと笑ふ時に竹田出雲

まのび音をいつちらべたる事もなき親子三人跡やさき三ツの哥口吹揃ふ

とかくのこく親子三人跡や先と書たる文段にて三人同行には相成すと答られたるよし又近松半二敵討襪錦といふ戲文を書たる時道行對の花鍼の文段に

備後の國はや立出て行先はあてども浪の吉井川中畧急けはまはる車坂いそがぬ顔でふらくとのほる兄坂弟坂親の敵を持し身は

と綴れるを執筆のものかの國の案内をよく知りたれば兄坂弟坂といへる所ありや我は志らざるよしいへり半二いふいかにも兄坂弟坂といふ地名今までにはなしもしやこの戲文發行なせば後世に至りて其名を呼ぶ坂も出来なるとぞこれ名言也道行の文段地名を委しく探るには及ばすと聞とり安く風情ある名をおもひ寄りて綴べき事作者道の祕密也

新題百首の中に

散 樂

朝つく日にはふ小松のはしの上をねるや翁の影そゆたけき

戲 場

見む人の心におもへわさをきの泣みわらひみあふさきるさに

機 關

見るかうちに人も草木も波のうへに棹さゝぬ舟の行まかふ也

散 樂

久かたの天のかはらに宴樂ゑしきせし三の翁そはしめとはきく

戲 場

こゝろみにたはふれにくきわさをきやあないひちらすたはらはのこと

機 關

めくはせもまねくも人にたかはねはいかりし君もむへならずやは

散 樂

攝陽奇觀 卷之八

五井蘭洲

同

同

川井桂山

同

同

笛つゝみ聲も高砂うたふ也みたりのはふり袖をつらねて

加藤竹里

戲場

聲をつくり顔をいろとるわさをぎの泣みわらひみくるふまはゆさ

同

機關

きさみなすたくみはあやしいけること牛おふ舎人めくる小車

同

……以下原本空白……

○田 樂

伶人の舞樂のちらべ末いく條にかわかれたるながれての世は田樂といふもの出來て専らこれを弄ぶ閭里よりはしめて槐門に及びその舞曲に。高足。一足。腰鼓。振鼓。銅鉞子。編木。殖女。養女等の數種ありこれ猿樂の一變したるもの也とぞいまたその起る處をちらすむかし郁芳門院白河院の皇女也加茂の齋院にて坐せし皇后ならねと門院と稱へ奉るこれ初也ませ給ひしかは姑射仙宮の内にさへ召し催されて田樂御覽の事まばくになりき此後五十五代の帝 後醍醐院の元弘年中また洛中に堪能の者多く參り聚ひしかは鎌倉の高時入道本座新座の田樂を呼ひ下し日夜にこれを舞踏らし

みづからもこの戲をなして遂にその鹿を走らし天下南北朝とわかれて北朝の九十七代光明院の御時貞和五年の頃元弘より十八年の後也 田樂また盛りに洛中に行はれ將軍尊氏これを好み給ひき抑田樂とは田家の樂といふ義にやその舞曲に殖女うへめ娘女といふ名目あり殖女とは田を植る女の事なるべし養女とは蠶娘する女の事にや田を殖蠶を娘ふみな田家常の業にしてそれらに打扮て舞なれば田樂とは名けゝんまれるものに尋べし以上俳優考の說 亦一説に今の世に豆腐を短冊形に切て竹の串に貫きねり味曾を塗りて焼を田樂と稱るも彼か舞踏るとき長き竿に攜るありさまを思ひよりてこの名を負したりといへり按ずるに放下刀玉は田樂の所作也田樂廢れて放下僧といふもの出來そのち放下僧も又廢れて今は上竿かろわざし伎のみなり刀玉今これを品玉といふ法苑珠林に西域の女戲に五人三刀を傳弄たづなづして加てくはえ十に至るといふこれ刀玉なりと駒谷山人いへり匡房聊の洛陽田樂記を按ずるに高足一足腰鼓振鼓編木殖女娘女等みなこのころの曲目也その打扮或は九尺の高扇を捧あるは平蘭笠ひらいきを戴き或は蒿わらの尻切はきを穿或は裸形にして腰に紅衣あかみを巻き或は髻こむぎを放て田笠たのかさを戴くと見えたりみなこれ院中白河上皇の侍臣仰によつてこの戲をなしたる也文安田樂能記是年三月十七日後花園院の皇子伏見殿田樂御覽同十八日には將軍義尙の連枝今出川義祝田樂をみそなはせし事を記したり文安は後花園院の年號にて明徳四年より五十六年後なりの番附には

勢田の春敲門しゅんかかの能

女沙汰の能

北野物狂ひの能

尺八の能

なるこの能

書寫の能

法然上人の能

小野小町の能

屏風の能

實方の能

以上十番

三月十七日伏見殿これを觀給へり次の日の番組は八番也悉くかい寫さんはくたくしこの後は猿樂のみを催されて田樂はいつとなし廢れたり田樂刀玉の事は長明の發心集にも見えたり

貞和五年六月十一日祇園の執行行直といふもの太平記には斗敷の沙門とあり四條の橋を渡さん料に本座新座の勸進田樂を興行せしかは攝祿(録)の大臣大樹座主良賤の僧俗に至るまで四條河原に棧敷を打てこれを觀たり一の齣サテラは本座の阿古亂拍子は新座の彦夜(又)刀玉は道一など各々堪能を盡す程にや、その曲も果て後新座の樂屋より猿樂を出してその猿いと微妙ニ舞踏る

……以下原本空白……

○唐山勾欄之事

槎客採聽錄 卷之下云

芝居歌舞妓淨瑠璃からくり等定りたる場所所有之哉定之外は禁制にい哉狂言仕組は如何様の事はやりい哉看板の書やう或は仕組はやり歌などに禁制の事も有之哉并役者名目の事

一歌舞妓芝居踊り狂言惣名を劇と云俗には戲といふ小歌を曲といひからくり芝居は稀也日本のごとく定芝居の場所を構る事なく定の外禁制といふ事無之皆誰某の組とて役者の組合なり人家祝事客來等の時招き雇はれ又一二

日二三夜ツ、所々にて戲樂を做せり芝居の場所を戲園といひ地上に高き舞臺を架し其上にて戲樂を設く戲園の惣門口に座本の姓氏張園李園など、二字を大書し看板には某園に於て某月幾日何の戲を演ると所々に書付張るく也其期に至りて唱戲を設け座本より見物人に酒肴を饗應す其後見物の者座本に禮銀を遣はす也北京江南浙江福建等諸人多く來り聚まる所には毎日戲園數十ヶ所有其仕組大低忠孝節義の故事多し尤狂言はやり歌等ニ朝政を誹謗する等の仕組禁制也又歴代帝王后妃古聖賢名臣等の像に打扮する事禁制也神仙道佛等の像を裝ふ事は許さる皆善を勸め惡を懲すの仕組を專要とす役者名目の事忠義官員豪俠の士に出たつものを正生と云壯年のもの風流の才人等ニ出たつものを小生と云立役の類にて或は王侯になり佛神の像になり又は家人等種々に出たつものを末と云武烈の惡人(倭)の人品になるものを淨と云傭夫奴僕或は生質不宜小人になるものを丑と云女形を且と云其内老婦媼姆になるものを老旦と云貞靜なる婦人になるものを正旦と云風流の艶女妾婢等になるものを小旦といふ又戲樂の内管絃に合せて歌をうたふを唱といふ談說或は掛合問對するを白といふ

遊女町遊ひ芝居見物次第にはやりい哉前々よりは衰へい哉芝居見物の内男女何れの方多くい哉出家も見物いたしい哉の事

一遊女あそび芝居見物昔年に比すれば當時粗減少せり婦女は自分の家内にて唱戲を做しむ外方の戲園に至るもの稀也まゝ、五六十歳の老婦行向ふ者あり出家は戲園に至るもの多し

或書ニ云 唐山の勾欄は漢六朝の頃樂府と稱して行はれしは皆詩を謠ふて舞し事にて日本にていふ白拍子が朗詠などに合して舞と同じ事にて芝居の事ニあらば唐の玄宗皇帝の時はじめて傳奇院本とて芝居狂言のはじめと

すといへ共いまだ盛に行はれず又宋の徽宗皇帝のとき鬻國の人來朝せしに各美麗に粧ふて面に粉紅を施したる
 躰を其まゝ優人に命じて其貝カタチに擬して舞はせらるる是を五花鬻弄の舞と稱して其時に行はるる是を唐山トウサンとばる狂言
 のはじめとす此時より民間に一種の勾欄コウラン戯子シヤといふ者出來多くは三國志漢楚の戰を狂言に取組て大に世に行は
 る厥后金の章宗皇帝の時董解元トウカイゲンが西廂記シヤウシヤウキといへる狂言を作る是唐の元稹ゲンジンが會真記ケイシンキに擬して作れる狂言にして古
 今芝居狂言の規範とし唐朝より以後代々のはやり狂言多し

唐山にては田元師テンケンシといふ神戲場を守るといへり

……以下原本空白……

○通り札

此通り札は寶曆明和年間中の芝居三桝大五郎座の連中へ配りたる札なるよし中古までは芝居の連中とても嚴重に
 かくのごとく通り札を持參して木戸口を通りたりしが今は猥に成行ぬ
 延寶年間道頓堀花道といふ發句集に

配り札や伽羅は鶯の初芝居

岑野 惟 舟



顔みせや安堵の御判くはり札

宗 先

元祿中の院本かりがね文七の戲文の中に安治川橋芝居顔見せの足揃の條に配り札の事見えたり

〇五人仲間が手を揃へ付ておりてとほして進ぜふそのたいには配り札を澤山にくだされよ云々

護運柳營傳ニ云

八代將軍有徳院殿いまだ紀州にて得之丞殿と申せしとき御部屋住の間は和哥山の御城中におはしける寔に梅檀は
 ふた葉よりも芳しと三四歳の頃より他の嬰子にことかはり聰明英智にましましける七歳の御ときの事成しが京都

攝陽 奇觀 卷之八

より嵐勘三郎といふ哥舞妓役者和哥山表に於て日數廿日の間狂言盡興行仕度よし御願申上げる所に 御赦免あつて三月上旬より始めける寔に當地において珍らしき哥舞妓芝居なれば一家中を初め城下近在の百性町人見物の山をなしける得之丞殿も御幼年にましましては御見物遊され度思召れ其段仰られければ家中の子供など七八人同道にて目立ぬやうに忍びて御見物有ける所早朝より相初りけるに狂言は源平弓箭勢げんへいゆみやのいさほといふ外題にて清盛公と頼朝卿など出しが二段目の詰にてあり御退屈ありしか得之丞殿御歸城有べしと仰られしかば御供の子供衆其外の士も残り多けれども是非なく御供申て歸りぬ其夜何心なく次の間へ御出有けるに今日召連られし家中の若侍寄合て申けるは扱々今日は面白き芝居を見残して歸りたりいまだ御幼年ながらも此よしを聞き召て仰けるは芝居の面白きとは思ふぞや差別もなくして見物は面白からずとのたまひければ若侍共申やう差別なくて御見物は御道理なれども我々迄を面白き腰を折られしは迷惑千萬也と私語けるを聞き召れ何氣なく本の御居間へ入らせ給ひ御近習を以て今日の御供に召連られし者共呼寄せて仰有けるは其方共は今日勘四郎とやらんか狂言を何とか見物いたせしぞ源三位頼政といひしは誠は太閤の御事と思ふたり又清盛は恐ながら我祖 東照神君をやつしたるものなるぞ兼綱に天下を渡さぬといひしは大坂亂の事成ぞかし寔に歌舞妓者は恐れを知らざるものぞかし我幼年也といへ共紀州の家を生れかゝる不埒なる狂言を見物せば 我祖へ對して不孝なるべし 父君へ此義を申上芝居停止申付なは彼等遙々の海山を越て來りし者共狂言成就せざるも又公の政道にあらざれば見ざるときは二ツともに至しと思ひし故に扱こそ歸りし也扱々川原者は横道なる輩かなと仰られけるこれ御七歳の時なりし最前にそしりし者共は大きに驚き一言の詞もなく平伏して有しが始めて頓智御發明なる事を感じける

○宴 曲

政談ニ云

將軍宣下の御祝義とて家々にて能をすること證もなき事也 台徳院様將軍宣下の時はいまた天下をまろし召されは箇様の事は有ましき大方は 大猷院様將軍宣下の時分政宗三齋などいふ様なるいきり者の仕初たる事か作法のやうに成たる成へしされ共公儀を敬ふ筋なれば誰止る事もならず其仕形を見れば老中を請して喰もせぬ膳をすへ親類近付より末々出入の醫者町人迄も呼び集めむさとしたる奢りをし新に舞臺を立てその舞臺をは猿樂に取らせ又猿樂にすへたる膳椀を懸流しにする類ひ興かりたる驕何の益もなき事也これ仕方有へし 能といふもの夥しき費成もの也然共外に替ものなくてはあかむへき様なし室町家にては御笙ごせうといふ事有て其初は樂を用ひられたり東山殿より室町家は衰へたる事なれば衰たる世の事を我家の法として今の御代まで規式のやうに用ひらるゝ事いかゝ有へきや武或かは猿樂家にて聖徳太子よりおこるといふ事は大なるひかこと也聖徳太子の時より猿樂の先祖舞曲の事を司ることを混して猿樂の初りといふ也南都樂人駒氏の輩みな聖徳太子より以來の樂人にて法隆寺の近所にかくにんの苗氏の地名みなく有之今春日家に天より降りたる海士の面といふものあり家の實とす是は能の海士に非ず樂の安摩なり其面は紙をはためて拵へたる物なれば天より降りたる事さも有へし能の面はいかにしても天より降まじき也されは猿樂の元は樂人の家より別れたる物と見へたり當時猿樂に物入多きゆへ改めて樂を用ひとすれば舞樂の物入また莫大也其うへ樂に謡もの絶たるゆへ人情に遠きもの也是を考へ合て愚

一金卅五兩	實 敵	三升松五郎	一金廿二兩	若女かた	嵐 若松
一金七拾五兩	立 役	姉川新四郎	一金八十五兩	同	藤川友吉
一金廿八兩	敵やく	嵐 音八	一金八十兩	同	山下金作
一金三拾兩	同	中村歌右衛門	一金四十五兩	狂言作者	辰岡万作
一金五十兩	實 敵	淺尾工左衛門	一金百五十二兩	中女かた	
一金百廿五兩	實 惡	淺尾爲十郎		中通り	其外
一金百四十兩	立 役	市川團藏		はやし方	いろく
一金九十兩	若女かた	山下八百藏		小道具	
一金三十五兩	同	中山一徳	メ千百九十五兩		

三四

歌舞妓の給金大抵これに准じて定例として芝居相續せしに享和文化の頃より芝居は次第に不繁昌に相成たれ共樂屋の身上は身上とは役者の給金をいふ格別に昇進せり當時にては一ケ年二千兩内外の給金を取る役者は多くありて立もの一部はいづれも千兩役者也

作者の給金往古より並木正三の安永の頃迄は高給を取たるなし

近松氏戯文の作料壹ケ年に銀壹貫目のよし

並木正三同時の作者福田氏寵松軒高砂屋平左衛門といふ島之内宗 一とせ狂言不出來なりしかば 右衛門町年寄つとむ家業菓子屋

狂言を廿兩とは高砂屋正三がこいた平左衛門かも

此歌にて見れば一狂言の給金廿兩と見えたり當時のごとく高給に相成りしは並木五瓶より初ム江戸表へ三百兩にて下る

○役者給金渡りごいふ事

寛永年中京大坂に歌舞妓芝居初りし時はその一座残らず座本の抱子成しが後々一年住の自前役者と成しゆへ例年十月を入替り時と定め古參新參の座組を相定め其冬霜月朔日より顔見世を初として翌年十月迄の住役者にて一ケ年の給金約束の内半年分を相渡ス例なりしがいつの程にか一芝居二ケ月分の給金を渡す事と成たり大かふき芝居にては二ケ月を一芝居とし中芝居は一ケ月を一芝居といへりまた役者の給金に渡りといふ事初りしは安永六年酉の春角の芝居嵐七三郎座の二の替り伊賀越乗掛合羽大入大繁昌して四月中旬まで興行し打續ひて三の替り新狂言伽羅先代萩出シ砌此年の仕内長柄屋新兵衛といふもの春狂言伊賀越大入にて大金を得しより俄に變心して仕内を退きゆへ三の替り芝居興行も相成がたく一座皆々當惑せしに中山來助工夫にて相談のうへ壹人も退座致させず給金を五日目宛の切拂ひにする新法にて一座承知のうへ初日出シい處原來名狂言にて伊賀越同様の太當り樂屋の内證大きに潤ひぬ夫より已來右のごとく切拂ひにして芝居興行に及び其拂日を渡りと唱へ當時にては十日目はらひ或は十五日目拂などに成て中古までの風義(儀)を失ふ

……以下原本空白……

○役者帶劔

往古は役者の樂屋入に其座の長たるものは帶刀にて長柄をさしかけしが今は其餘風なし古老いふ中古までは役者の借金多く濟方不相成とき分散に及ぶには身軀限り鏡一面古大小長柄の傘一本相渡せしよし

○金剛の事

俳優の召仕ふ下男を金剛と呼ふは往古の樂家入には下男に金剛草履を持たせたる故也しが當時の金剛といふはその主人たる役者の舞臺へ出る衣裝を付ケ鬘をゆふを役目として草履を持事あらざれば金剛といふ名もをのづから失て今はたゞ若イ者と呼ふ草履を取る下男を今追廻しといひて別人也

因ニ云 金剛さうりは昔比叡山安然僧正貧窮にして書を求める力なしよつて金剛法器也を手持給ひて草履を制しよりこんごうさうりと世にいひならはしたると也

○立巡

古老云 諸藝いづれも昔に劣りたれ共當世上達せしものは輕業品玉芝居の立廻りなりとぞいかさま輕業の初め麒麟太夫の綱渡りは小高き處に綱を二筋引渡して是を渡る太夫手綱を離さずして向ふに至りしさへ見物膽をひやして驚嘆せしに當世は紙わたり元結渡りに手綱を用ひず唯壹本の傘を身體の楯として綱の中途に至りさまくの曲

あるのみか小兒を負ひ木履をはきなど目ざましき事いふはかりなりました品玉もヲテ、コテンのむかし飯籬を伏て山猫に轉する類ひは三歳の小兒も見向もやらず芝居の立廻りといふものも昔は荒事師の太刀に大勢一同に倒れしものなりしか今はたても大形に相成り四人詰八人詰の大たてを専としこれに數種の名目あり宙返り手這猿返り杉だちギバ跡返りむな返り釣舟やなぎ五段返りあごつき詰よせ天地ひざ詰そつ首落し千鳥引廻シなといろくある中に立師の銘々得手あり此立廻りの目ざましく成たるは安永の頃敵役三升奎五郎俳號 蘭歌宙返りに妙を得て見物の目を驚し其後天明元年丑ノ十月角の芝居にて中村富十郎中村のしほ上京の暇乞狂言繪馬揃四季筆勢に藤川鐘九郎跡返りといふ事を仕初めて大ひに評よく夫より追々輕業師も及びがたき程の曲をなす事とは成ぬ 江戸にてはカケをツケ打といふ …… 原本コノ所ニ以上ノ書入アリ …… また昔の狂言は當時のことく少シの見えにもかかけを打といふ事なし龍をつかふか又は鬼神などの出には物の蔭より打しゆへかけと呼び太刀打などには打事なかりしが次第に立廻り大形に成りて今は蔭とても兩三人添蔭といふ事を仕初め拍子木二三挺にて打立のみか舞臺先へ蔭臺といふものをいかめしく出すやうに成りて蔭といふ本意を失へり後見すら其心得なし並木正三あやつり舞臺の趣向のとき黒の着付上下にて出られしはかく有べき事也

○閃燭

歌舞妓の舞臺は薄暮を待す指込みに火を照らすといへ共立もの、役者は銘々さし出し 獨燭 …… 原本コノ所ニ以上ノ書入アリ …… といふものを出す閃燭の初めは市川團藏始終顔にて狂言をなす故夜に入つてはその仕内相分り

かだきゆへさし出しといふものを工夫して用ひしよりははよきおもひつき也とて我もくさし出しを用ひしゆへ後には却て火影まばゆく狂言の邪魔に成しかばさし出しを止めて燈火といふものを舞臺先きへ出せしがまたいつの頃よりか閃燭をも出すやうに成たれ共外題看板一枚かんの畫面にのせたる立役女かた五七人の外は決して是を用ゆる事相成らず

因ニ云 市川家はいづれも面上にて狂言をするに妙あり元祖團十郎鳴神の狂言に不動の尊像眼中すがうしてひとみをすゆる事時を移す二代目海老藏も此役に妙を得たりまた星合榮景清といふ狂言の三段目に南都面打の役七めん頬とて尉 般若 老母などを面箱の内にて一役を勤るに奇妙也

……以下原本空白……

○正徳四年午正月出版の評書

役者目利講

歌々先生

役入の女

上上吉

口上役

松川あゝ

百五

今教しては上りの昇山は流るるを
りしやうくは役人替ふのひんて
ほむづまれくあつたれはつ大匠して中法
は役目の名をわづらふと云ふ事教して
角本字をわづらふは流るるをむり
掛成る役と云ふ事と替ふりは
今もはあぬ口上は役人替ふるむら
たのむらて各々替ふるのめり

もらひます東西々々扱わけて御断を申ますは
役者評判本は中比出水通和泉屋八左衛門と申
艸紙屋板行いたし年々古板に書加へて或は役
者舞臺鑑又は櫻欄帯など、外題を替て出し
所に此役者目利講の作者其積と申好者三ヶ津
を三巻にわけ一切づ、の序をつけ御慰に上中
又は白字の上など申位付をいたして役者口三
味線と題號をつけ麩屋町通八文字屋八左衛門
へ遣し申せば早速板行ニいたしぬそれより毎
年せがまれ乍斟酌年々仕り遣ひ所ニ又二條通
正本屋九兵衛方より一とせ餘義なく頼まれや
むことを得ずして役者一挺鼓と申を仕遣ひ然
とも八文字屋と正本屋兩方かけ持ニ同じ事
も成がたく正本屋方は圓水と申好人えたのみ

八文字屋方は例年たへず仕遣ひ五六年以來は評判の所斗は先格を以て其年の狂言の當りを見て自分ニも可成事と評判の仕方をおしえ八左衛門にいたさせ外題目録三ヶ津の序を仕り遣ひ然るに此作者其積一所の江嶋屋市郎左衛門と申新本屋と役者評判本は向後八文字屋相仕あひしにいたされ末々迄入魂にせらるゝ様にと作者色々申せども八文字屋一人していつ迄も可仕由申切不同心にて却て江嶋屋方をさして似せ本又はまぎらはしき草紙など出シいと八文字屋より斷書出い段作者身ニ仕いては心外の至りに存い抑八文字屋八左衛門と申草紙屋は何にて世間へ廣く名を發し哉二條正本屋おなじく鶴屋は古來より上るり本にて名を取八文字屋は京志ばるのかぶき本を板行仕い外さのみ家名を世間ニ御存知にても

無之い然ル所ニ此作者其積松本治大夫方へ上るりを作り遣シ其語り本を八文字屋へ遣シ板行させいてより年々の評判本は申に及ばずけいせい色三味線又は曲三味線禁短氣傳受紙子色情兩ひいな形御伽曾我類の慰書いしよ數多作りつかはしひ所ニ各々様の御意ニ入八文字屋くゝと是より浮世本評判本の名取のやうニ罷成い事八文字屋の功にていや作者其積が功にてい哉此段はゞかりながら世上の人さま御了簡被成可被下い殊更作者の實名を出さず作者八文字自笑と致させ出させい程の深切をかへりみず今にては八文字屋と名を取申上なればたとへは鳥が母と書て板行仕出シいても八文字屋と申名にて賣申との所存高鳥かうと盡て良弓藏りやうざうかくるとやらんにて功をたて遣い作者の申分ももちひず作者一所の江嶋屋をけづり一人





の功に可仕存念是によつて當年より江嶋方ニ役者評判本板行仕い以來は毎年出シい間御求可被下い八文字屋ニは今迄八文字屋と名をとらせい作者の功を奪ひ自分の功に仕度存念在之いへは右之品世間へ披露いたす事きのどくに存じかぶき本くばりかんばん等ニ此方似せ本の或はまぎらはしき本のなど、小書をして八文字屋より出し右之通ニ少にても違ひたる事をかく長々敷書顯し板行ニ可成ものにはやまぎらはしきと申小書仕る手間にて眞實まぎらはしき事にていはゞ此長口上をとめ申が眞まことにてい惣じてまぎらはしきの似せ本のと申はたとへば八文字屋八郎左衛門板など、仕出シいはゞまぎらはしき共可申あの方は八文字屋板此方は江嶋屋板と仕いニまぎらはしきと申わけは無御座い八文字屋様の

評判本又は當世本の作者は其積と申ニ紛れ無之いを其まゝ其作者の仕りたるふりにて新作出し八文字屋こそまぎらはしきとは申へけれ近頃片腹いたいせんさく此方のは數年御なじみの作者御佳例の評判本新規の作の八文字屋評判と御見まがへ不被遊御求御覽可被下い扱京志ばるの評判は一座本ツ、座分に仕い間御まんべうに御一覽奉頼みい追付評判のはじまりさやうに御心得なされませふ

忍じま屋

市郎 左衛門

……以下原本空白……

<p>川系 新板</p>		<p>及 正</p>	
<p>新板</p>		<p>大評判</p>	
<p>あまきりて あかてもま あまきりて あまきりて</p> 	<p>あまきりて あまきりて あまきりて あまきりて</p> 	<p>あまきりて あまきりて あまきりて あまきりて</p> 	<p>あまきりて あまきりて あまきりて あまきりて</p> 

一代記藝評権典

浪舟の名物とて(一)左浪舟の右の(二)藤屋と称して
小舟の風と云書出板せしこと生座の名義と何ぞ
たすのまことよ
一棟那那棟と
ふ小舟と申ふ
新板が一世一
代の上見物新
板のりの藤
評と云ふと
出板とこれ成

序

昔の生ハ一睡よあ十卒の業事と
申のり一棟とあ十卒の業事と
の暇とよ海ふのりあまきりて
まことよこの業事とあまきりて
あまきりての業事とあまきりて
あまきりての業事とあまきりて

藝細評の權輿ならん歟其後には中山由男一代狂言記 中村慶子畫譜附錄 梅幸集 珉獅選 玉の光 桐の鳥臺
一河の流れ 此等出版あれ共其餘の名家に一代記出版なきも多きこそ遺恨なれ

一蝶邯鄲枕 藝品定秘抄

一世一代 中山新九郎 俳名 一蝶

抑享保八卯顔見世大坂中ノ芝居松島兵太郎座が
初舞臺也翌辰春へ向大塔宮ニ赤松則祐の役あら
事にて當りを取八月十九日より頼政追善芝に瀧
口役なれとも此座嵐勘四郎病氣にて引れ其かは
り役猪の早太にて馬とめる場相手が馬ゆへ大キ
ニはね享保十巳顔見世榊山澤村相座へ出勤春は
横山四郎の評よく秋は瀧口佐平次役よろしく享
保十一年は山本京四郎座へ出未年は藤井花松座
へ出春は伊勢平氏に五六兵衛役にて大キに當り
を受ケ享保十三申顔みせは嵐三十郎座五月眉間

尺狂言切にて引八月廿七日より大西芝居にて芳
澤龜三郎興行に出勤濡髪長五郎役大當りにて十
月十六日まで入つめ享保十四酉顔みせは嵐三十
郎座へ立歸り梅ノ由兵衛弟大仁屋小兵衛役當り
二月は篠原合戦を歌舞妓兩芝居に取組花妻座に
て兼平役澤村音右衛門三十郎座で兼平役勤め澤
音におとりはせぬとの其節の噂享保十五戌年も
同座出勤秋は紅梅鞠に梶原役出來キ享保十六亥
顔みせより寅年まで丸四年岩井半四郎座出勤折
々當り藝有之卯之年より午年まで四年打續太夫
本勤め元文四未顔みせ嵐三五郎座へ出元文五申
年は京都中村桑太郎座へ始て登り顔みせ道成寺

にて大入を取り二の替り熊谷次郎左衛門晝夜男
立にて上首尾なりしが銀主のもめ事にて芝居や
み五月より嵐小六座を助に出其霜月大坂へ下り
道頓堀中村重藏座へ住酉ノ年顔みせ姫の死靈と
て道成寺鐘入の所作二のかはり小澤式部同子源
五二役にてあたり寛保二戌の顔見世は江戸中村
勘三郎座へ初めて下り八幡六郎役薬師寺次郎左
衛門と替名して瀧中哥川との藝切は道成寺の所
作不慮に怪我致され大坂難波村より御念頃有し
ゆへ骨繼源左衛門殿を頼にて遙々吾妻へ療治に
下りめされ本復にてその暮寛保三亥顔みせ大坂
中村重藏座へ出春狂言三好長慶の役にて大キに
譽れを取寛保四子顔みせ姉川新四郎座を勤メ秋
は姉川氏より黒船頭巾草履下駄をゆづりうけ衆
の仙人に守彦にて當延享二丑の顔みせより中村

重藏座二のかはり吉岡宗右衛門八太夫後家妙
善二役當り延享三寅年は四代目嵐三右衛門座へ
出勤二の替に團七にて大ニ當り次は小栗判官愈
評よく判官役二度目也延享四卯顔みせは市川龍
藏座へ出勤延享五辰顔みせより京都中村桑太郎
座へ登り顔みせ團七格の狂言取組二のかはりも
評よく寛延二巳顔みせは京嵐三右衛門座出勤顔
見世角力取鐵右衛門役二のかはり神樂岡右衛
門役八月三日より双蝶々に濡髪役相手は藤川平
九郎長吉にてきびしきあたり寛延三午年は春勢
州芝居へ下り始終評判よく寛延四未顔みせ京都
半太夫座へ立歸り齒藥賣荷持久馬平役後室を殺
し死靈つき哥占くづしの所作まほらしく大當り
次は囃の袂に上總之介百性十作二役實曆二申名
代早雲長太夫座本子息文七にて顔みせ袖谷藏大

ニあたり二のかはりは菅原織實悪の藝にて見物
 受よく寶曆三百年は大坂三條定助座へ一筆にて
 下り冬かはり放駒親丸屋仁左衛門役をでかされ
 寶曆四戌年も同座出勤顔みせに久馬平一文奴出
 端あたり二の替りは北川宗左衛門役大當り其狂
 言切にて芝居やみ寶曆五亥顔みせは子息文七座
 本高の八郎兵衛といへるおつとせい寶役二のか
 はりは今川了俊役寶曆六子顔みせは坂東豊三座
 へ出已九大夫といふ一人角力取役二のかはりに
 小尼内記信樂や惣齋二役切程々亂舞寶曆七丑は
 大松曲介座顔みせは高村郷介役切ニ道成寺鐘よ
 り出てのはたらき二のかはりは天竺徳兵衛大あ
 たり寶曆八寅顔みせ姉川新四座へ梶原役千本櫻
 狐の趣向くづしにて二の替り三浦道寸と成寶曆
 九卯顔みせは子息文七興行にて出顔見世は病後

とやらにて少ばかり役二のかはり花みつ憲法役
 大當りすでに當春も文七勤られけれ共親仁ほど
 にないとの評判次ニ神哀揃の當り寶曆十辰顔み
 せ神靈鳴雷と成り女房稻妻悋氣の狂言二のかは
 り奴團平にて大に當り戀女房能太夫定之進大出
 來寶曆十一巳顔みせは同座矢田藤平役二の替霧
 太郎にて當り寶曆十二午顔みせは肥後守役計略
 にてむほん人の仕うち大丈夫の心さらに仕組と
 は思はれぬほど大出來二のかはり料理茶屋にて
 中村吉右衛門との出合よく寶曆十三未顔みせ松
 永大膳なれ共土風幸兵衛といふ追剝になり二の
 かはり双蝶々駕かき善兵衛幻瀧右衛門角力ふれ
 役三役共よろしく寶曆十四申顔みせ鰯口法印役
 高時と成り落合まで大役大出來二のかはり足利
 義尚役すこし斗りなれ共よろしく明和二酉顔み

せ揚屋亭主役誠は六條左近狐と千本櫻格二のか
 はり染分手綱に能太夫竹村定之進役大に當りな
 りしがさはり有て二月より芝居やみ明和三戌顔
 みせは姉川菊八座へ出勤山伏胸脈院役のちに和
 田新發知と成る役よし二のかはり井手下紐に筑
 葉又作春は文七助に出られ釣舟三ぶ大出來明和
 四亥嵐雛介座釋迦如來安土大角二役次かはりひ
 らかなニ權四郎役當り春は忠臣講釋に九大夫大
 當り明和五子年は京都市山助五郎座へ十七年ぶ
 りにて登り淺井監物役四方髪上下にて出端ちと
 年は寄たれど古つはものとの取沙汰間替り信仰
 記せさいの役ことの外評よく二のかはりは術に
 てさまざま變ずる大役明和六丑難波三升他人座
 出勤顔みせは福祿壽と成二のかはり双蝶々ニ長
 五郎母役明和七寅春は藤松三十郎座出勤同六月

迄にて芝居やみ明和八卯春は勢州中ノ地藏芝居
 へ下り千本櫻に彌左衛門大出來明和九辰顔みせ
 は小川吉太郎座へ出春戀女房竹村定之進にて當
 りを取此度此役以上五度目首尾能相勤め此度一
 世一代を勤め舞臺を引るゝは目出度義凡舞臺出
 勤五十年と覺ゆ當九月十八日より初日から大入
 にて當月中上下棧敷賣切無之由何れ仕合人老年
 なれど丈夫にて殊に子供衆は當時盛の立役嘸悦
 ひと存る宗旨は東本願寺門徒にて四五年まへ善
 知識の御剃刀もいたゞかれ奇特千萬也歌舞妓芝
 居初りて役者衆の一世一代といふ事は聞も及ば
 ぬ義尤六十五年以前寶永五子十月に京都榊山座
 にて坂田藤十郎一世一代と看板出いニ付京中が
 最早坂田藝をやめらるゝと呑こんで冬空に汗の
 出る程大入然る所萬太夫座より霜月顔みせより

坂田藤十郎罷出申いと張番出たるゆへ少シ淋しく成たる也是藤十郎度々大當り致せし夕霧伊左衛門狂言が一世一代也近代にては廿七年已前寅ノ極月十日より京都より榊山小四郎大坂角芝居市山助五郎座へスケニ下り夏祭三ぶの役一世一代と出たれ共漸六七日出勤にて京へ歸り詮なき噂にて有しが此度は大坂中御最貞お馴染の仁ゆへ初日より大入序披き浪人伴役序切吉方屋形へ掛ケ付て山三との出合の所よし別して四段目お國御前を迎ひに奥より出則此所にて一座の立物上下にて罷出子息文七殿引合口上にて相濟其身段々は迄の禮を述五十年來舞臺出勤との口上一世一代相勤い義も恐多との辭退口上尤至極の口上切狂言も中々大丈夫の致されやう色事の段至極々々切の働キ物語の場迄甚見物請宜敷先は

大慶目出たしく

……以下原本空白……

○當世痴人傳 けいし

けいしは百濟町の久太郎町交貨鋪也少年のうち嶋の内笹風呂の始娼琴といふを請出して老母の勘氣をうけ金五百兩とりて名前をありぞき疊屋町の貸座敷に格子に石印篆刻の招牌を出して面白つくの世渡りも暫しが内に五百兩の金大かた残なくなりしを金五十兩添て妓を京の親元へ歸し残金五十兩ばかりを三兩のけて路費とし跡にて暇乞の芝居をして西海の波濤に趣かれぬ其時かし座敷の壁に粘ありし詩に

□□□□□□□□
起句 風雲日後可龍攀
遺忘
休言漢柱 希題者
得就 英名獨步還

其後勘當ゆりて家に歸りて亦廊中にて金吾太夫に馴染れし或夜淀八妙林など芝居をして居られしに自分は源太の役にて宇治川先陣物語の最中に支配人より某の御屋鋪の殿様御交代の御かへりがけ今晚中の鳥藏屋鋪に御着なされ明朝七ツ時御出入の町人御目見仰付られたれば只今御歸り有べきよし告來りしかば夫は行ねば成らぬと早速その座敷を立て駕籠にも乗らず萬歳烏帽子に鬘をかけ素袍に股たちを取太刀をはきたる形りにて箱灯燈ともさせて家に歸られし此人の奇事猶多し

疊屋町にて佗住居せられし時吹筒なかりしに竹屋へ青竹三本買にやりて一日大工を雇ひて火吹竹に切られしと也是等にてその判官の氣韻あるを見るべし

○大村屋權右衛門

同書に

大村屋は江南の置屋也名細しきいとが親方也嚴父は孝子を出すといふ格にてこう云始人を抱へる程の親方ゆへその粹なることおして知るべし常に店の彩頭の異見にもかならず色事をするといふても濱の衆濱は小芝居をとほせぬかよいと云付しくらる也或時京に奉公人ありて抱に登る事ありしに挾箱に大金を入れて行に蜘蛛に持して京の所をいふてやられし其時コリヤその中には金は何百兩入てある程に大事にかけよと云付られし也ある肝煎是を聞て餘りの事也といひしに權右衛門笑ふて貴様も粹のやうにもない高で蜘蛛介して居る者が五百兩の金とる程の運はないといはれし也常に七八人の食客絶す在此也此人の一失はまけるといふ事がきらひにて置屋にては大鼓の開傳ができぬとて別に典舖(舖)をひらかれし也養子を九八と云けるが今は其家絶てなし

○端山圖南

同書に

圖南は新興ニフク氏の弟子也小篆をよくせられし薬師風呂の行燈を篆字にてまた、められしを騷客が見てけたいな事を書おつたと破りけるを其明る夜すぐに又小篆にて書れしをかたのごとく破りけり破ると張替々々する程に圖南いらつて篆書にて美濃昏に百枚ばかりまた、めてやられし也

○東

阜

同書に

東阜或は梅花老人と稱す南紀の人もはじめ大坂に登られし頃は大分に印通所持せられしによつて板がねのへこんだ處に穴の明たの斗りを數百丁撰出して貫さしに通して首にかけて青樓に登られし爲八といふ幫間かたはらにありて判官玉すだれを御解きなされといへば東阜應々といひて彼板がねを引抜てやられし也夫より大坂住に成りて儒者にて終られしとぞ彼雷子が鴛鴦鬼伴譯文辨々オビトリノオモヒカキノヒトヒ高大願辨などを著されたる人也

○桂井蒼八

同書に

葛井は大の酒家にて或時客ありしに酒なかりしかば表の折障子をはづし行て客をもてなされし也其家西横堀に有し時くる程の書出しを西横堀の川へとりては流しくあられし也一とせ夷橋へ涼に出られしが橋の上より落て水に溺れて死れき或人いふ故文七先敷が學問の師也といへりこの人も儒をもて業と志られし也

○松島茂平次

同書二

茂平次は大松百介と同時の道戯かた也見物より洋々の聲がかゝると嬉しう成てたまらぬが此人の弊也一年與勘平の役を勤しに葛の葉は古あやめにて例のごとく乗物さし上る見え成しに初日になれば大の男のからだうちを赤く塗りて彼乗物を片手にてぐつと指上しに見物より洋々と聲をかけしによつてめつたに嬉しう成て来て我を忘れてとんと手を叩きて悦びしに樂屋より起重ヒキアゲにて引あげ置たる乗物宙にてぶらくと成りて有し也かゝる卒忽ソツゴツものなる故舞臺へさへ出れば何の仕うちもなければ見物どよみを作りて笑ひけり此松島が地ばなしに坂町ある後家茶屋と色事して逢に行しに行燈はまだ引ぬたそがれ時ほろく雨は降て來れど近處の事なれば袖をひぢかさにして軒傳ひに彼家の格子の外より窺ひ見るに内には世話やきの旦那來りて咄して居る動靜ウツクセいま這入ては首尾あしからんと思ひいなんとおもへど雨に頻りに降つて來るこんな事なら夕べ來ひとぬかさぬがよいにとつぶやきながら腹立紛れ何でも來たといふ證據を残して置べしと急度おもひ付て片足の草履をぬぎて格子の子に引かけて戻りしあくる夕べ彼茶屋に行て後家が手髻をとらまへての大口舌かの片足の草履にて物をもいはず存分に擲きしに後家がいへるは夕べに限つて宵から肴拵へて待て居たに違ひはないそんな逆様な無理な事にあやまる筋がないとあらがふにぞ段々聲高になれば又隣の花車が取さへに來て懷から草履を出して茂平次さまのいひなざる片足は是かへといふ茂平次これを見て成程それじやと恟りすれば隣の花車いふそれでよめたこちの格子に引かけて有たゆへまだ新

しい草履じやのに替つた事じやと今朝からいふていたと語りぬこれは茂平次きのふの夕べ隣の格子をのぞきて例の疎忽せし也と跡は笑ひに成りぬ

○雁

平

本名丸平ノコト也

同書に

雁平は河内在所の人也南の茶屋何處といふ事なくかゝり居られてうなぎで客の肩もんだり碎銀コウギンで妓の狀遣ひに行しくらる也或時壁のこほれの土油の中へ落たるを見て油をすます事を工夫仕出し夫より少シの本錢にありつき米相場をあられけるにある夜富士の山を夢に見てハタにて大ひに踏れたり又其後富士の山を夢見しにかたのごとくハタにて損をあられたり三度目に富士の山を夢に見しに傍の人持をせよと勧めしにハタは賣る「雁平聞入すして亦々ハタをして猶買のせられしによつて此度は大にもうけ終に豪家となられし也扱富有に成られて後方西園ハカサイエンの山水のかけ物の質物を合點にて買れしを或者これは如何といひしを雁平答てサア成りあがりの雁平がアノ質物を安うても金拾兩には欺されたて有ふと人の思ふは必定也それを表裝の直うち五兩で買ふて置けば譏ソツツれる五兩が客への馳走に成ると廣言を吐ぬ

……以下原本空白……

穴さがし

○俳優金毘羅樽

尾上青蛾評 題 忠臣藏

卷首

戸無瀬小浪手踊の間供をよけ
 桃の井が屋鋪荒神松買わず
 勘平は其儘の手で門たゝき
 山科に一日に三人後家が出来
 指帯に去屋敷出と書クおかる
 長持へまびんを入れる由良之介
 疊切らず利屈も取らず平右衛門
 伴内は師匠か爲の由良之介
 一力の亭主うそく石たづね
 定九郎は命の親じやと猪はい、
 千崎か蚤にくわれぬ薬買ひ
 由良之介出しなに一寸鬚直し

つる井の 権羽
 天正の 天慶
 並木の 五瓶
 儘の 川成
 並木の ぬけ道
 入我の 我入
 前髪の 秀南
 大佛の 竹馬
 山灰の 五郎三
 きせまたの 直住
 近松の 大升
 薬師の のぶ女

堀田馬看評 夏まつり

卷首

天川屋鐵炮鍛冶で腔をつき
 一ト夜さに二度月の出る祇園町
 異見した諸士が三人新造買
 其後は勘平が母高歩貸シ
 右馬之丞いにしなにいふ京言葉
 八軒屋まで寝續けにする力彌
 下女のりん割レ三寶て焚付る
 月影でおかる見てとる左り文字

團七があらみは床に置土産
 徳兵衛が女房の顔はうづらやき
 團七は播磨あたりで錢切らし
 賣聲に似ず團七が魚くさり
 義平治の方が理屈と駕やいひ
 蚤の事一寸の蟲といふ九郎兵衛

中村の 芝翫
 富升の 麻石
 西澤の 一鳳
 並木の ぬけ道
 小判の 呂眞
 小判の 錢丸
 あらしの 李冠
 一斗の 升成
 きせまたの 直住
 淀川の 水成
 天正の 天慶
 儘の 川成
 儘の 川成

ぐれ宿の宿老立合ふ畠中
 九郎兵衛は戻つてもドデン耳ニ付
 殺さるゝやうに勇りくついふ
 お鯛茶屋みだれ三人義を結ぶ
 其後は手水半ぶん遣ふ辰
 氏地よけ囃子は畠まはりする
 蚤らみ取は徳兵衛が上手也
 傳八は來世で首の指南する
 其後は寺へ參れど珠數もたす
 義平治が汗をつふやく貸物屋
 九郎兵衛は七町目で髪ゆふていぬ
 團七に水あびたかと女房いふ
 團七が髪とけて鬢厚う成り
 卷尾
 妻は顔夫トは雪踏へ焼印

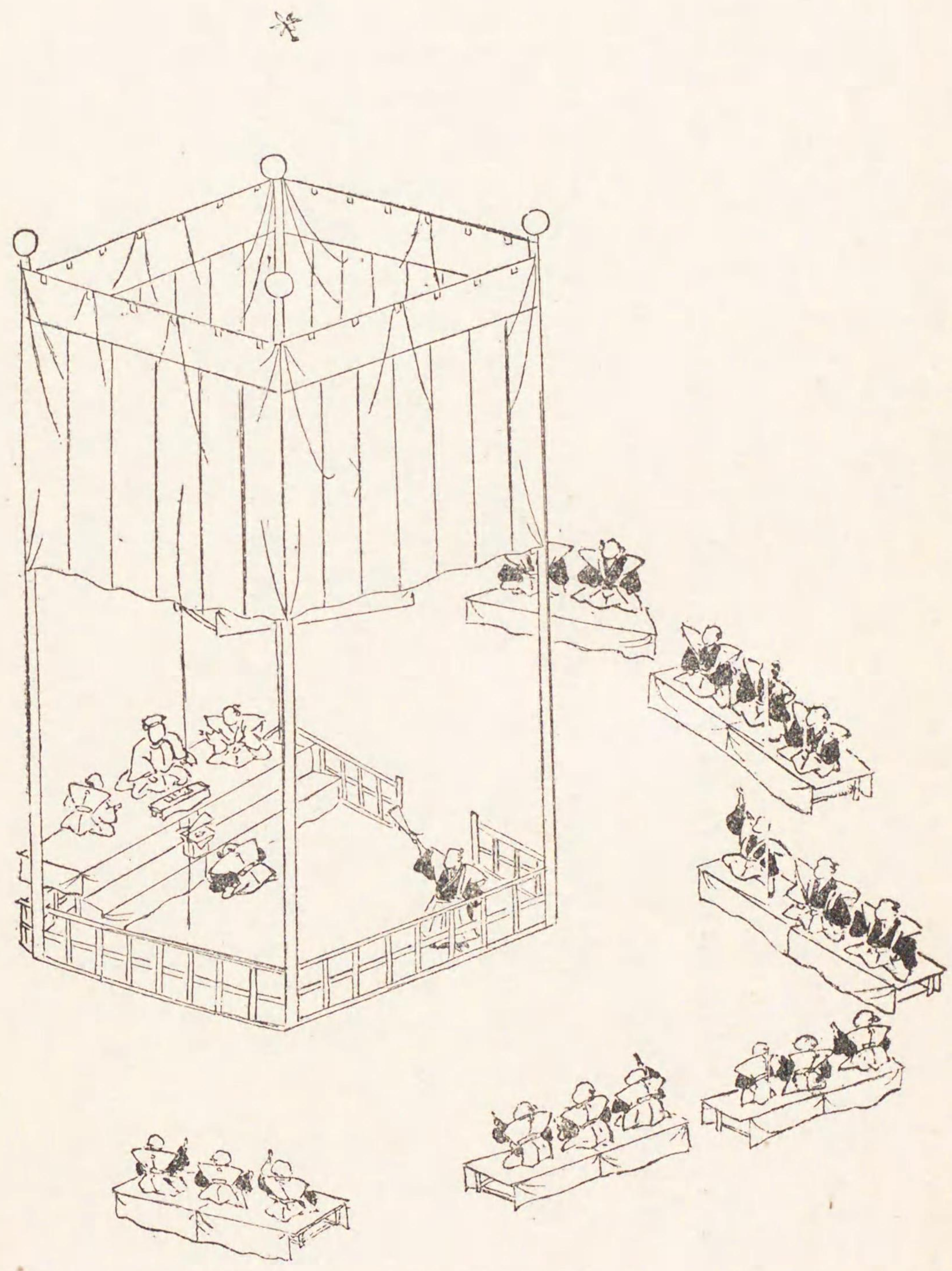
富升の麻石
 加賀屋の芝翫
 山ぼいの五郎三
 よし村の秀南
 やくしののぶ女
 並木のぬけ道
 近松の慶壽
 近松の大升
 竹田の庵里
 岡しまやの李冠
 儘の川成
 岡しまやの李冠
 近松の大升

……以下原本空白……

いごけなき春のかゝりや空高く霞のまゝを打はへて
 かしはの鞠の夫ならぬ去年の秋をこせし桐のはこ板こ
 なりをこそしてつく羽子やちゝかふくごうちあかり
 雲井にまかふひはりか床のあくかれいつるそのさまは
 かみしも着たる娘かもひひふうみよのはるあそび

峯崎勾當調

〔編者曰ク次ノ頁ノ插畫ハ原著者カ自筆ヲ凸版ニセシモノナリ〕



○千日前幫間店

〔編者曰ク原本表題アツテ記事ナシ〕

粹辨當ニ つる井ごん八

十筋ほどなる薄鬢のあたまどうですほりとなる事ならばどんでつはつちてよからうけれども是からはてい
ほといふておくれのかみかけていのりりくはし

野暮枝折云

うなぎの頭鯛の腸いづれも粹の食物となる時節なれと媚自慢する哥妓と横柄な樂藉タイコセキを否がるは粹も不粹もわかる
ことなしこの牽頭といふものさまく有といへ共大概鬢の厚サ耳より上壹寸に過ず鬢短くしてまさに首筋へ落る
がごとしこれ藝者の風俗なりしが今はその風一變して鬢の薄きは稀に成行みな厚鬢に鬢はかけ元結の手控へう
づ高くゆひなして旦那めきたるあたまつきはもと襟のよこれぬ勘定から出たる趣向とかやこれ式の事はなんの物

かは優旃の滑稽に宰我の辨を兼て酒は劉伶に愧ず食は何曾もあきる、ほど喰ひ進退應對興をふくみ大盡の臍をし
て茶をひかしむる事天性さかしからずしては勤がたきわざなるべし先客の心一様ならず譯なしの無藝驕ぎ粹つか
ひの芝居すき穴まりのおとなし顔樂舞をこのむ雅人がり咄し仙人口合天狗晒落といやみの別世界は座敷のもやう
いろ／＼有て一方ならぬうき氣どり天窓たゝかれて有がたいといふを脇からみて笑へども己を愚にして旦那の心
をたのしますこと中々容易出来る所作にあらず去とて地から涌たものでもなく親が藝者になれとて別に産つけは
せずもとを糺せば皆これ同じ流れの里通ひ遣ふ事ばかり知つて儲るすべからぬ小息子或は手に職のあるのら達燭
臺のもとにうかれ過し屏風のうちの悦びかさなりて懷さびしくなりゆけは五匁不拂も五百目ふむも同じ事といふ
不了簡が起り竟には垂乳根の心にそむいて足とどむべき宿なしとなりはて嗟呼二日酔のふらつきに萬金丹のむを
みて申なんと遊ばした腸でも痛みますかと尋たりくつさみひとつすると夫を聞とがめてあなたもマアめつそふな
お風めしたそうな杯と實の親よりあんせつにいふてくれた花車の柔和ナ相も一節季拂が間違と忽夜叉の鬼瓦繪本
の鍾馗にまけぬ顔つきしてろくに言葉もかけず去迎は薄情な者よと爰において人のつらさも身の戲氣も思ひある
べに居い何かの不自由こらえて居ても三ツてついた癖は百迄とやら味ひ物は喰たし酒は飲たしよい着物は着たし
娼妓と附合にも錢はなしといふ身に成ても町の奉公は否也妓僕するのも口惜といふ所から幫間社中へ落こんで
俄に打囃子の稽古芝居に凝た程あつて身振は大ていこなすけれど聲色の聞づらさ風引たやうな友吉と中風病んだ
やうな山村其外かい集め五ツ六ツを元手に何店の何八とかいふ名を付て指番にはいかめしく身振こは色立舞打は
やしきつとよろしくとはあんまりむごいされど随分下から頼みあるけば人には鬼もない物青樓も眞眞にして座敷

つきの不器用なおかしいをとりへに呼にやる其當季はマア流行すがたなれと引かけて可愛がる客があらはこそ
彼是するうち垢おゆんで来た八丈の着物我ながらも見苦しく衛ない中から心安い宿房の通帳をかり松屋で取た鳥
ちりめん一反それに外飾のけしからぬ事は符丁を切て杉原につゝみ熨斗と水引仰山に飾りきのふ去旦那から貰ひ
ましたと花里中を持あるいてひけらかす心のうちそ又なく哀也箇様にして凌ぎ行うち次第二様子を覺へ客の氣に
のぞみ變に應じて壁訴訟の願言を掛れば山吹色のかん寶をめぐませ給ふ大盡のあるも不思議に捨る客あれは捨
ふ客のいつくしみにてちつと尻がぬくなるやいな始めの寒さわすれてままいそろ／＼諸藝を得たりかほで旦那と
相方との迫符を身振までしていやがらうなぎとすつほんは何所の座敷でも喰ねはならぬやうに心得腹が大きな
ると旦那モシコレ一遍あるきませふじやござりませぬかなど、手前の得手勝手な文句もみなこれ大盡をいさめの
縁なるべし

……以下原本空白……

この中はふみたまはり
 おたひわやくいひ申まぬやうに
 うれしくそんじゆ
 御心得
 そのもごふじにひよし
 まんそくいたしひ
 いもご同じ様にくらし
 りん問すこじも
 さつかひあるまじくか
 すいふんてならひ
 せい出しまたく
 文御こじまぢり
 二月四日
 おまつりの
 爺

〔編者曰ク コノ手紙何人ノ筆か定カナラズ原本ニハ 實物ヲソノマニ貼付ケルコト〕

攝陽奇觀 卷之九

口 宣 案
 上卿中御門大納言
 慶長十八年正月十五日
 宣 旨
 藤原吉次
 宜任 河内目
 奉
 藏人頭左大辨藤原孝房

攝陽奇觀卷之九

正徳年中京都に於て名代御改帳ニ
 一 淨留理 河内
 慶長十八年正月十五日 口宣頂戴右河内掾と申
 名代甥山本彌三五郎と申者ニ譲り申度旨元祿十
 五年十一月廿六日名代主妙印と申者奉願 駿
 河守様番所ニテ願之通御赦免被成い其後正徳元
 卯年六月三日駿河守様御番所ニテ右彌三五郎弟
 勘左衛門ニ譲り申度旨奉願願之通御赦免被成い

淨瑠璃諸流之祖文祿略系譜

寛永之頃世流布ス

角太夫一流之祖

薩摩治良右衛門一虎屋源大夫——山本土佐掾

江戸肥前同外記同土佐

伊勢寫字治加賀掾

文弥 治大夫 一仲等師之

永間半次河東等師之

山本等師之

一流之祖

國太夫當一流之祖

都大夫一仲一宮古路曲豆後

大和路仲大夫

豊美敏系大夫等師之

宮古路蘭八一宮蘭鸞鳥鳳軒

春富士正傳 中頃出雲

始襲蘭八之名

故世代大夫 後豊後

中頃豊前ト云

宮蘭等師之

○石川五右衛門辭世

石川や濱のまさこはつきるともといふ此歌世俗盜賊の張本石川五右衛門の辭世なりと思ふも多し亦小文才者は笠淵双級巴の戲文の作者並木宗輔か讀たる歌といふ左ニあらず此うたは近松門左衛門の作文傾城吉岡染といふ院本五たん目釜烹の段にあり 本文次ニあり 並木宗輔此文段をとりて辭世の歌世に盜人の種は盡せしとあるを盡まじと俗に近き手爾葉に添削せしは並木氏の發明也また石川五右衛門の戲文の權輿は松本治太夫座の淨瑠璃に石川五右衛門といふあり松の落葉集淨瑠璃の部にあり 本文典に出ス

〔編者曰ク次ノ一項ハ當時ノ板本ヲ一丁ニ貼付ケアリ〕

日本國に古今ふ雙の盜賊なれ共。たくんでは是を志はじめず。我人ぬすみのはじまりは。おせんとききからもつてきてぬすめといはぬ斗な物。其かんにんが佛の手引そこをこらへすぬすみ取ル。それこそ天まの道引なれ。楠の大木も二ばの時はわらんべにもつみとられ。をのがまゝにまけつて後は石と成。ぬすみとても其ごとく。はじめに思ひとまらねばおだい／＼に増長し。とめん／＼と思へ共くだる車をおふごとく。車はやく心はあと。悪にをひつく善心なき。是人がいのならひ也。我ぬすみはもと主君の爲師匠の爲と思ひしが。ぬすまれた人々も主の物師匠の物むくひつもつて油ぜめ。我身斗か主師匠の子を同罪にいりつくる。是程ちかきはぢりぢやう有とあらざる石川が。ぐちと云やまひよりはぢをさらす淺ましやと。鬼の様成眼より涙を。ながすぞあはれ成。エ、よし

なき長口上そろく油へ火もまはる。てんとうのたはこと、笑はれんもはづかしく。去ながら世上の人不用心からぬすみにあふ。ぬす人はにくき人用心せぬはたはけ人。人にちがひはなけれ共皆一心のなす所。五右衛門がせいの一首のうたをきけやとて。石川やはまのまさごはつくる共世にぬす人のたねはつきせじ。火坑くわいこう變成池へんじょうちなむあみだ佛。皆々念佛頼みますと首引ふし其跡へをさなき者はかほ出しあついくと泣わめく。母はいきたる心もなくふ久吉かいとしやなふ。十悪五逆のとが人さへおひの上にはたすかる物。西も東もたらぬ子が何のとがしてあのせめぞや。諸萬人のかたく命をもらふて下されと。こゑをあけて

○石川五右衛門

浮世の世話に申なる貧の盗みに戀のうた今石川が身の上にて思ひあられてはづかしや是非に及はず五右衛門も女房には深く隠し内よりは駕のかせぎに打みせて彌之介かたらひたど二人ほう髭作りさまをかえ大小をほつかふて長刀提て明暮と安部の、堤で追剝して往來の者共を切取剥取あばる、ゆへ夫より下道につけかはり堺住吉天下茶屋大坂までの道の用心よろしく成次第に安部野は淋しくなる下略

釜烹りといふは往昔より關白大臣將軍すら憚り有と言傳ふ然るに文祿四年の頃石川五右衛門といふ者は奥州石川のものにて度々の罪人にて後には京都に登り猶又諸人を苦しめける秀吉公諸司代に下知をして彼石川五右衛門を生捕る五右衛門が母并に同類廿四人まで三條川原にて烹殺し給ふ是だに世に秀吉公の憚りを知らぬ事を嘲けるまた奥州會津領蒲生家の時すこしの科あれば毎度釜烹りに行れけるよし中興武家盛衰記に見へたりまた鶴毛衣蒲生

家の條に 台徳公御代に石川五右衛門といふ賊の張本を釜烹りに被仰付たりしとあり左あれば元和寛永の頃石川五右衛門といふ盜賊ありしを奥州蒲生家にて刑罰せしを文祿の頃豊臣家の事實のやらに附會せしにや 石川次郎

左衛門か 頼政の世界せいらく 河州石川の事 後世附會の事 忍術など金門五三桐より世界大きし …… 原本コノ所ニ以上の貼紙アリ…

同書ニ齋藤山城守政利土岐の領國を押領し入道道三と號ス斯て國政を取行ふに奢侈を究め小過の輩をも牛裂にし或は釜煎にして其釜の火を罪人の妻子兄弟ニ燒せ又柱を科人にいだかせ焙殺せしとかや …… 以下原本空白…

遊君三世相ニ 近松門左衛門作 貞享三年五月

けいせいに誠なしと世の人の申せ共それは皆ひがことわけあらずの詞ぞや誠もうそももと一つたとへば命なけうちいかに誠を盡しても男の方より便なく遠ざかる其時は心やたけに思ひてもかうした身なれば儘ならずをのづから思はぬ花の根引にあひかけし誓ひも腔となる又初めより偽りの勤め斗りに逢人も絶ず重ぬる色衣つるのよるべとなる時は初めの腔もみな誠とかく只戀路には偽りもなく誠もなし縁の有のが誠ぞやあふ事かなはぬ男をば思ひくゝて思ひが積り思ひざめにもさむるものつらやあよさいとうらむらん …… 以下原本空白…

〔編者曰ク次ノ一項ハ當時板行ノママヲ二丁半ニ互リテ貼付ケアリ〕

物の教なるぬ僕が津瑠璃人の
 ろく身をもせあるれねあふ
 丸丸も一箇世のめぐると明業
 ともそのかしくどをさうあまり花柳
 の教よ山を九三衛梅芽丸難波よ
 山を九名集つば正名をなやあふり
 おまがくへまじつびのまき弟が

津瑠璃本いらくも弟書丸
 ろ率より進よゆりせうう光
 博士素丸切まういまやうふ
 換合しく梓よ船村まじりあ
 ぶりのゆりどくあふ中よも素
 の七程らト甲じ屋をたよいら
 あひああふのまじりあふら

又美本まうつりつる本は様か
 版もく傳家れあやまりがらぐ
 むとと山なか版ああどつり
 ことりどつりし我まきよ序まきと
 りあまのそとりし海ぐつるのを
 元禄二八の月初秋とあるの月
 竹本執後様

里胡麻のこほきつるのどつり
 の章一しりまらひ毛板まのま
 くらりし整のゆりしとも見し
 のへしとて轉傳の控筆は
 墨うとりの墨よとらひと臭
 魯のよらひかしてやの山なか
 下のか葉様を作様とらうら

つゝ今執は格まゝく串の本錢
 うまゝわまゝさび核合ぢらぢら雙
 も若合さゝ思見ぢらぢらもゆゑんさ
 ちぢらぢらにけよよの球禱ぢら
 ぢらぢらもの三ぢらぢら

中秋と首九日 壬辰序

青葉は紅葉と照り露結んで爲霜の折から做戲場の破損するを工匠に命て修理するの暇泉涙に越て和田後三年の兩曲を興行さけるに彼湊は愚父越前掾弱冠の砌りより最辰を給ふの御方多く弓も引かたの諺射たりやくと當能く後三年の戦に大勝利を得たり斯て難波の花とかんはしき御最辰の方より飛札到來して内普請も成就ス早く故郷に歸りて奥州の軍記を始よと催促頼なりければ彼湊の御名残も惜けれ共いなみかたくて望日故郷へ歸れば作文の諸子各々奇を釣花をきそひ新作區して歸一の論なく所詮冬枯の玩物となさんよりは長く幾春の花となすへしと最辰を給ふ御方の任 仰個人戯具を改賤のおた巻探返し物を御覺に入ひ畢惟則温故知新の謂歟

千鎰莊應律 拜稿

かゑり花咲やこのはな後三年

〔編者曰ク原本ハコノ一項板行ノママヲ一丁ニ貼付ケアリ〕

御室上野の櫻及び難波の梅のさかりにも憎からぬあらし七三郎といへる植木屋ありてさまくの草花の種をおろし花壇をまつらい伊賀越乘懸合羽の雨覆ひ日にまた霜にいとひなく雪深き梢の冬より福壽の春をむかへ一刻千金

攝陽奇觀 卷之九

の大儲け羨ましさのまゝ、乞受ん由男舎柳の二子に語りしかは培ひ虫を振ひかゝる名花を造り成せる奈河の流れ五十五の清水灑きかけ乗懸合羽の雨覆ひまで譲與られしも道の因の實なるをや于時安永第六丁酉彌生の末の六日より咲そめて夏深見草の富貴自在徳ありて冥加あらせたまへとまかいふ

名の菊を植かへてまた日の恵み

……以下原本空白……

〔編者曰ク原本ニテハコノ項及ビ次ノ項ハ當時板行ノママヲ一丁ニ貼付ケアリ〕

京名所のふし付もあり、寶曆十二壬午歲四月 ……原本コノ所ニ以上ノ貼紙アリ……

それ音曲の道は輪に入て輪にいらす輪を離れてはなれさらめふしに節なし心に節あるはいと面白しとや古人のいひおける六藝の中にすぐれたるは宮商の聲なりあるは月待日待にもなにとなき人の耳を悦しめ千歳の思ひを延なんされは淨瑠璃の作は文にあらす言葉にあらすおしのつかひの節は其さまによるへきものを凡商賣往來は世上に持扱文字をつゝる集なるに可なるかな此人章をうちし事其身の稽古にもならむとてや自然と幼稚の玩て初學の便ともならむもの歟

浪花 某

〔編者曰ク次ノ一項原本ニテハ當時板行ノママヲ六丁半ニ亘ツテ貼付アリ〕

音曲 高賣往來 竹深を章

高賣往來凡高賣持扱文字負敷を此
目記述入以は後供々南後自深坊の
覺りの先あ望々今子大辨桂あ歌
今も位ああ清濁深上深子下深松

質と本手を考へ。貫目分厘毛拂迄。天秤をもつて分銅相違なく割符。賣買せしむべくなり。雜穀粳。糯早稻晚稻。古米新米麥大豆小豆大角豆。蕎麥粟黍稗胡麻荏菜種廻船。數艘積登せ。問屋の藏に入置。直段相場を聞合殘らず。賣拂ふにおいては。運賃水揚口錢差引相究都合。利潤の程を考へ。出入の損失あらば。是を辨ふべし。譬者。味噌酒酢醬油。麩油。蠟燭紙墨。筆等此外絹布の類。金襴縐子緞子紗綾縮緬。綸子。羽二重北絹生絹。天鵝絨羅紗猩々緋。羅脊板毛氈兜羅綿端物。龜物仕立物古手真綿。摘綿木綿麻苧肩衣袴羽織。同紐袷單物。帷子夜着蒲團蚊帳。浴衣風呂敷手拭。帛紗帶頭巾踏皮并染色紺花色。檜皮色紫鬱金木賊。淺黄茶染蒴黃蘇枋茜紅粉。處々染入紋縫散。籬の菊。立浪雪折簾水車。御所車澤湯地扇菱。輪違九曜。四目結。菊桐柏。藤。巴葛唐草。女童の好模様。恰合心得へし。武士の用具。其品多しといへども荒増の分。弓矢鐵炮鎗長刀鉞鎧兜鞍。泥障切付轡。手綱腹帶。鞞鞍覆鞍指繩。扱又刀脇差の拵。目貫絞縁柄頭。鎗鞘切羽鷄目。鏢其好隨ひ。赤銅眞鍮減金素銅鉄。象眼居紋。雕の細工猶國所時の風俗に應へきなり。唐物和物の家財珊瑚瑠璃。神礪馬瑠璃珀瑤瑁水晶青貝。卓。青磁の香爐堆朱の香合。香盆。蒔畫。梨子地の硯箱。文庫文臺筆架硯屏。文鎮磁石南京石。目鏡印籠巾着。次雜具葛籠挾箱。長持櫃巨棚筆筒。屏風衝立襖障子簾。幔幕。檜折敷。湯桶切立辨當食籠。重箱提重行器皿鉢。盃。間鍋德利錫庖丁生膾箸燭臺行燈。挑燈短檠藥罐鐘子。茶碗。茶柄杓。鹽椀。搔帚。碓。確。箕飯銅編笠傘。木履高直下直。時所見合。賣買たるべきなり。藥種香具の事。伽羅麝香。龍腦樟腦沉香人參。黃菁甘草肉桂丁子。川芎白檀。黃連當飯巴豆。蓮肉柴胡。紫苑茴香陳皮杜枝。三稜莪朮。牽牛子兔絲子貝母。半夏。天南星細辛獨活麻黃續斷子。藿香大戟。枳殼白芷石斛阿膠羌活。大黃檳榔子。杏仁桃仁。阿仙藥。硫黃明礬

焰硝綠青辰砂。練藥粉藥散藥。膏藥。全以質の藥種。用ひす量入。これなきやう正直。第一也。其外山海の魚鳥鶴雁鴨雉子鶉。雲雀白鳥。鷺鷥鳩。鴟。鯛鯉鮒。王餘魚鱸鱠殘魚鱧鱈。魴鮑。鱒。烏賊辛螺榮螺蛸海月。海老牡蠣蛤馬刀。蜆鮑鮓鮓干鱈煎海鼠。鯨。百尋錫鹽。鯉節。鱈鯉等也。諸國名物際限なきによつて。是を略せしめおわんぬ。右品々前後混亂たりといへども。唯初學の童。平生取扱べき文字迄。思ひ出るに任せ粗筆を馳也。抑。商賣の家を生る。輩。幼稚の時より。先手跡算術の執行。肝要たるべき者也。然而歌。連哥俳諧立花蹴鞠茶湯。謠舞。鼓太鼓笛琵琶。琴。稽古の儀は家業餘力有。折々心掛相嗜べし或は。碁將碁雙六小歌。三絃線。酒宴遊興に長し。或は分限におほせず。衣服家宅を鏘。泉水築山樹木草花の樂而已。金錢を費事。無益の至り。惣て見世棚奇麗に。挨拶。應答。饗應。柔和たるべし。大に高利を貪人の目を掠。天の罪を蒙らば重て。問來る人稀なるべし。天道の働を恐輩は。終に富貴繁昌子孫榮花の瑞相也。倍々利潤疑ひなし仍而。如件

.....以下原本空白.....

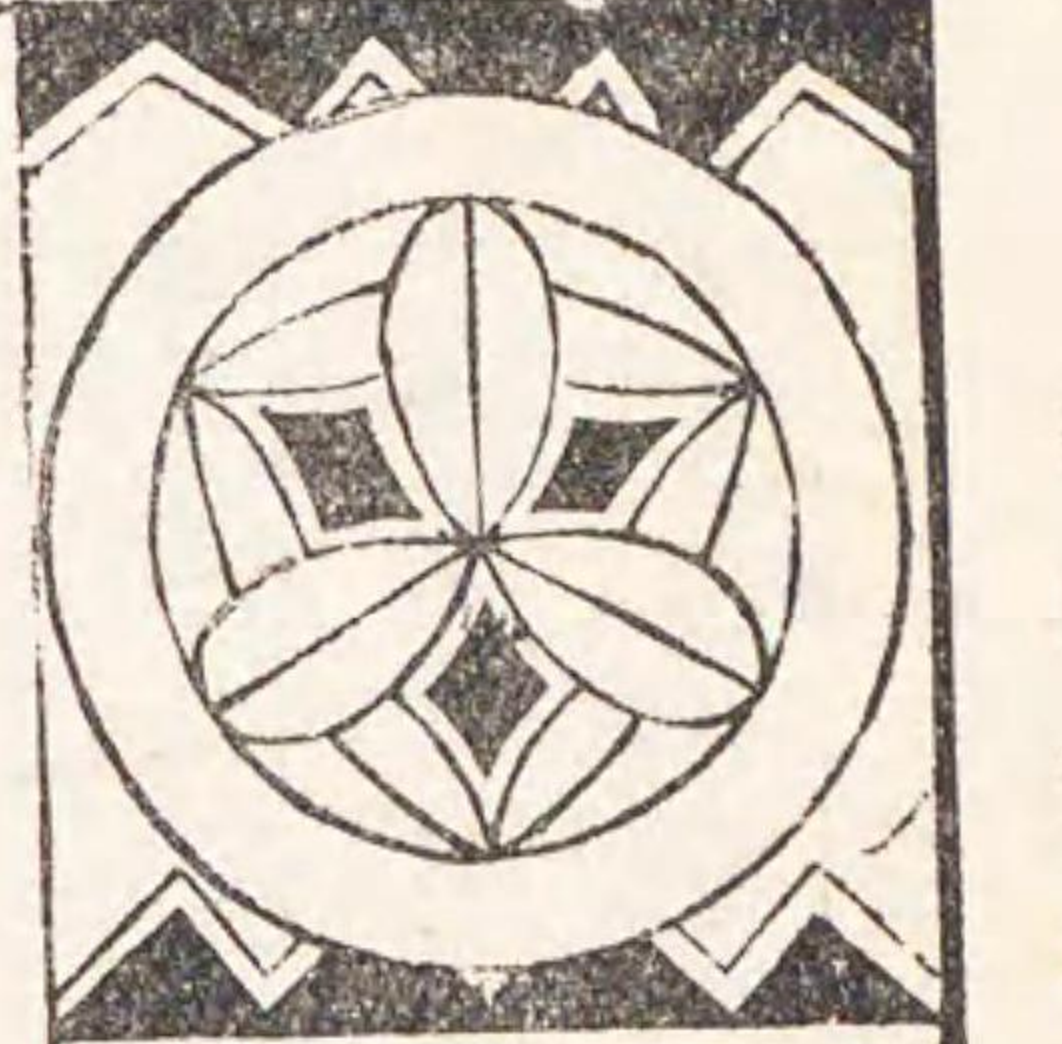
し アト ハ、ハ、これはこそ筑前じやイヤよふ見れば筑前でもないひら嘉じや シテ これも一ふしやらすはなるまい 近江源氏 おまへばかりの子かいな。わたしがためにも子しやはいな アト ハ、ハ、是は中々よいなぐさみじや。アリヤ綱太夫でもない喜代太夫じやか。但し盗人かゝらぬ シテ コリヤ喜兵衛を一口やらすはなるまい 喜代太夫 鉢ノ木やどりがなといふかほのそれにはあらぬこいへの軒。たるきまはらにかたふきし ゆきおれ 雪折たけの上ケすとや アト まんまと喜兵衛をやりおつた。是は中々自由なこへじや。ずいぶんむつかしいものをくり出してくれろ。ア喜代太でもないアリヤ綿武じや シテ これも一ふしやらすは成まい 錦太夫 役行者につこり笑ふおさな子の。いかにくわんせかないとでも アト イヤく錦じやないアリヤ政太夫じや シテ またさこばてやらすはなるまい 政太夫 原身はあらいその。鳥守と。くちはつる後のよ迄かたみとおほしめされよと アト されはこそ十兵衛をやりおつた。イヤまたよう見ればあれは大和じや シテ 是も一ふしやるふ大 和 和たとへていわはみやま木と都の花 アト ハ、ハ、いやく大和にはちとうけとられぬ。あれは岡太夫じや シテ 是も一つやつてくれる 岡太夫 絹川 シテ まよふてきましたあいおやくの。きつなに引れてきたわいなと アト いやく又兵衛ではないアリヤよこぼりの源七じや シテ コリヤ染太はを一トくちやらすはなるまい 染太夫 此あけほのはちてのやま。さそ父こひし母こひし戀しくとなくはめいどの鳥かへ アト ハ、ハ、尤らしうやりおつたイヤヨウ見ればやつぱり鐘太夫じや シテ 是も一ふしやらう 鐘太夫 雁金 シテ 身の言わけをするてまではよふ行のかはたらきしやと アト イヤ中々かね太夫じやない君太夫じやそふな シテ 嘉七じやといふ是も一口やろう 君太夫 染出もせぬ谷の鶯や。なくね志のびて聲さへも志やうしのほねみくたくるおもひ。見ぬふりするも又志んみ アト まんまと嘉七をやりおつたイヤ咲太夫じやははいや シテ 三右衛門ばを一つかたらすはなるまい 咲太夫 道念 シテ イヤまた有ル々々道念かたくはつに出た時。とうれくと アト 言すにたんと入るか。何か扱々 アト イヤく咲太夫はあのやうな聲ではないあれは筆太夫じやははいや シテ 筆太夫じやといふか

佐介はちとやりにくい 筆太夫 千ねんも萬ねんもかわらぬちきりとおつしやつた。そのやくそくは偽か。うきよの 妹春山 わけもわきまへぬ 在 在 所 有 の わたしでもい、かはした事わすれはせぬ。あんまりむごいと取付て涙さきたつうらみ アト こと アト さてあつぱりとやりおつたイヤ筆太夫でもないアリヤ此太夫じや シテ さまくの事をい、おるこれも一ふしかたらずはなるまい 此太夫 國のおきてに一引つゝみせしめとして給るかせては少のつみほろほし アト 扱々ことく、面白うかたり 信長記 おつた。イヤくそちは源四郎ではないか。 シテ めんほくもこさりませぬ アト イヤくゆるすく、今の小あみのちやらねをきいたう シテ へは此秘書をそちにつたゑるぞ シテ すりやわたくしにくたさるゝか アト 中々 シテ 是はありがたふござります アト 家内の者の見とかめぬら シテ ちはやかへれ シテ かしこまつてこさるいさめてたら淨るり萬歳をかたつてかへらふ アト まんさい アト 萬ざいとありがたかりける御 アト たま物一本の柱は。いこくへ 渡 渡りし 國 國性爺。二本のはしらは日本振袖。三本のはしらは三莊太夫。四本の柱は アト のはらかつせん。五本のはしらは五畿内安全。八重。九重のうち迄も納りひく君か代の千代にやちよを。さ、れ アト 石のいらい壽納ける。

〔編者曰ク コノ一項ハ當時板行ノママチ原本五丁ニ亘リテ貼付ケシモノニテ、最初ノ紙ニ おどけ淨瑠璃は竹本男徳 齋妙を得て數種の戲作世に行はるまた其後 松平耳鳥齋と云 妙也 ト原本ニハ書入レアリ〕

〔編者曰ク次ノ項ハ原本ニハ當時板行ノママヲ二丁ニ亘ツテ貼付ケアリ 而シテ最初ノ所ニ 石井飛驒人形ノコト 年鑑

見合包ム袂のひだの掾ふたつづかひの手妻にもかゝるなりふりうつすとも此思ひをはよもあらじ ト原本ニ書入アリ〕



本座 細音

石井飛騨 伊藤出羽

日本 又山 達任守儀養

上ノ儀 二ノ儀

竹田 竹田 竹田

竹田 竹田 竹田



〔編者曰ク 次ノ頁ヨリ以下九頁ノ插圖ハ原本ニハ表題ナク 當時板行ノママヲ五丁ニ亘リ貼付ケ
 アリ 而シテソノ〔第二花ぬすひと〕ノ所ニ
 花盗人 泉式部 我名をは花盗人といはゝいへた
 だ一枝は折て歸らん トノ書入アリ〕











第一

後太平記 四十八卷目

津國女夫池

色座敷 大あたり

作者近松門左衛門

名代都万太夫 座本澤村長十良

序詞
 笑を買ふ木のもと花すでに老たり。まゆをゑがくまどの前月猶残り。ゆうゑんくはんちよのたのしみ君おだやかに民やすく。國傳へます秋津御代お、き町の御宇。あしかゞ十三代の武將左大臣源のあそんよして公。のうそ高氏公のききうをつぎ。國家の政道四惡をまりぞけ。洛陽二條室町に殿造。五美を尊給ひけり。みだい所は大宮の大納言秋忠卿の御娘。ごぞの冬より御くわいにん。永録七年二月中旬御着帶の御祝義とて。在京の諸大名我もくと出仕有。御れん中ば卷上君御出の所ニ御ちうと秋忠卿ちよくしに御らいらんと申上れば。三好長慶がちやくしあはぢの守國長。御れんに向ひ。いつもの通君も御座を下らせ給ひ。御たいめんといへ共返答なければ。國長せいて御れん引のくれば。君の御ちやていよしあき武將の御出立。は何んじやにせ將ぐんのばけぞこないと。御手を取て引おろせば。人々あきれゐる所へ。一つのおりをかきすへ。ちよくし上座ニつき給へば。淺川左京藤たかつ、あんで。よして公夜前より風しやの御ちよろうニよつて。よしあき名代としてちよくしをむかい奉ると。ちゆびをつくろふ詞に付て。せんじを奉して兄よしてニ申聞せいはんとぞのべ給ふ。秋忠ちやく取なをし。此度江州かた、の魚人。一身兩頭の龜をつり得て。朝廷ニさ、け奉る。ふしぎの龜の出現以上六か度。年號を靈龜神龜と改元迄有しかど。兩頭の出たる其れいなし。うらべのかん文善惡分明ならず。武家の評義とのちよくでうとのべ給へば。藤たかおりをひらけば一體ニ二つの頭。ゑを諍くいあふ有様。よしあきよ、手を打。

ふがくのあら武士評定おそれ有。秋忠聞召よして御所らうなれば。追てちよくたう有べしと。座を立給へば中門迄送り。御座ニ入らんとし給へば。國長御手を取引すへ。なふ弟君米は人の性命をやしなふ寶なれ共。わらはくつわらんぢと成ふみにじらる。米とわらとは同恨なれ共。米のまねのならぬが天地の定り。御舍弟なればとて將軍の出立はむほんよな。兩頭龜は兄弟天下諍の印。サアお立と引立る。所ニ御めのと子海上太郎やりとけはなしおどり出。國長をひつつかんでどうどなけ。身が殿を逆心と云口引さかんとせりあふを。よしあき海上をおしあづめ。君をまなび上段ニ座したるゆへ。むほんと見たるは尤。折しも兩頭の龜出現。返答口をつぐむ斗ごと。さしそべぬいて角びたい。みどりの御ぐしふつと切。エ、淺ましや兄よして公天まの見入か。九條の遊女町へおと、ひよりお出今日のことふぎ人ばしかくれ共。ゑいふし御正氣なしとの便。はやかたふは出仕。みだい所と相談にて此出立。兄の御はぢ云ちらし。一時も御てんにあしはとめぬヤイ海上供せばかん當。藤たかニまたがい忠節をわする、など。つつと寄龜のかたくびずつはと切。サア此上は諍べき者もなく天下太平とちよくとうせよ。我は是より三がい坊。此龜は申請池ニはなち。成佛ノ縁むすはんと。すでに出んとし給ふ所へ。門住所の方よりなふ若君申々と。父志ゆりの入道長慶御前ニひれふし涙をうかめ。我らとつく出仕せば御ぐしは切せまし。藤たか殿海上太郎。なせとめてくれられぬ。不忠成せがれゆへ。六十二あまる入道が數年の忠義無に成し。是へ參れ國長。はつと父が前へさぐる頭を打おとし。たふさつかんでさし上る。よしあきふりかへり。我所存有てのほつ心。國長づれにあたつて切かみニあらずと。見かへりもせず立出て。すぐに又入法の道。ひぢりの道も國民の治る道ぞ。思ふこと。みだい所の御ときは。君のお手かけ梅がへ初ぎく初雪を。ねたみなく。きとくほうしニ顔つ、み。い



づれをそれと。人の見よりも嵐吹。柳が枝ともつれ合。かちをひろひもお身ごなし。やしき預り四五右衛門にけきたり。三好の家老松永だん正殿。私をころさふとなさるゝゆへ。にけるも君の御奉公。みだい聞召。きどくほうしきせ女の中へかくし給ふ。所へだん正來り。四五右衛門めがみだい様へ心かけ。つればしらふと。おなんど金取しと云ば。みだいでんし。引出し給へば。藤たかのけらいみきの進來りかゝり。中へ入あつかへば。せうこはふところにて文有と云。せひなふ取出すをみれば。みきの進より。おく女中きよ瀧への文。其まゝかくすを。だん正は。清瀧が親岩成力之介が申は。娘が不義のおつと有。せんぎを頼むと申ゆへよ。扱は四五右衛門取持みきの進不義のがれまいと云ば。みきの進清たきをよび出し。文取出しかくごのてい。みだいらんじ。はてさいはいじや。清たきをやる女房にもちや。おれがゆるす上は不義ではないぞ。二人はあいほれ悦べば。だん正清たきニ戀有ば。はら立共せふ事なく。あたまをかいてかしこへ入。みきの進つゝあんで。主人藤たか申越ひは。よしとて公御てうあいのけいせい大よど、申女。三好入道が九條の町を請出し。かれが娘ニし。今暮御所へ入。是をとどむる事みだひ様の力ならで叶ひがたし。早々御所へ御供申せと主人が口上。お手かけ衆清たき迄。入しては大事と。みだい所たき付られてもゆる火の。お顔もあけのめに涙。道をはやめて。立歸る。かい上太郎ち兄弟のよしあき公御ほつ心の。御行急尋んと思ひ立。主君の御てん御いとまごいと。むろ町の御門見渡せば。高でうちん立ならべ。新みだい様御こし入。岩成ちから。馬ふち團八御こしぞへ。はしりかゝつてのり物ノほうひつつかみ。室町殿御所があけや入かと。戸をけやぶればよしての公。跡ニつゞいて大よど出る。武將それぶちふせよ。上意成と聲をかけさんぐにぶたせ。大よどが手を引入給へば。御門はたとさす。上意と云天下のるせいせひもなしと。

はがみをなす所へ。櫻の枝づたひ。へいこしたをみれば見だい所。御くはいたいの御身いざ御供。いやくはない名立られてはむねんと。行急ちらす落給ふ。かい上も御祝の石を參らせんと。立石うんとなけ付れば。けやきの戸びら打ぬく。やぶれより團八くびさし出すをひつつかみ。ふつつとねぢ切是今晚の進上と。やのかた前ニかつはとなけすて。うらみを残してかへりけり

第二

君が代につく共つき米麥の。都ニ通ふとばなはて。藤たか長慶給はつたる。馬草かりばの領ざかい。さいめのまん中ニ女の志がい。つらのかははぎ。くはいたいののはら帯。内ニこめたる御さんの守。願主よしと有しゆへ。みだい所とだん正云共。みきの進ふちん残して歸りける。なつ冬ちらぬ室町の。御所ぞ榮花のおく御てん。大よどがきけんなをしに。手かけ三人が首打だいにのせ。岩成ちから御前へ上れば。よしての公。なんと大よど面白かとの給ふ所へ。いつぞやとばにてみだい様をころしたとが人成と。だん正めしうとちらすへ引せける。長慶藤たか立合せんぎせよと有。めしうと見上お久しやコレ殿。昔は君が打露に。命ヲつなぎし。きりくすの佐傳。たいこ持こそいたせ。命はかねて賣たもの。申さぬくと。名さゝぬ斗に君をみる眼。長慶おれたく。だん正首はねよ。藤たかおさへ。白状させず打んとは。なぞかけるやうにぬかさ共まつすくニ申せヲ、頼手は殿様。大判五十枚と。大よとみだいに成たら。大名ニせふと有印と云へば。君御身もふるひみへければ。長慶白状の上せひニ及す。御まうと秋忠卿へあやまり證文。御るんきよの御志あん。それだん正首うて。藤たか重てまてくく。につくいうそつきめ。どうるいのちやうほん有。せうこを以てせんぎせん。みきの進參れ。畏つてのり物ゑん先にかきすへさせ。戸をひらけば。おなかにやゝをもち月の。山のは出るみだい所。よし

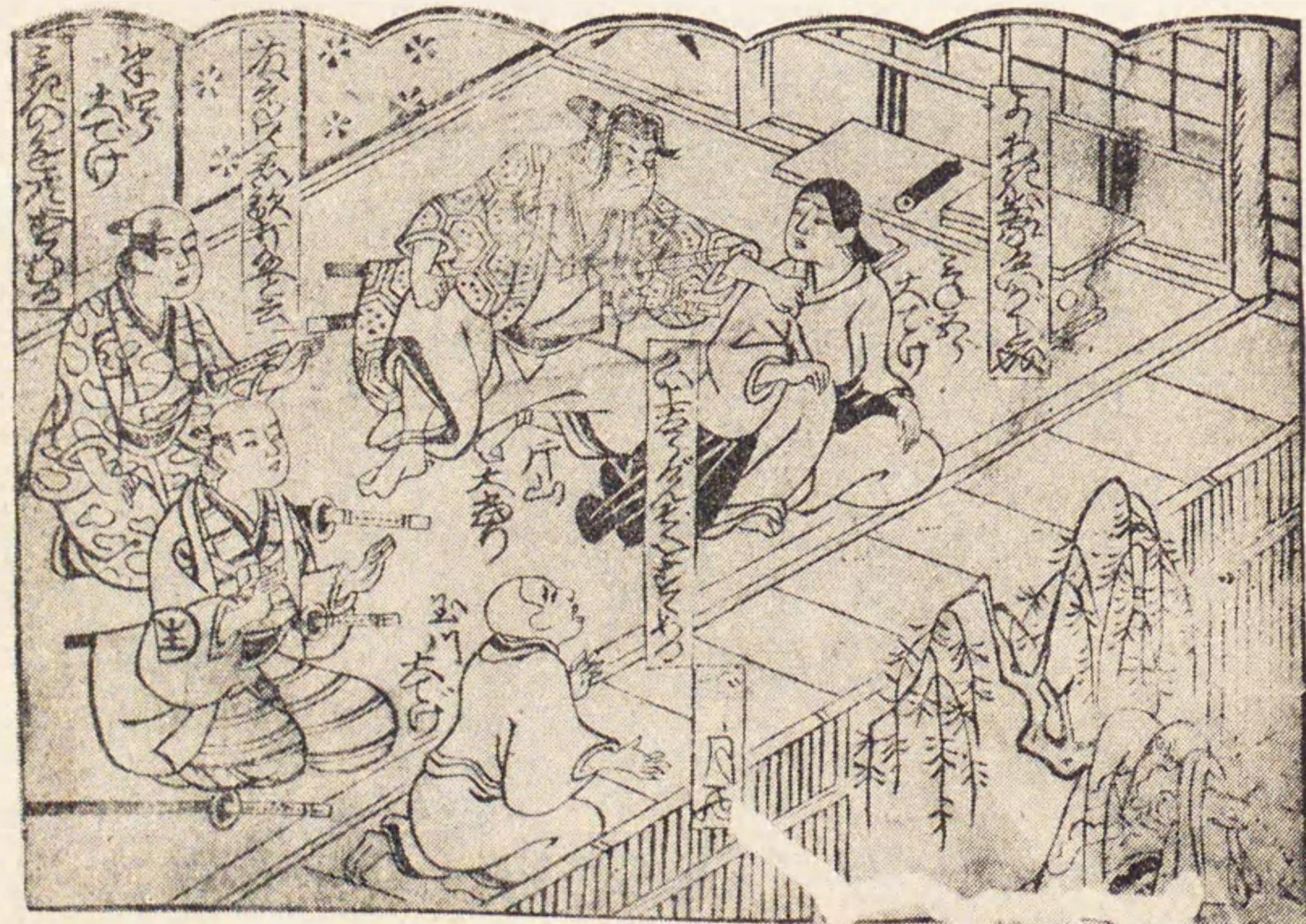
てる公けでん顔。入道がまぶい顔。だん正めしうとの首打ば。藤高は。そこつのせいばい長慶の云付か。入道涙はら／＼とながし。ちやくし國長が首討程の長慶偽りは申さず。みだい所ノみつつう男おびき出し。かくし置と承り。こつじきの。はらみ女ころしたれば。御有所あらはれしは。某が思ふつほ。長慶おちどニ極らば切腹と刀ニ手かくれば。ア、はやまるな汝ニいさ、かあやまりなし。一こんくんで氣をはらさんと。つれてをくへ入給へば。ふちたかは是みきの進。汝と清たき夫婦のけいやく有と聞。みだい所を清たきがつほねニ志のばせよ。承るとかしこへ志のび入。所ニ大よど藤たか様と尋る聲。一太刀ぐつとさしのりか、り。人をころすをこのみもせじ。入道に頼れむほんのかたうどな。ア、お名よんで來るは其事申さん爲。御所中の侍皆入道に一み也。わしが悪人に成。みけん云人に打あけんと。一人殿の手ニかけさせ。につと笑た心の内くるしみ。只ただ殿の事／＼を



と斗にていきたへたり。所ニぐん兵四五十ぎ。追手の御門時のころ。みきの進みだい所の御手を引。清たき刀さし立のけば父ちからやりひつさけ追かくる。清たきは。親子は内證。主従はせけん相手に成ぞ。ヤアふかうのめらうと。付やりをはねて入。首討おとし親なければ。主とおつとニまかせし命と。打つれ落てけり。長慶大聲上。一子の首切誠を見せ。色をす、め氣をうばいしぞ。よしける殿切腹々々と。入みだれた、かふたりだん正よしてゐるの首太刀につらぬき。二つ引りやうのはた権平太ニかたけさせ出る。かい上太郎追かけ権平太がわだがみつかんで大地へなけころし御はたをうばひ。主君のあたをうつ迄と御所一時のけふりにまぎれ落給ふ。

第三

山のおくにぞまかぞなく成と。みきの進が父文次兵衛。福島にかんきよをちめ。妻はとせいにつむわたの。たもとの下のふじの雪。みきの進たん生の若君を。清たきにいだかせ。みだい所をかいほうし則是が父



が宅。行義つよきかた氣。清瀧と我らみつづの夫婦と聞いたら。かん當はたしか。はないきにも出すまいぞと云所へ。文次外より歸り。ム、みきの進な。君の大へん御用ニ立んと思ひしニ。京上郎つれ何用有。是は忝くもよして公のみだい所。道にて若君御たん生と云ば。ヤレこゑ高し先是へと。内へ入奉れば。母そんきよし奉るみだい所も御涙。劔の山をのかれしもみきの進のはたらき。頼むは親子夫婦ぞや。文次聞。正しき若君ましませば。追付御代に出し奉らんと。一まのおくへみだい所清たき諸共入給ふ。母立出ナウ聞ば清瀧と云は。長慶が家老岩成が娘義を守親迄討たと云。文次聞。あやうきをせざるはぐん法の第一。是へよび出しあいさつする中。一刀ニ切てのけよと云。清たき母ニさそはれ來れば。そなたは岩成さんじつの娘か。イヤ私はもとすて子。ゑりにぬい付有しとて。くれられし守本尊一寸八分ノふどう様。つゝみしふくさニ書判すへ年號月日。本の親のかたみとはだをはなさず。則こゝにと取出す。父母おどろき見れば見る程覺有。なふそもじをうんだは此か。家重代の御本尊。此判の筆者も是さんじつのと、様。二度娘悦んだ。コレ三木そなたの妹。アレ兄おやくらうまつらんかはいやと。夫婦引よせくなくば。うろく夢見しごとく。みきの進猶ぎやうてん。なぜすて、くだんしたと。うらみなけ、ば、尤々。三木が三つのとし。おぬしが生れらうにんで。ちのみ子二人よういく成かたく。女はくはほうも有物と。すつる妹。すてぬ兄。くび討と。あぶないかけんとなですれば。扱は三木様かいのハアとより外詞なく。兄はてんどう五たいニあせ。父母悦おくへ入。妻こふねこの二正づれ。もつれ合。かけひふみはづし庭の古井へ。二正つれ落さ、にけり。是ちく生のおがいの手本と。三木飛行ば妹はなれじとまとい行。こゝ、天神の池。こちらにも池。上着を木ニ打かけく。ヤア人來る。とあしの中ニかくれる。所へ文次夫婦み

だいの御手引。てうちんの光りにて。枝にかけし二人が小袖。文次みて我心のぶ念ゆへ。二人の子を池のもくづとなしはてた。元來三木と清瀧は。たね腹かくべつ。まんざらの他人。夫婦と成ニさはりなし三木が誠の父は。我らとは古はうばい。駒形一學と云武士。母は三木をうみ落し七夜の内ニ相果。間もなく我が今の此女房十七歳。子のよういくとてよびむかへ後づれの妻。ある夜一かく何者共あれず討てのきし。廿二たらでみなし子か、へさまよふ女。十五ニならば敵を尋討せと頼れ。かく夫婦と成清たきまうけしが。兄は失望有ゆへ。水子の娘捨そだてしに藤高公より召出され時めくを見。敵打やくそくたがへ。人のかはきた狐のさいごと池へ飛入。あしおしわけ兄弟かけ出引上れば。ヤアいきてゐたかうれしや。女房悦べ。駒形一學を討たるは此の文次兵衛。もとのおこりはあの女房。一家中ニさた有艶色戀せしを。一かくよび取ゆへ。手もなく討て夫婦と成し。今月今日一生のさんけ。サアうてみきの進。討れしも親討たるも親と大小をなけ出す。母立上り刀ぬき。夫の敵文次兵衛うらみの刀と切付。きつ先くはへ池へだんぶと飛入。文次兵衛もならびの池へどうど飛込。ゆん手のかいな三木の進志つかと取ば。おのれがせわは見たい若君兩人忠義忘るゝなと我うで切てはなし、どうは水そこ。名はながき世のめうと池。語りつたへて残りける

第四

心ぞゑんに引れ行。よしあき入道けいがくの御庵へ。藤高みだいにめぐりあひ。若君を三木夫婦ニかいはうさせ。海上太郎諸共庵へ立入。けんそくなされ長慶ほろほし給へと有共。せういんなければ。かい上たん氣者。其こん性とふらいで無用の口ニ風引せた。けらいでない隙取は。主でなければおそれもないと。つくゑおつ取。道ちらすのづくにうめとさんく打。藤高引とめ、さまく頼給へば。けいがく聞はけんぞくせふが。



あしかゝの家ノ寶。小袖と云よろいかぶと持參せしか。さんい敵入道御所やき討ニぐはいぢんと成しや。志れすと云ば物をも云ずをくへ入給ふ。かい上氣のどくがりおくへ入。なふ御坊はる給はぬ。ヤレ追かけと人々は。あしをはやめて。すてゝもめぐる世の中や。都ゆかしくけいがくは。昔の御所の跡みれば。草より草ニふきとぢ。ヤ暮まじき日のくれ。廿あまりの若男。御とまりあれ御僧と。いざなはれ行ば御所の御門に。入にける。昔のいらか其まゝに。あやうじ明れば小袖と名付しよろひかぶと。上段ニ立られたり。夢かうつゝか。諸庭には金銀のいさごをまき。色の山情の谷の戸を出て。鶯やどす梅がゑ。ませの白ぎく露ながら。手おればまがふ袖のはつ雪。御酒のきけんもよしてゐる公。夢のいびきは大よどの松のひよきか。手かけは三つの車。くるりくゝと追廻り。青黄赤白四色の玉こくうにされば。我兄のよしてると。有つる姿よろいとへんじ給へば。取上出る色座敷。梅花ひらけば。菊の花咲。雪もふり四きの御所。皆きへもとの草村ニ。けいがくはねふりの夢はさめニけり

第五 藤高海上三木の進。かせいのぐん兵引ぐし。長けい入道。松永だん正討取。あしかゝの家引おこし
つきせぬ御代こそ久しけれ

八もんじや

八左衛門板

……以下原本空白……





